

ヲキショウジ遺跡

西土佐中央地区中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書



2011.3

四万十市教育委員会



遺跡周辺航空写真



ヲキショウジ遺跡全景（XI層）



遺跡から出土した遺物（188）



遺跡から出土した遺物（245）



出土した突帯文土器



出土した石斧

ヲキショウジ遺跡

西土佐中央地区中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書

2011.3

四万十市教育委員会

例　　言

1. 本書は平成 21 年度に、高知県四万十市内において実施したヲキショウジ遺跡本発掘調査及び試掘確認調査を報告するものである。

2. 現地調査の呼称、調査期間、担当者は以下の表のとおりである。

遺跡名	調査記号	年度	調査期間	調査担当者	対象面積 (m ²)	調査面積 (m ²)
試掘確認調査	2009001	21	平成 21 年 4 月 22 日～平成 21 年 5 月 15 日	川村慎也	44,000	344
本発掘調査	2009002	21	平成 21 年 7 月 7 日～平成 21 年 11 月 9 日	川村慎也	207	207

3. 各調査は、四万十市教育委員会が主体となって調査をおこなった。

4. 現地での発掘作業参加者は以下にあげるとおりである。

試掘確認調査　秋森正久、野町和人

本発掘調査　畦地有二、上山勇、上山公一、高松良藏、野町和人、平田知己、横山芳三

5. 出土遺物等の整理作業は、四万十市教育委員会 生涯学習課 川村の指導のもと以下の参加者の助力を得た。

秋森正久、野町和人、細川節

6. 本書の執筆、編集は四万十市教育委員会 生涯学習課 川村が担当した。

7. 調査の実施と本書の作成にあたり、高知県教育委員会文化財課、(財)高知県埋蔵文化財センター諸氏よりご指導、ご助言を、また当市都市整備課、工事関係者、ならびに近隣にお住まいの方々には多大なご支援とご協力をいただいた。ここに銘記して謝意を表す。

8. 当調査に関わる遺物、写真、図面等は、四万十市教育委員会 生涯学習課 [TEL08803407311]において保管している。

目 次

原色写真図版

例 言

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 発掘調査の経過.....	2
第Ⅱ章 遺跡をとりまく諸環境	3
第1節 地理環境	3
第2節 歴史環境	4
第Ⅲ章 発掘調査の成果	7
第1節 試掘確認調査の成果	7
第2節 本発掘調査の成果	26
第Ⅳ章 まとめ	69

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

図版目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1	図33 VI～VII層出土石器	37
第1節 調査に至る経緯	1	図34 VIII層 遺構平面図	38
図1 西土佐中央地区中山間整合整備事業計画範囲図	1	図35 SX-1遺構平面図・断面図	39
		図36 VIII層出土遺構平面・断面図	40
第Ⅱ章 遺跡をとりまく諸環境	3	図37 VIII層出土遺物	41
第1節 地理環境	3	図38 VIII層出土石器	43
図2 用井地区周辺位置図	3	図39 VIII～IX層出土遺物	45
第2節 歴史環境	3	図40 VIII～IX層出土石器（1）	46
図3 ラキショウジ遺跡周辺の道路分布図	5	図41 VIII～IX層出土石器（2）	47
第Ⅲ章 発掘調査の成果	7	図42 VIII～IX層出土石器（3）	48
第1節 試掘確認調査の成果	7	図43 VIII～IX層出土石器（4）	49
図4 用井地区試掘確認調査対象範囲図	7	図44 VIII～IX層出土石器（5）	50
図5 用井地区試掘確認調査トレンド配置図（1）	9	図45 IX層遺構平面図及び平面・断面図	51
図6 用井地区試掘確認調査トレンド配置図（2）	10	図46 IX層出土遺物（1）	52
図7 用井地区試掘確認調査堆積状況 柱状図（1）	11	図47 IX層出土遺物（2）	54
図8 用井地区試掘確認調査堆積状況 柱状図（2）	12	図48 IX層出土石器（1）	55
図9 用井地区試掘確認調査堆積状況 柱状図（3）	13	図49 IX層出土石器（2）	56
図10 用井地区試掘確認調査堆積状況 柱状図（4）	14	図50 IX層出土石器（3）	57
図11 Tr-16 遺構平面図	15	図51 IX～X層出土遺物	58
図12 Tr-16 出土遺物（1）	16	図52 X～XI層遺構平面図	59
図13 Tr-16 出土遺物（2）	17	図53 SK-3・SK-4平面・断面図	60
図14 Tr-18 出土遺物（1）	18	図54 SK-5平面・断面図	60
図15 Tr-18 出土遺物（2）	19	図55 SP-16～19平面・断面図	61
図16 Tr-19 出土遺物（1）	20	図56 X層出土遺物（1）	63
図17 Tr-25 出土遺物（1）	20	図57 X層出土遺物（2）	64
図18 Tr-25 出土遺物（2）	21	図58 X層出土遺物（3）	66
図19 Tr-25 出土遺物（3）	22	図59 X層出土石器（1）	67
図20 Tr-25 出土遺物（4）	23	図60 X層出土石器（2）	68
図21 ラキショウジ遺跡の範囲	24	図61 立会調査出土遺物	68
第2節 本発掘調査の成果	26	遺物観察表	71
図22 本発掘調査範囲位置図	26	出土土器観察表	71
図23 調査区設定図	27	出土石器観察表	80
図24 基本層序整理表	28		
図25 南壁土層断面図	30		
図26 東壁土層断面図 北半	31		
図27 東壁土層断面図 南半	32		
図28 VI層 遺構平面図	33		
図29 VI層 遺構平面・断面図（1）	34		
図30 VI層 遺構平面・断面図（2）	35		
図31 VI層出土遺物	35		
図32 VII層出土遺物	36		

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

当節では、ヲキショウジ遺跡の発見及び本発掘調査実施に至る経緯と試掘確認調査及び本発掘調査の実施経過についてその概略を記す。

中山間地域総合整備事業 四万十市は、西土佐中央地区における中山間地域の生産基盤と農業経営環境の整備を一体的にはかる目的で、平成19年度～平成23年度にかけて、中山間地域総合整備事業を計画・実施している。当該事業は西土佐用井、西土佐橋、西土佐津野川、西土佐津賀の4地区において実施される区画整理（18.8ha）、用水路設置（1,350m）、生態系保全施設の建設を主とする整備事業である。

試掘確認調査の実施 事業の実施にあたっては、埋蔵文化財の有無について情報の乏しい地域における土木工事が多く計画されていた。これを受けて、埋蔵文化財保護の観点から、計画段階より事業課並びに教育委員会において事前協議・調整を行い、遺跡の残存の有無及びその取り扱いについての基礎資料を得るために、試掘確認調査を実施することとした。試掘確認調査は事業実施とスケジュール調整をしつつ、平成19年度から平成21年度にかけて実施し、当該調査の成果により、新たに四角田遺跡の範囲が拡大し、トイクラ遺跡、ヲキショウジ遺跡が新たに発見された。とくに、



図1 西土佐中央地区中山間総合整備事業計画範囲図

用井地区において確認されたヲキショウジ遺跡については、遺物包含層が厚く残存し、良好な残存状態であることが明らかとなった。なお、ヲキショウジ遺跡関連の試掘確認調査については、第Ⅲ章にて詳述することとし、その他の中山間地域総合整備事業に関係する試掘確認調査の成果は、『四万十市文化財調査報告第4輯』にて報告している。

第2節 発掘調査の経過

本発掘調査の実施 用井地区において実施した試掘確認調査の結果と事業計画を照らすと、遺跡の大部分が工事によって損壊を受けることが明らかとなった。これを受け、産業建設課、教育委員会、土地所有者等関係者間で検討が重ねられた。その結果、盛土によるかさ上げによって保護層を確保するよう計画の一部を変更することとなり、計画変更によっても損壊を免れない207mについては、本発掘調査を実施することとした。

ヲキショウジ遺跡本発掘調査は、調査対象となる207mに対して、平成21年7月7日より同年11月9日にかけて実施した。調査実施にあたっては、四万十市教育委員会が調査主体となり、作業員7名（延べ人数）が調査に参加した。

なお、発掘調査実施期間中には、近隣小学校からの見学や発掘体験、市民向け普及啓発事業等を随時計画し、多くの参加を得た。

整理作業の実施 本発掘調査で出土した遺物並びに遺構については、平成21年度から平成22年度にかけて整理作業を実施した。平成21年度は、現地での発掘調査終了後より遺物の洗浄、注記、復元等の整理作業を行い、平成22年度には教育委員会職員の指導のもと整理作業員3名が参加して報告書刊行に向けた整理作業を実施した。



市民向け普及啓発事業実施の様子

第Ⅱ章 遺跡をとりまく諸環境

第1節 地理環境

市域の概観 高知県四万十市は高知県の西南部に位置し、総面積 632.42k m²を測る轄多地域の中核として発展してきた地方都市である。市域の中心には四万十川が南流し、土佐湾に注いでいる。市域の地勢は四万十川に中筋川、後川といった支流が合流して川幅を増し、中洲や中規模の平野が形成される沖積低地と、各河川が山間を蛇行しつつ河川際に狭小な平地が形成される中起伏山地とに大別できる。

用井地区 調査地付近は、四万十川中下流域の転換点からやや下流に位置し、山間を流れる四万十川に江川崎では広見川が、下流側では津野川川が合流する。用井付近では河川の形状はほぼ直線的で、下流側へ向かって緩やかに西にカーブし、津野川川合流地点直前で大きく湾曲する。

ヲキショウジ遺跡の立地する用井集落は、四万十川左岸に河川と平行して広がる集落である。丘陵が第一稜線から河川際までせり出すため、平野は狭く、家屋は山裾付近に点在し、前面に市道が南北方向に伸びる。農地は主として道路から河川までの河岸段丘を利用して営まれるが、四万十川本流に注ぐ谷地形の両岸等も水田として利用されている。

当該集落も四万十川沿いの他の多くの集落と同様に河川の氾濫による影響を多大に受けてきた地域である。出水期には集落内の耕作地の多くが水没することも珍しくない。

遺跡の立地 ヲキショウジ遺跡は道路西側の河岸段丘上の水田地で発見された。河川へと比較的急な勾配で傾斜する農地の中位から河川に向かって広がる遺跡であり、北側には丘陵から注ぐ谷筋が通る。このため旧地形は緩く北側に傾斜する傾向が看取される。遺跡周辺の水田は筆まとめ等をすでに実施しており、現在は概ね平坦な形状を呈しているが、旧地形は四万十川に合流する谷筋が複



図2 用井地区周辺位置図

数存在したという。これは現行の水田で湧水や帶水の著しい筆と比較的乾燥した筆がまだらに分布すること等からも窺い知ることができる。なお、ヲキショウジ遺跡一帯はよく乾燥した筆が多い場所であり、河川に向かって舌上に伸びる旧微高地に位置するものと考えられる。

また、ヲキショウジ遺跡を含め、四万十川流域の遺跡を考えるうえで、河川との関わりは重要な視点である。遺跡の立地や漁具の存在等検討すべき事柄は多岐にわたる。流路の形状や流量、河床の状態、山林の植生等単純に過去と比較できない要素も多いが、丘陵に規定され大きく川幅を変えないと想定される四万十川では比較的遺跡形成期に近い景観をイメージすることが可能であろう。

第2節 歴史環境

縄文時代の遺跡 ヲキショウジ遺跡の立地する西土佐地域周辺は河川沿いに縄文時代の遺跡が点在することが知られている。遺跡の分布は四万十川本流域にとどまらず、目黒川流域、黒尊川流域等支流域にも点在する。分布する遺跡の多くは遺物の表採される散布地であり、各遺跡の詳細は明らかでないものが多いが、採取される遺物等から縄文時代後期の所産と考えられる遺跡が目立つ。当該地域では、試掘確認調査も含めて発掘調査の行われた例は希少であり、目黒川流域の大宮・宮崎遺跡、家地川流域の車木遺跡等数例が知られるのみである。これら、発掘調査の実施された遺跡も主として縄文時代後期の遺物を出土する遺跡であり、当該期に遺跡数の増加が見られたことが分かる。また、これらの遺跡から出土する石器の中には姫島産黒曜石を石材とするものが含まれており、縄文時代における九州地方との交易を裏付ける資料として注目される。

しかし、続く時代についての資料は少なく、弥生時代における当地域の動向は未だ明らかでない。

なお、用井周辺では図3に示す弘岡遺跡や平口遺跡といった表面採取遺物によってその存在が知られる散布地が存在しており、周辺に縄文遺跡の存在する可能性は高いものと想定された。

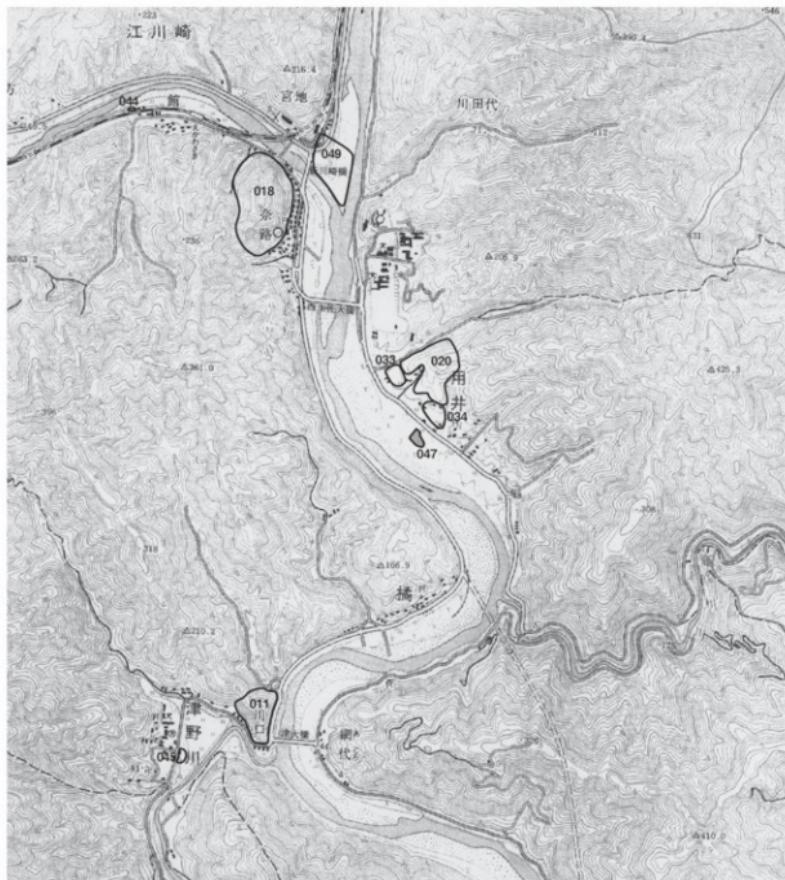
山城の分布 中世を迎えると当該山間地は下山（郷）と呼称されるようになる。とくに15世紀下流の中村に京都より一条家が下向すると、記録に当該地域の中世城郭の名称が散見されるようになる。図3に記した高手之城跡、用井城跡、辰巳城跡は当該期の城郭である。

この他にも一覚陣跡、津島陣跡、小串城跡、閑善城跡、北ノ川城跡、勝城跡、江川城跡等多くの城郭の存在が知られている。とくに長宗我部氏の侵攻により伊予への進路となった当該地域では、中村・津島・鬼北方面へと続く幹道周辺に中世城郭が密に分布する傾向がある。なお、ヲキショウジ遺跡の東側丘陵に立地する用井城跡は、一条氏統治期には領主として用井兵太亮、用井常陸守七兵衛の名が記録に残る。

なお、河川の見通しの良い丘陵上に数条の堀切と曲輪等で構成される山城は、西土佐城のみならず、



辰巳城跡の堀切



047 ラキショウジ跡 011 辰巳城跡 018 高手之城跡 020 用井城跡 033 弘岡遺跡 034 平口遺跡
044 千度田遺跡 045 四角田遺跡 049 宮地道路番号は道路市町村番号の下3桁を表記している。

図3 ラキショウジ跡周辺の遺跡分布図

市内に多く分布しており、埋蔵文化財包蔵地の中でも多数を占め、市内の歴史や集落形成の過程を検討する上で重要な素材となっている。

森林資源の利用 『大乘院寺社雜事記』には文明11(1479)年に土佐一条家より下山の木材が京都一条家に送られていることが記されており、中世の段階から当該地域が木材の産出地として知られていたことが分かる。近世に入ると森林は藩管理のもと御留山として伐採等が厳しく管理され、林業に関する物資や技術の流出を防ぐため、伊予との国境には多くの関所跡が設けられた。幡多一円では、県境に位置する柄原町及び西土佐地域に最も多く関所跡が存在する。しかし、西土佐地域では文化的な伊予との交流は根強く、祭事、芸能等に伊予との関係性を看取することができる。

また、下山郷は下山上分、下山下分に分けた統治が進み、各地区を統治する大庄屋は江川（現江川崎周辺）や津野川に置かれた。用井地区の上流側、下流側に大庄屋が居する状況は、当該地点付近が下山郷における中心的役割を担っていたことを示唆するものであり、その上分下分の間に位置する用井村は幹道に面した集落として機能していたものと考えられる。なお、区分では用井村は下山郷下分に含まれる。

土佐藩の産業育成に尽力した野中兼山は、森林資源の開発と保護に力を入れ、山林管理を充実させた。間崎文書によれば、下山郷下分における御留山は 67 箇所に及び、用井地区にも川田代山・川田代留賀山の 2 箇所が指定されている。

近代以降の様相 森林資源の利用は近代以降の薪炭需要の高まりと共に西土佐地域に大きな経済的発展をもたらすことになる。とくに四万十川流域の国有林事業の拡大は、人口の流入や関連産業の発達など多大な影響をもたらした。山間からの木材搬出のために支流沿いに森林鉄道が敷設され、トラック輸送が主となると道路の敷設が進行した。この輸送転換期に四万十川流域では安価に制作できるコンクリート橋として沈下橋の架橋が進められ、期を同じくして河川を利用した運輸が終焉を迎える。

河川との関わり 『四万十川』が知られるようになったことで、川は観光資源としての役割を担うことになったが、流域に暮らす人々との関わりは徐々に希薄化する傾向にある。しかし、用井地区を含め山間部の集落では、現在も川漁や祭事等川との関わりを繋ぐ生活が保たれている。ゴリ、エビ、アユ漁といった漁労の習慣や各漁を支える組織、川へと続く小道等、遺跡からの出土遺物のみでは語り得ない河川との関わりが現在も継続している。

第Ⅲ章 発掘調査の成果

当章では、ヲキショウジ遺跡に係る調査成果を、遺跡発見に至る試掘確認調査と、中山間地域総合整備事業実施に伴う本発掘調査の2節に区分して詳述する。

第1節 試掘確認調査の成果

（1）試掘確認調査の実施

調査の概要 中山間地域総合整備事業の実施に先立ち、計画地における埋蔵文化財の有無及び残存状況を確認し、保護措置の基礎資料とするため、平成19年度～平成21年度にかけて試掘確認調査を実施した。

この一連の試掘確認調査のうち、用井地区での調査は、平成20年度（遺跡調査番号：2008013）、平成21年度（遺跡調査番号：2009001）の2度に分けて実施された。このうち平成21年度に実施した調査からヲキショウジ遺跡の存在が明らかとなった。

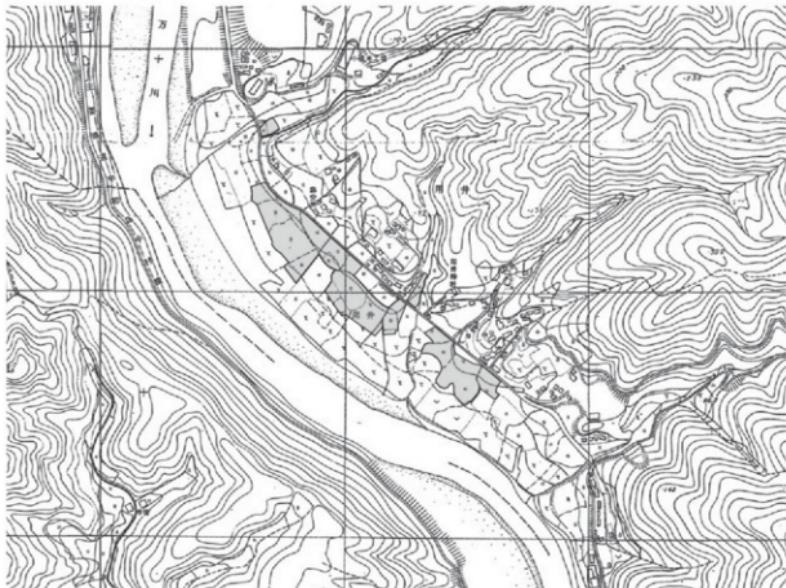


図4 用井地区試掘確認調査対象範囲図（1:10,000）

当節では、この遺跡発見の端緒となった平成21年度調査(2009001)について調査の成果をまとめる。なお、平成20年度調査(2008013)については、高知県四万十市文化財調査報告第4輯にて取りまとめを行った。

調査の方法 試掘確認調査実施にあたっては、下記の要領で調査を実施した。

- (1) 調査対象地内に任意のトレンチを68箇所設定し、耕作土及び無遺物層を重機によって除去したのち、人力を併用して堆積状況の確認・遺構の検出・遺物の採取を行った。
- (2) 調査の進行に応じて土層堆積状況の実測図面の作成・写真撮影等による記録化を行った。調査終了後は重機によってトレンチを埋め戻した。

調査地点の概要 調査を実施した範囲は、図4に示すとおり、主として市道白岩用井線から河川側に広がる水田域である。近隣には周知の埋蔵文化財包蔵地、弘岡遺跡が知られており、縄文や中世期の集落跡等が近隣に広がることが想定された。弘岡遺跡は丘陵先端部に立地する縄文時代と室町時代の遺物が採取される散布地として知られており、今回の調査地点はその前面に広がる河岸段丘上に位置している。

したがって、今回の調査では弘岡遺跡に関連した縄文時代もしくは中世期の生活面の確認がなされる可能性が高いものと期待された。

なお、当該地区においても調査対象地はすべて水田として利用されており、筆の形状は旧来の地形に沿ったものが多い。地元での聞き取りによれば、筆まとめ等の行われた箇所もあるものの、大規模な改変が実施された経過はないとのことであった。

堆積の状況 用井地区における土層の堆積状況は河川に近接するにも関わらず比較的安定した水平堆積が多く観察された。

現耕作土を除去すると、数面の旧耕作層が確認され、以下はややグライ化したシルト～極細粒砂層と褐灰色極細粒砂層が互層に堆積する。各トレンチは現地表面から概ね2m～2.5mまで掘削して状況を確認した。多くのトレンチでは、上記の互層堆積の下位でグライ化の進行した強い粘質のシルト層もしくは明橙色の縮まった粘質層、黄白色シルト(疊含む)が確認される。これらの堆積以下では人為的な痕跡が認められず、基盤層と考えて良い。なお、現在の道路に近い比較的高位にある水田については、耕作土直下の浅い場所で基盤層と考えられる黄白色シルト層が確認される場合が多い。

各トレンチの成果 今回の調査では68箇所設定したトレンチのうち、主にTr-16～19、25の5箇所のトレンチから遺構・遺物が確認された。遺物の出土したトレンチでは、現耕作土除去後の堆積層でグライ化がそれほど進まず、明橙褐色のシルト層が厚く堆積する傾向が強い。これは周辺のトレンチで、グライ化が進み水分を多く含んだシルト層が顕著に見られることと対照的な状況である。

この橙褐色シルト層は土器・石器等が多く含まれる遺物包含層であり、少量ながら柱痕や溝等の遺構も検出されている。

前述のとおり68箇所のトレンチのうち、埋蔵文化財の存在を確認したのは5つのトレンチのみである。記述を煩雑にしないため、各トレンチの配置状況は図5～6で整理し、トレンチ毎の土層堆積状況は図7～10にまとめた。



図5 用井地区試掘確認調査トレンチ配置図(1)



図6 用井地区試掘確認調査トレンチ配置図（2）

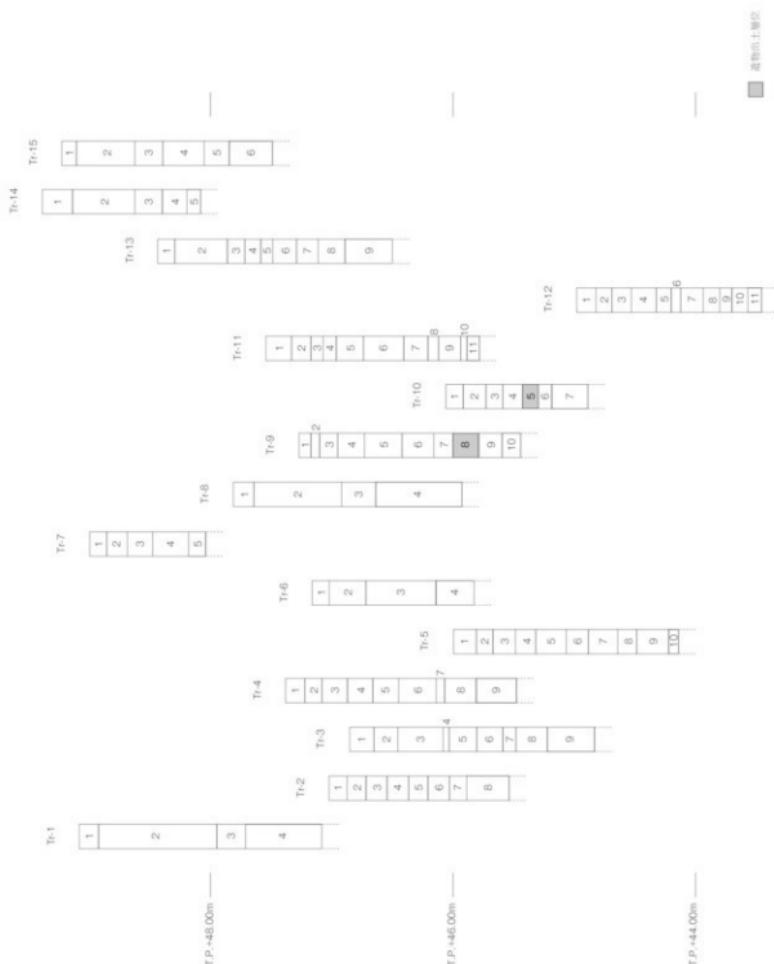


図7 用井地区試掘確認調査堆積状況 柱状図(1)

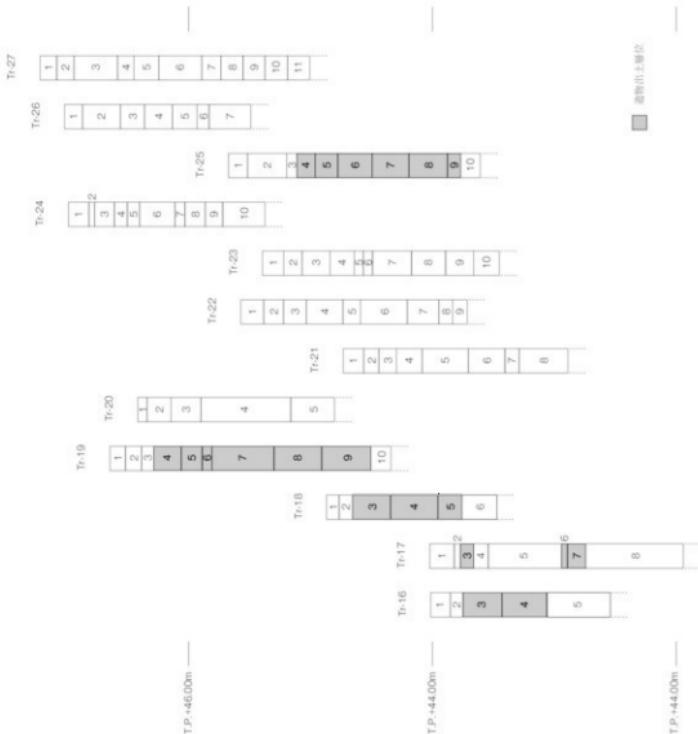


図8 用井地区試掘確認調査堆積状況 柱状図(2)

Tr-1

1. 1SY5/1 黄褐色細粒砂～細粒砂 粒土
 2. 2SY7/6/4 に高い褐色粘土～細粒砂 粒砂 細粒砂 φ10～100mm 粘質
 3. 3SY4/0 黑色灰褐色細粒砂～細粒砂 グラウイ化 分部分的堆積
 4. 4SY7/7/6 明黄褐色シルト～細粒砂 リーフ状褐色中粒砂が混在する上部にマンガン斑有 壊壁層 均質で やや強い粘質

Tr-2

1. 黄褐色細粒砂～細粒砂 粒土
 2. 黄褐色細粒砂～細粒砂 N4/0 黄褐色シルト～細粒砂混入
 3. 3SY5/0 黑色灰褐色細粒～シルト φ2～5mm 剥離層 坡面 粘質
 4. 4SY7/4/7 黄褐色粘土～細粒 疊合層 (φ10～20mm) 壊壁粒土
 5. 5SY/0 黑色粘土～細粒砂層 坡面中粒砂混入 混水堆積
 6. 6SY/0 黑色灰褐色細粒～シルト 坡面中粒砂混入 φ2～3mm 剥離層
 7. 7SY5/0 黑色粘土～細粒砂 強い粘質
 8. 9SY7/1 明オーリーブ灰色粘土～細粒砂 φ30～50mm 剥離層 ベース

Tr-3

1. 1SY5/1/4 黄褐色細粒砂～細粒砂 粒土
 2. 2SY4/7/4 に高い黃褐色細粒砂～中粒砂 粘質の練まった堆積
 3. 3SY7/6/2 黑色灰褐色中粒砂～細粒砂 粘質 ラミナ状の堆積
 4. 4SY5/0 黑色中粒砂～細粒砂 少量シルト 粘質の粘質層
 5. 5SY/0 黑色中粒砂～細粒砂 にシルト～細粒砂混入 強い粘質
 6. 6SY/0 黄褐色シルト～無細粒砂 SY3/3 混黄褐色細粒砂～シルトが下部に混入
 7. 7SY5/0 黑色中粒砂～細粒砂 シルト～細粒砂が多く混入し粘質
 8. 8SY/0 黄褐色シルト～無細粒砂 黄色シルト (無細粒砂) 混入 下部はグライ化がすみ 黄褐色を呈す
 9. 9SY6/3 オーリーブ灰色粘土～シルト 8層若干混入 下部はグラウイ化すむ

Tr-4

1. N4/0 黑色灰シルト～細粒砂 粒土
 2. 2SY7/6/6 明黄褐色細粒砂～中粒砂 若干シルト混入 坡土
 3. 3SY7/7/1 黑色灰褐色細粒～シルト 弱い粘質
 4. 4SY7/6/1 1周辺灰褐色細粒～シルト 中粒砂混入 やや砂質の粘質層
 5. 5SY5/5/2 黄褐色細粒砂～シルト 上部に黄色細粒砂多く入る。マンガン斑有
 6. 6SY5/5/3 中粒砂～細粒砂 粒理状の堆積 上部に黄色細粒砂混入
 7. 7SY4/0 中粒砂 若干シルト混入 強い粘質 坡脚土 (?)
 8. 8SY/0 黑色灰褐色細粒～シルト 細粒 (φ2～3mm) 多く混入 強く練った粘質 壓成物含む
 9. 9SY7/6 明黄褐色細粒砂～中粒砂 シルト少量混入 強い粘質 粒理少量含
系層有

Tr-5

1. 1SY5/4/1 黄褐色細粒砂～細粒砂 若干シルト混 (底土)
 2. 2SY7/6/4 黄褐色細粒砂～中粒砂 締まった黄色質 (底土)
 3. 3SY5/6/1 黄褐色細粒砂～細粒砂 やや練る砂質 層厚 (やや練った)
 4. 4SY7/6/1 黄褐色細粒砂～細粒砂 粒理状の堆積 粘質 (やや練った)
 5. 5SY5/1 1周辺灰褐色細粒～シルト 中央部に粗粒砂のうすい層有 (洗水堆積?) 締まった粘質 (頂上土?)
 6. 6SY5/5/2 黄褐色細粒砂～中粒砂 強い粘質の砂層
 7. 7SY5/5/2 黄褐色細粒砂～中粒砂 φ2～5mm 剥離層 合む
 8. 8SY5/5/2 黄褐色細粒砂～シルト 少量細粒砂有 φ2～3mm 疊合層
 9. 9SY5/5/3 オーリーブ灰色中粒砂～細粒砂 強い粘質
 10. 2SY5/7/2 黄褐色シルト～無細粒砂 強い粘質 粒分沈着有

Tr-6

1. 1SY7/4/1 黄褐色細粒砂～シルト 粒土
 2. 2SY7/6/6 明黄褐色細粒砂～細粒砂 φ30～30mm 締合層
 3. 3SY5/0 黑色裡 細粒砂～シルト含む
 4. 3SY3/0 黑色裡石

Tr-8

1. 1SY5/1 黄褐色細粒砂～シルト 粒土
 2. 2SY7/6/7 明黄褐色細粒砂～中粒砂 締まった粘質土 (底土)
 3. 3SY5/5/2 黄褐色細粒砂～中粒砂 φ20～50mm 疊合層 壊壁層有
 4. 黄褐色細粒砂～シルト φ20～50mm 締合層
 5. 10YR2/1 黑色裡 一部グラウイ化し青灰色を呈す 強い膠質 混水有

Tr-B

1. 黄褐色細粒砂～細粒砂 粒土
 2. 2SY7/6/6 明黄褐色細粒砂～細粒砂 φ100～150mm 締合 疊土
 3. 3SY4/0 黑色灰褐色細粒砂～細粒砂 シルト混 強い粘質
 4. 2SY5/6/1 黑色裡 1シルト～無細粒砂 締まった粘質 強い粘質 水分含む

Tr-9

1. 1SY7/4/1 黄褐色細粒砂～細粒砂 粒土
 2. 黄褐色細粒砂～中粒砂 締まった堆積 φ2～5mm 締合層
 3. 1SY7/6/6 明黄褐色中粒砂 均質な砂層 やや練まる
 4. 1SY7/6/3 に高い黃褐色中粒砂 均質でやわらかい砂層
 5. 黄褐色中粒砂 均質でやわらかい砂層
 6. 1SY7/6/2 从黃褐色中粒砂～細粒砂 締合層
 7. 1SY7/6/4 に高い黃褐色細粒砂～無細粒砂 締まった堆積 少量中粒砂混入
 8. 1SY7/5/1 に高い黃褐色細粒砂～中粒砂 10YR1/2 黄褐色細粒砂混入 上部の層質の付近に其分分布する 混量陶器片出土する
 9. 1SY7/6/3 明黄褐色細粒砂～シルト 粘質に 10YR2/3 黄褐色細粒砂混入 上部に多く 40% 混入する 上の層理面付近は硬く固化している
 10. 10YR2/1 明黄褐色シルト～無細粒砂 (若干粘土) 黄色の深い粘質を呈す基盤 φ30～100mm 基盤微細混入

Tr-10

1. 1SY7/5/3 に高い黃褐色細粒砂～中粒砂 表土
 2. 2SY7/7/4 に高い黃褐色中粒砂～細粒砂 やわらかい砂層
 3. 3SY7/6/4 に高い黃褐色中粒砂～細粒砂 坡面 粘質
 4. 4SY7/6/1 黄褐色細粒砂～シルト 締く練る粘質層 坡面少部分見える
 5. 5SY7/4/1 黄褐色細粒砂～シルト 坡面物有 マンガン・遺物有 Tr9の8番と対応すると考えられる 締く練まる
 6. 6SY7/7/3 に高い黃褐色シルト～粘土 5層が混入し荒れた堆積
 7. 7SY7/7/3 に高い黃褐色シルト～粘土 強い粘質を呈し締く練った堆積 ベース Tr9の10番と対応する

Tr-11

1. 黄褐色細粒砂～細粒砂 粒土
 2. N4/0 黑色灰褐色細粒砂～中粒砂 粒砂若干混入 強い粘質
 3. 7SY5/6/1 綠灰色細粒砂～細粒砂 やや粘質
 4. 9SY5/1/1 オーリーブ灰色中粒砂～細粒砂 若干シルト混 強い粘質
 5. N4/0 黑色灰褐色細粒～シルト 若干中粒砂～細粒砂 強い粘質
 6. N5/0 黄褐色シルト～無細粒砂 粘質 やや練まる
 7. 7SY5/6/1 黄褐色中粒砂～細粒砂 若干無細粒砂～シルト混入 粘質 水分多
く漏水する
 8. N4/0 黄褐色細粒砂～シルト やや練った粘質
 9. N4/0 黑色中粒砂～細粒砂 シルト混入 強い粘質の砂層
 10. 10YR2/2 黑色灰褐色細粒砂～シルトに N4/0 黑色中粒砂～細粒砂がラミナ状に
堆積
 11. 帽オリーブ灰色細粒砂～シルト 強い粘質の堆積

Tr-12

1. 1SY7/4/2 黄褐色細粒砂～シルト 粒土
 2. 2SY5/1 黄褐色細粒砂～中粒砂 締まった砂層 水分帯状に沈着する
 3. 3SY5/1 黄褐色細粒砂～中粒砂 締まった砂層
 4. 4SY7/5/6 黄褐色細粒砂～中粒砂 やわらかい砂層 φ30～50mm 粒土プロフ
ク裏土
 5. 5SY5/1 黄褐色細粒砂～中粒砂 粘質の粒土
 6. N5/0 塗灰褐色細粒砂～シルト 若干中粒砂～細粒砂 強い粘質
 7. N5/0 黄褐色～25GY5/1 オーリーブ灰色中粒砂～細粒砂 やわらかい砂層
 8. 5GY5/1 オーリーブ灰色中粒砂～細粒砂 粘質
 9. 5GY5/1 オーリーブ灰色中粒砂～細粒砂 やや練る砂層
 10. 5GY5/1 オーリーブ灰色中粒砂～細粒砂 やわらかい砂層 混水する
 11. 5GY5/1 オーリーブ灰色シルト～粘土 若干無細粒砂 強い粘質

Tr-13

1. 1SY7/4/3 細粒砂～細粒砂 粒土
 2. 10YR2/1 黄褐色細粒砂 φ30～200mm 締合 層理層
 3. N4/0 黄褐色砂～細粒砂 締まった粘質土
 4. 2SY5/5/1 オーリーブ灰色細粒砂～中粒砂 粘質
 5. 2SY5/5/1 オーリーブ灰色細粒砂に N4/0 黄褐色細粒砂が 10% 混入 締まった
粘質
 6. 2SY5/5/1 オーリーブ灰色細粒砂～シルト 締まった粘質
 7. 2SY5/5/1 オーリーブ灰色細粒砂～シルト オーリーブ灰褐色細粒砂と塗灰褐色粒
砂約 10% 混入
 8. 5GY4/1 シルト～細粒砂 強い粘質 水分多く含む
 9. 5GY4/1 シルト～粘土に 黃褐色細粒砂～シルト混入 強い粘質 水分多く含む

図9 用井地区試掘確認調査堆積状況 柱状図(3)

Tr-14

1. 10YR5-1 暗灰色無機粒鉢 ←細粒鉢 若干シルト 土上
 2. 10YR5-6 明黄色無機粒鉢 ←中粒鉢 若干シルト混入 締まった粘質の堆積
 3. 10YR5-4 にひく黃褐色無機粒鉢 ←粗粒鉢 やわらかく粘質の堆積
 4. 10YR5-4 にひく黃褐色無機粒鉢 ←粗粒鉢 堆積物の堆積
 5. 10YR6-6 明黄色
 中粒鉢 ←粗粒鉢 締まった堆積

Tr-15

1. 10YR5-1 暗灰色無機粒鉢 ←細粒鉢 若干シルト 土上
 2. 10YR5-2 黃褐色無機粒鉢 ←細粒鉢 若干粗粒混入 粗粒含む粘質層
 3. 10YR5-3 にひく黃褐色無機粒鉢 ←中粒鉢 シルト混入 倒伏した粘質物
 4. 10YR5-3 にひく黃褐色無機粒鉢 ←中粒鉢 シルト混. やや締まった粘質物
 5. 10YR6-6 明黄色無機粒 ←細粒鉢 若干粗粒混入 締まった粘質の堆積

Tr-16

1. 10YR5-1 暗灰色無機粒鉢 ←シルト 土上
 2. 10YR5-8 黃褐色無機粒鉢 ←シルト 締まった粘質 鉢分沈着 マンガン有 床土
 3. 10YR5-4 にひく黃褐色無機粒鉢 ←粗粒鉢 細粒層 堆積物有
 4. 10YR5-8 明黄色無機粒鉢 ←細粒鉢 シルト混. 粘質 3層が30~15%混入
 5. 10YR6-8 明黄色無機粒 ←粘土 若干強粘粒混入 強い粘質 ベース

Tr-17

1. 10YR6-7 暗灰色無機粒 ←粗粒鉢 肥土
 2. 10YR7-6 明黄色無機粒鉢 ←シルト 締め込み 黄化物有 床土
 3. 10YR7-1 暗灰色無機粒鉢 ←シルト
 4. 10YR5-6 黃褐色無機粒鉢 ←シルト 固い粘質
 5. 10YR5-4 にひく黃褐色無機粒鉢 ←シルト 粘質
 6. 10YR5-2 黃褐色無機粒鉢 ←粗粒鉢 固い粘質
 7. 10YR4-4 黄色 (3-4)粒 ←粗粒鉢 粘りや粘質 遺物含む
 8. 10YR5-4 にひく黃褐色無機粒鉢 (シルト) 粘質 遺物は層面付近
 9. ベース

Tr-18

1. 10YR5-2 黃褐色無機粒鉢 ←シルト 土上
 2. 10YR7-6 明黄色無機粒 ←粗粒鉢 締まった堆積 牛糞
 3. 10YR7-3 未強化粒 ←粗粒鉢 締めた粘質物 上を含む
 4. 10YR7-4 暗灰色無機粒 ←シルト 締まった粘質 主要. 石膏多く含む 主要な含積層
 5. 10YR7-6 明黄色無機粒 ←粗粒鉢 若干粗粒混入 締めた粘質 黄化物有
 6. 4層が5~10%混入 上部少し有
 7. 10YR7-6 明黄色無機粒 ←粗粒鉢 強い粘質 ベース

Tr-19

1. 10YR5-1 暗灰色無機粒 ←粗粒鉢 土上
 2. 10YR5-1 暗灰色無機粒 ←粗粒鉢 土上
 3. 10YR7-6 明黄色無機粒鉢 ←シルト 土上
 4. 10YR5-3 にひく黃褐色無機粒鉢 ←シルト 粘質 含積層
 5. 10YR2-1 黑色無機粒 ←粗粒鉢 粘質
 6. 10YR5-4 にひく黃褐色無機粒 ←中粒鉢 粘り
 7. 10YR5-3 にひく黃褐色無機粒 ←中粒鉢 粘り
 8. 10YR5-4 にひく黃褐色無機粒 ←シルト 強い粘質
 9. 10YR5-3 にひく黃褐色無機粒 ←シルト 黄化物有
 10. 10YR5-6 黃褐色無機粒 ←粗粒鉢 若干シルト混 締まった粘質 ベース

Tr-20

1. 10YR5-2 黄褐色無機粒鉢 ←粗粒鉢 土上
 2. 10YR5-1 暗灰色無機粒 ←粗粒鉢 土上
 3. 10YR5-6 黃褐色無機粒 ←粗粒鉢 φ20~30mm 粘土ブロック混入
 4. 绿灰色中粒 ←粗粒鉢 3と同じ グリ化含む
 5. 10YR4-2 中粒 ←粗粒鉢 ←シルト 植物遺体多く含む 粘質

Tr-21

1. 10YR6-1 暗灰色無機粒 ←粗粒鉢 土上
 2. 10YR7-6 明黄色無機粒鉢 ←粗粒鉢 土上 強い粘質
 3. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←中粒鉢 固い粘質
 4. 10YR5-3 にひく黃褐色中粒 ←粗粒鉢 固い粘質
 5. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←中粒鉢 固い粘質の砂層
 6. 10YR5-3 にひく黃褐色無機粒 ←粗粒鉢 土上混入 粘質 鉢分沈着する
 7. 嫩青灰色中粒 ←粗粒鉢 固い粘質の砂層 固い粘質
 8. 嫩青灰色無機粒 ←シルト 若干粗粒 ←中粒砂混入 強い粘質

Tr-22

1. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←中粒鉢 土上

2. 10YR7-6 明黄色無機粒鉢 ←粗粒鉢 土上

3. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←中粒鉢 粗粒鉢 ←シルト 土上

4. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←中粒鉢 粗粒鉢 ←シルト 土上

5. 10YR5-2 黄褐色無機シルト ←粘土 粗粒鉢 ←シルト 土上

6. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←中粒鉢 粗粒鉢 土上

7. 10YR5-1 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 土上

8. N4-0 黄褐色中粒 ←粗粒鉢 グリ化する砂層

9. N4-0 黄褐色中粒 ←粗粒鉢 グリ化する砂層

Tr-23

1. 10YR5-1 黄褐色無機粒鉢 ←シルト 土上

2. 10YR7-6 明黄色無機粒鉢 ←粗粒鉢 土上

3. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←中粒鉢 粗粒鉢 ←シルト 土上

4. 10YR5-1 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 若干中粒砂混入

5. N5-0 黄褐色 土中粒 ←粗粒鉢 土上

6. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 粘質 黄色無機粒鉢 25%混入

7. 10YR5-1 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 やや粘質の砂層 土分沈着する

8. N5-0 黄褐色中粒 ←粗粒鉢 均質な砂層

9. N5-0 黄褐色中粒 ←粗粒鉢 混造有 均質な砂層 混水差し

10. N4-0 黄褐色粗粒 ←シルト 固い粘質の砂層 混水する

Tr-24

1. 10YR6-2 黄褐色無機粒鉢 ←シルト 土上

2. 4リープ 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 土上 粘質

3. 5GY5-1 オリーブ 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 若干中粒砂混入 やや粘質の砂質層

4. 10YR5-1 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 土上 締めた粘質

5. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 粗粒砂混入 若干中粒砂混入

6. 4リープ 黄褐色中粒 ←粗粒鉢 土上 粘りの砂質層

7. 4リープ 黄褐色中粒 ←粗粒鉢 土上 締めた粘質

8. N4-0 黄褐色粗粒 ←粗粒鉢 土上 締めた粘質

9. N4-0 黄褐色粗粒 ←粗粒鉢 やや締めた粘質 土上 粘りの砂質 層合有

10. オリーブ 黄褐色土 ←シルト 強い粘質 φ2~5mm 粒合有 混水する

Tr-25

1. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 やや粘質 土上

2. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←中粒鉢 土上 均質な砂層 混水原種?

3. 10YR6-2 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 土上

4. 10YR5-2 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 若干粗粒混入 少量上部有

5. 10YR5-6 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 締めた粘質 土面裏面にマンガン

灰化多い 粘質含積層

6. 10YR7-4 にひく黄褐色シルト ←粗粒鉢 締めた粘質 遺物多い

7. 10YR4-4 黄褐色無機粒 ←シルト 粘質 遺物多い

8. 10YR5-4 にひく黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 強い粘質 黄化物多い

9. 10YR5-4 にひく黄褐色無機粒 ←シルト やや粘質の砂質 遺物少し有

10. 10YR5-8 明黄色無機粒 ←粗粒鉢 中粒鉢 強い粘質 堆積物のベース

Tr-26

1. N6-0 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢

2. 2N6-0 黄褐色無機粒 ←30GY6-1 中粒鉢 ←粗粒鉢 φ下部に20%混入

3. N4-0 黄褐色無機粒 ←粗粒 土中に同色無機粒が15%混入

4. N4-0 黄褐色無機粒 ←シルト 粘質 若干粗粒混入

5. N4-0 黄褐色無機粒 ←シルト 強い粘質 粗粒鉢 φ10%混入

6. 5GY4-1 堀オリーブ 黄褐色無機粒 ←中粒鉢 粘層

7. 7.9GY4-1 堀オリーブ 黄褐色無機粒 ←シルト 粗粒砂混入 強い粘質 混水する

Tr-27

1. 10YR6-1 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 土上

2. 10YR7-6 明黄色無機粒 ←粗粒鉢 土上

3. 10YR6-3 にひく黄褐色中粒 ←粗粒鉢 土上

4. 10YR6-1 黄褐色無機粒 ←シルト 10YR6-3 にひく黄褐色中粒鉢 φ30%混入

5. 10YR5-3 にひく黄褐色中粒 ←粗粒鉢 土上 粘りの砂層

6. 10YR6-3 にひく黄褐色中粒 ←粗粒鉢 土上 粘りの砂層

7. 10YR6-3 にひく黄褐色中粒 ←粗粒鉢 土上 粘りの砂層

8. 10YR5-4 にひく黄褐色中粒 ←粗粒鉢 土上 粘りの砂層

9. 10YR4-3 にひく黄褐色中粒 ←粗粒鉢 土上 粘りの砂層

10. 10YR6-1 堀灰色シルト ←粗粒鉢 強い粘質 ベース鉢分有 φ20mm 粒合有

11. 10YR6-2 黄褐色無機粒 ←粗粒鉢 ←シルト φ5~15mm 粒合有 黄化物有 締めた粘質

図 10 用井地区試掘確認調査堆積状況 柱状図 (4)

以下では遺構・遺物を確認したトレンチごとに状況を概説する。

Tr-16 調査範囲のなかで最も河川に接するトレンチで、低位に位置するトレンチである。耕作土直下より土器や石器等が出土する。また、南北方向に走る幅30cm程の溝状の遺構を検出している(図11)。溝状遺構の堆積からは、縄文時代中期の所産と考えられる土器片も出土しているが、同遺構周辺からは新しい様相を示す土器片も出土しており、遺構の時期を特定するには至らない。

当該トレンチは遺構の残存状態も良好で、試掘調査実施時点では当該地点が本発掘調査に発展する可能性もあったため、下位の調査は実施せず調査用の畦を残したまま埋戻しを行った。

図12、13に示すTr-16から出土した遺物は溝状遺構の埋土から出土したものである。1～2は口縁端部で、2には外面、内面ともに微隆起突帯が貼付される。3は突帯文土器口縁部付近の細片である。4～8は口縁部片である。4は端部直下から沈線が施され、5は口縁端部がやや凹んで整形され、端部直下の外面に微隆起突帯がめぐる。8は外面側から刺突する穿孔が見られる。9・10は平底の底部である。11は刻目をもたない突帯文土器口縁部である。12は弥生土器壺口縁部である。口縁端部に刻目をもつ。体部上半に5条の沈線がめぐる。沈線より下部には綫方向のハケ調整が施されている。13は孔列文土器である。微細な突帯の下側に連続する5つの穿孔が確認できる。外側から内側に向かって刺突することによって施文されており、うち3孔は貫通せず内側には粘土の膨らみが観察される。14は頭部である。胎土や突帯から13と同一個体である可能性がある。15は弥生土器体部である。微隆起突帯が3条めぐる。16は浅鉢口縁部である。18～20はスクレイバーである。19は粘板岩を素材とし、腹面側から背面側に向かって連続する剥離で刃部が形成されている。また、背面側には躍面が

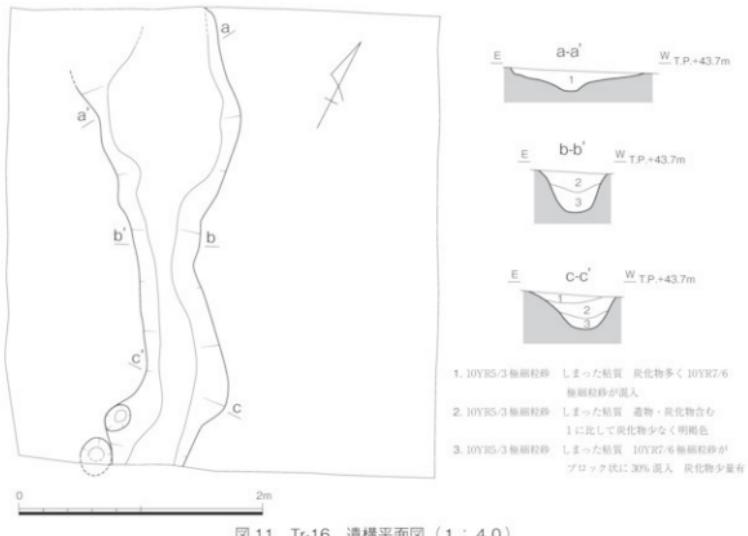


図11 Tr-16 遺構平面図 (1 : 40)

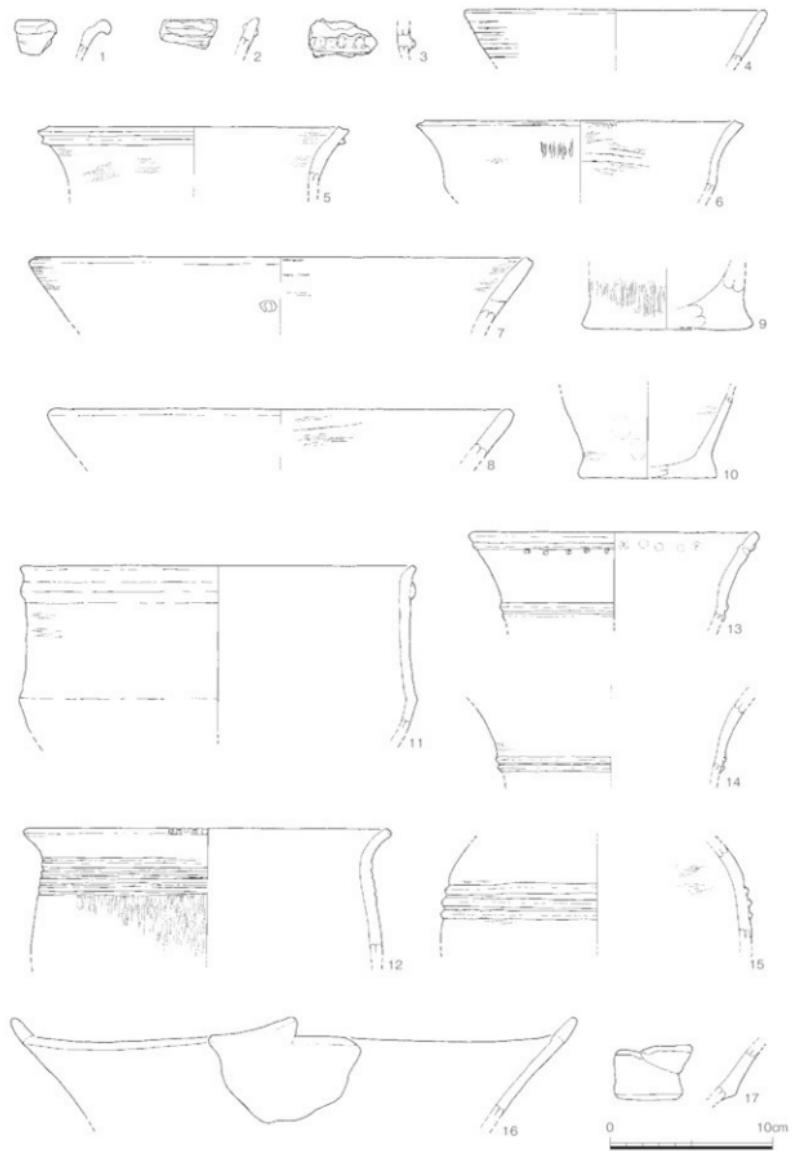


図 12 Tr-16 出土遺物 (1)

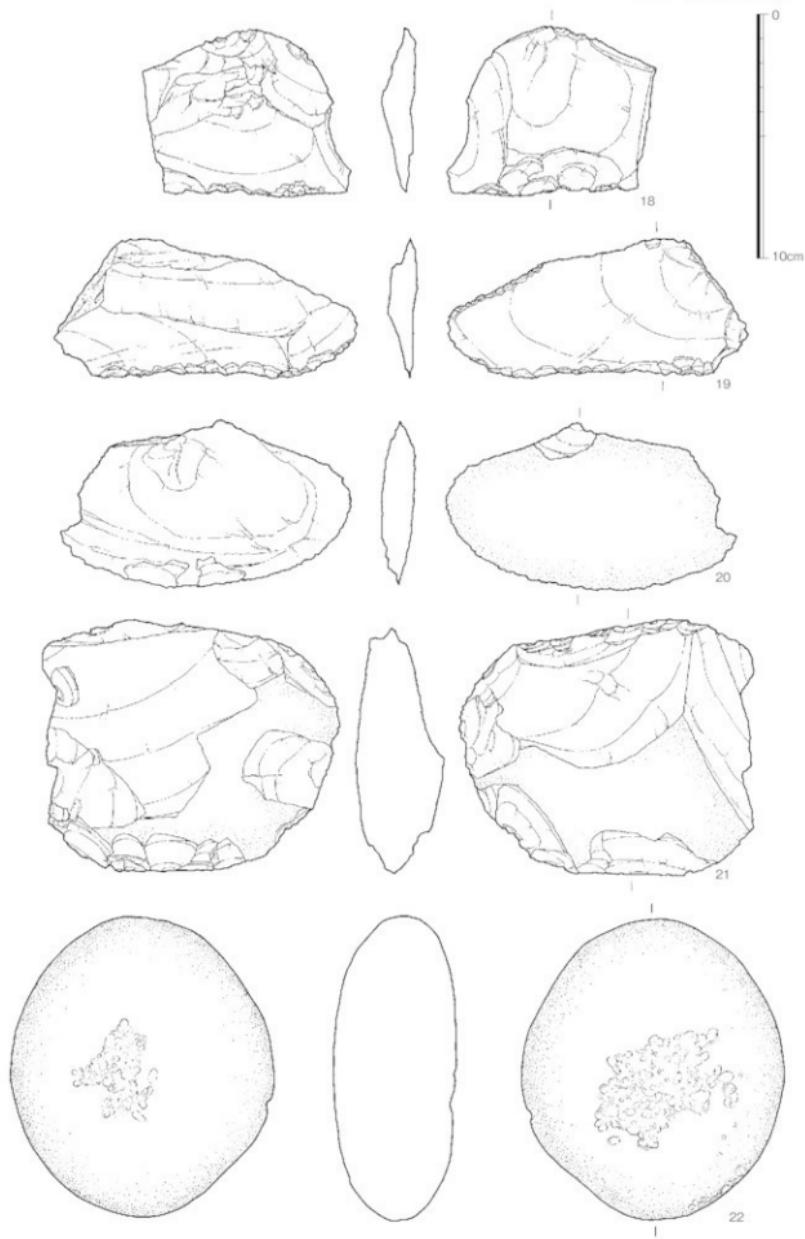


図 13 Tr-16 出土遺物（2）

残り、腹面側右上では微細な連続する剥離によって整形がなされている。20の背面側は円碟面が残存する。21は石核である。不定な方向から剥離が重ねられておりすべてがネガティブな面で構成される。22は叩き石である。表裏及び側縁に敲打痕が残存する。

Tr-17 Tr-16の北側に設定したトレーナーである。遺物包含層の広がりとさらに下層の状況を確認するため調査を実施した。Tr-17ではTr-16で見られた包含層は厚みを減じ、遺物量も減少する。トレーナーの北側には現在も水路として利用される谷状地形があり、堆積は水路に向かって傾斜し上部ではやや後世の搅乱らしき堆積が見られる。

Tr-17の状況からはTr-16で確認した遺構面より下位に遺物包含層は存在しないものと考えられたが、事業実施の過程でTr-16の南側にトレーナーを設定して状況を再確認する機会を得た。その際には1.5m程下層で遺物及び遺構が確認された。Tr-17で確認した様相は、遺跡の残存する辺縁の状況であり、Tr-16を含む南側においてはさらに下位で包含層及び遺構面が存在することは留意が必要である。

Tr-18 Tr-16の上側の筆に設定したトレーナーである。橙褐色シルト層に非常に多くの遺物が含まれている。打製石斧や微隆起突帯をもつ土器片等縄文晩期～弥生時代の様相を示す遺物が多く出土する。明確な遺構は確認し得ていないが、調査面積が狭小であることを考慮すると周辺に遺構の存在する可能性は高いものと考えられた。当該トレーナーが今回の調査トレーナーの中で最も多く遺物（細片含む）

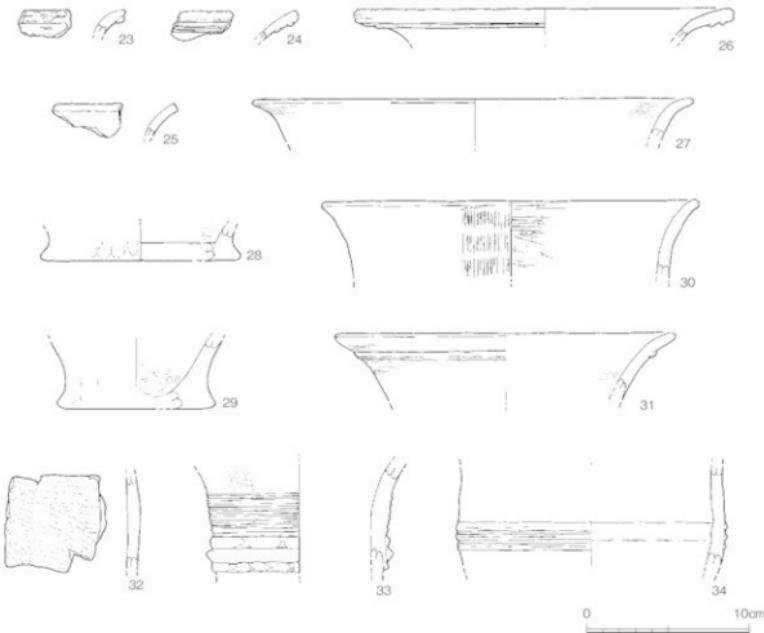


図 14 Tr-18 出土遺物 (1)

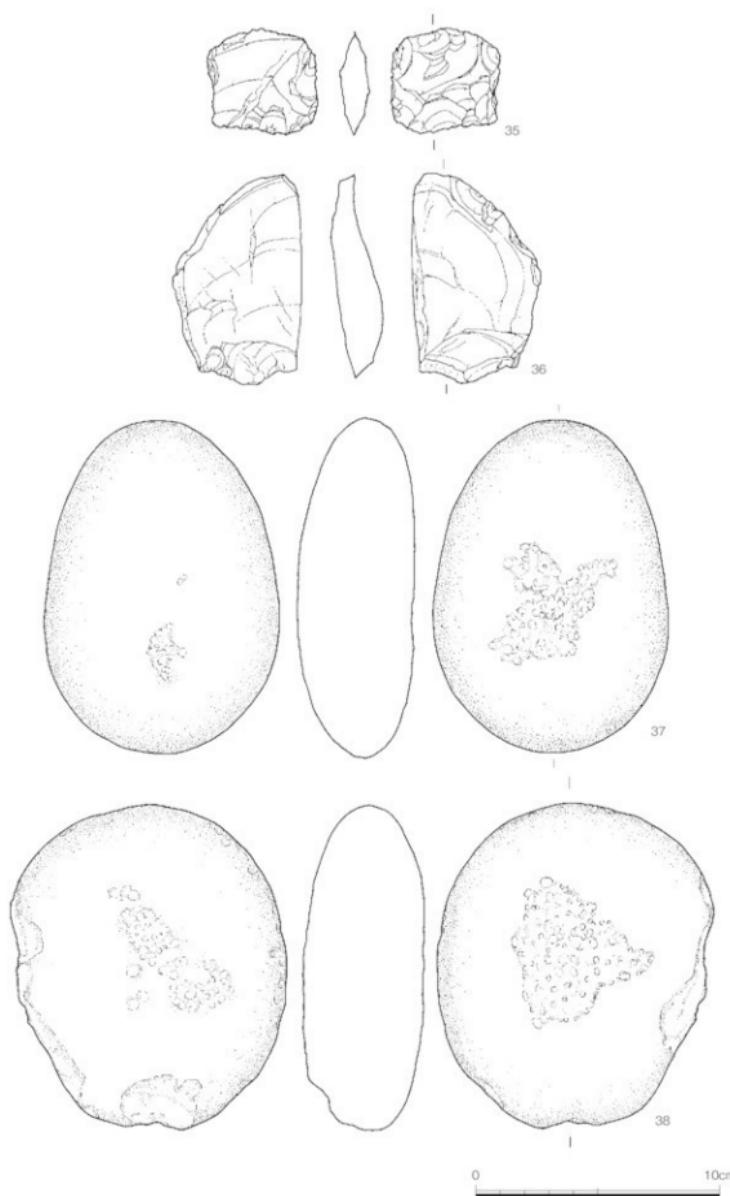


図 15 Tr-18 出土遺物 (2)

を出土したトレンチである。

図14・15がTr-18で出土した遺物である。23～27は弥生土器口縁端部・口縁部である。23は口縁外面に断面三角形の刻目突帯がめぐる。86は南四国型壺口縁端部である。大きく外反する口縁部に2条の微隆起突帯が確認される。26と同一個体の可能性がある。25は端部を平坦に仕上げ、外面に沈線で文様が刻まれている。26は口縁外面に2条の微隆起突帯をもつ南四国型壺である。28・29は弥生土器底部である。30・31は弥生土器口縁部である。30は外面をハケ調整し、31は外面に一条微隆起突帯がめぐる。32・34は壺体部である。34には胴部に3条の微隆起突帯が貼付されている。33は壺頭部である。沈線が6条めぐり、体部への転換点に断面三角形の突帯が貼付される。上端と下端の突帯は刻目をもつ。35・36は二次加工のある剥片である。35はチャートを石材とし、上下端に不均一な剥離が観察される。37・38は叩き石である。38は表裏及び側縁に敲打痕が観察される。

Tr-19 遺物を出土したトレンチの中で最も高所に位置するトレンチである。堆積が厚く、包含層の厚みは1mを超える。遺物量はTr-18に及ばないが比較的残りの良い突帯文を持つ土器片が出土している。

当該トレンチで包含層が確認されたことにより、Tr-19から16にかけて広く埋蔵文化財が残存していることが明らかとなった。

図16は当該トレンチから出土した遺物である。39は陶磁器の底部で、表面に釉の痕跡が認められる。40・41は突帯文土器である。

40は指抑えにより波状の刻目を施し、41は工具による刻みを付す。

Tr-25 橙褐色シルト層の堆積が確認される南端のトレンチである。周辺の様相はグライ化の進んだ湧水の著しいシルト層が一般的であるが、このトレンチのみが乾燥した堆積状況を呈している。

耕作土直下より炭化物を多く含んだ不定形の土坑が検出され、打製石斧等の遺物も確認されている。

当該トレンチの南側には水路が走っており、徐々に南側に向かって地形が下る様子が看取される。こ

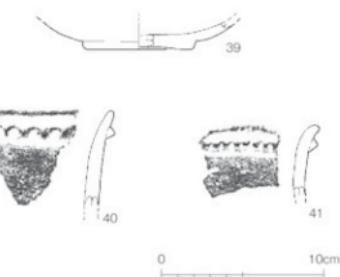


図16 Tr-19 出土遺物（1）

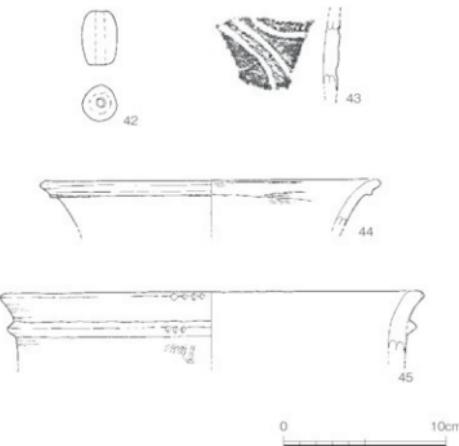


図17 Tr-25 出土遺物（1）

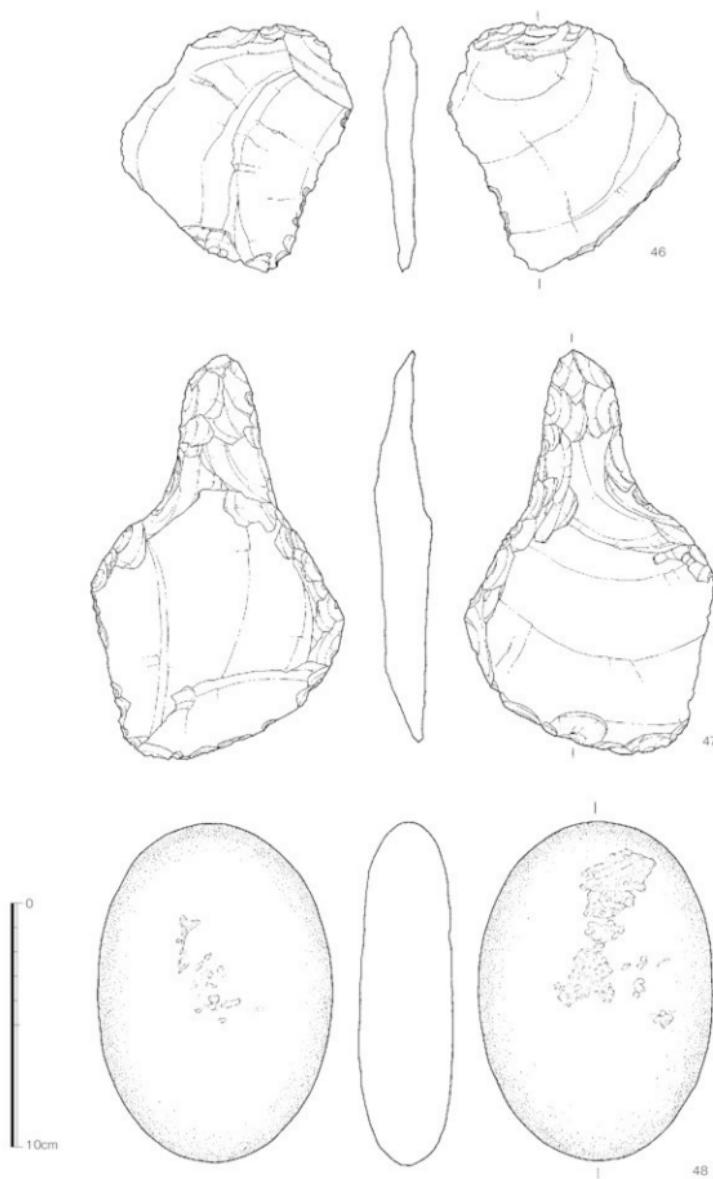


図 18 Tr-25 出土遺物（2）

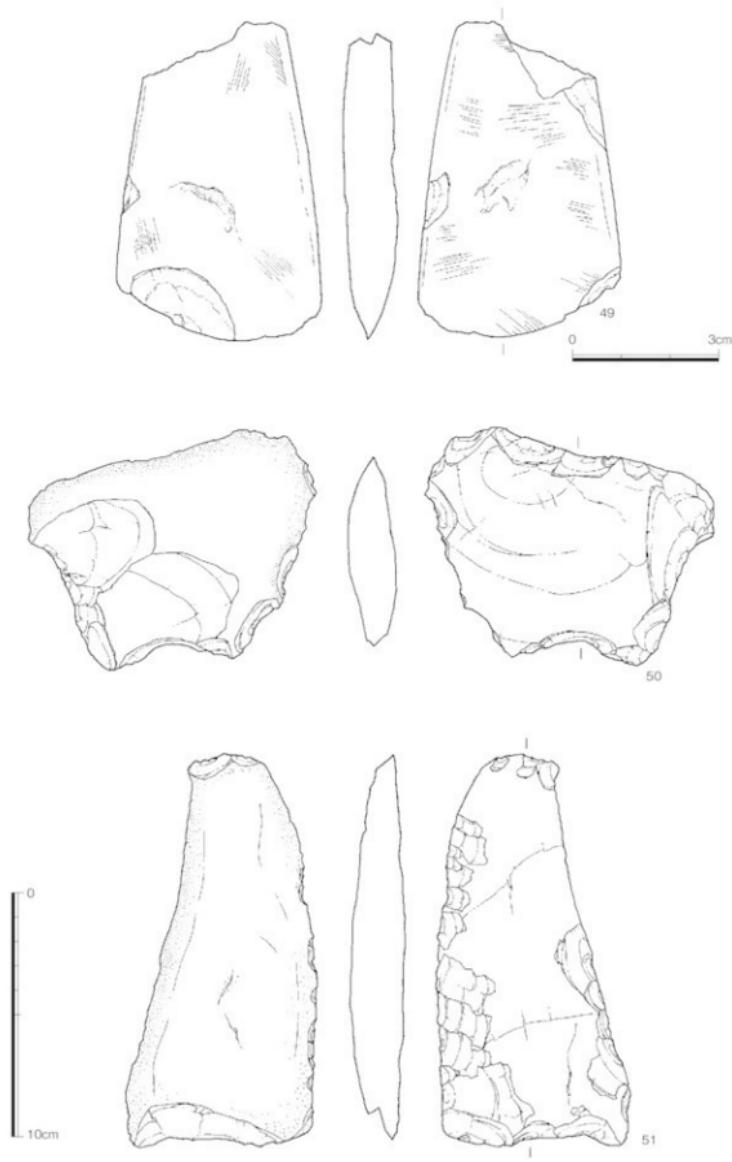


図 19 Tr-25 出土遺物 (3)

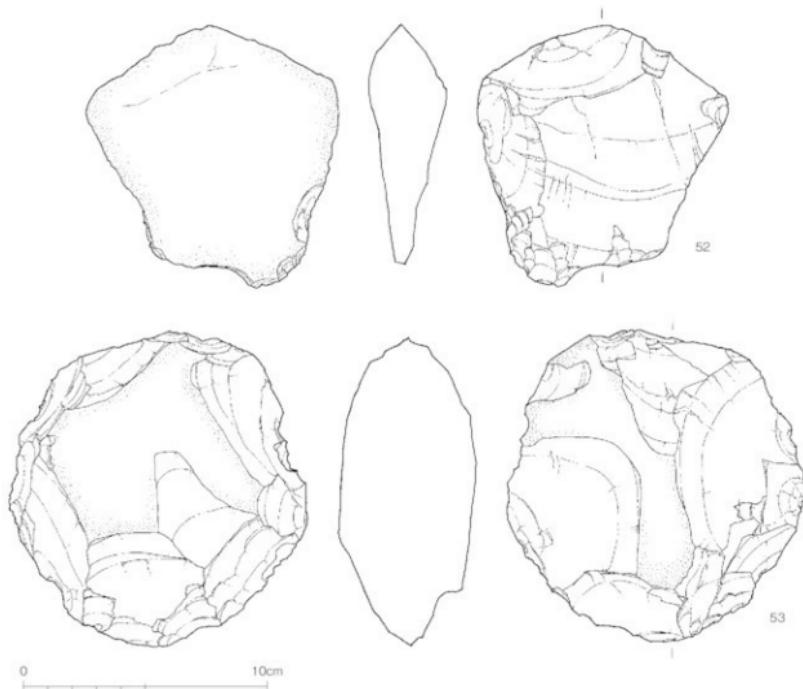


図 20 Tr-25 出土遺物 (4)

のような状況からも当該トレンチがTr-16から続く埋蔵文化財残存エリアの南端であることが想定される。

Tr-25 から出土した遺物は図 17 ~ 20 に図示した。42 は土錘である。43 は縄文土器体部の外面に沈線が施文される。44 は口縁部直下に微隆起突帯が貼付される。45 は突帯文土器の口縁端部である。口唇端に刻目をもち、外面に断面三角形の刻目突帯が貼付される。46 は 2 次加工のある剥片である。腹面左側縁部に連続した小さな剥離が見られる。47 は打製石斧である。基部は比較的大きな剥離で細身に仕上げられ、刃部は小さな剥離を連続させることで整形しており、先端部がゆるく尖る形状をなす。48 は叩き石である。49 は磨製石斧である。断面扁平な形状を呈し、基部は欠損する。刃部端も使用によるものと思われる割れを生じている。50 ~ 52 は二次加工のある剥片である。50 の背面側は円礫面が残り、背面右側縁に剥離が連続する。51 も背面側に礫面が残存する。両側縁を連続する剥離で直線的に整形し、下端をやや直線的に仕上げている。簡易な整形によって土掘具等の機能を持たせたものか。52 は背面側に円礫面を残し、背面両側縁に剥離が認められる。53 は石核である。背面・腹面ともに原礫面を残して、縁辺からの剥離が全周する。

まとめ 当該調査によって用井地区において埋蔵文化財の残存するエリアが新たに確認された。残存を確認したのは Tr-16～Tr-25 にかけての 5 箇所のトレンチであり、トレンチの配置を検討すると、埋蔵文化財の残存するエリアは谷地形に挟まれた小規模な微高地にあることがわかる。当該地点が山側から伸びる微高地として存在したものか、河川の侵食を受けつつ微高地状に残存したものかは判然としないが、周辺のグライ化の進行状況や遺物の存在等から長期間比較的乾燥した状態で堆積が進行したことが分かる。

また、Tr-16～19 と Tr-25 の間には数箇所の場が存在している。今回はほ場整備事業範囲外であつたためトレンチを設定することができなかったが、遺物出土トレンチと地形的に大きな変化は認められず、両側で遺物等が確認されることから、この未調査の筆を含めた一帯が遺跡の範囲と考えて良い。また、出土する遺物から、遺跡の営まれた時期は、主として縄文晩期～弥生時代にかけてと考えられる。

(2) ヲキショウジ遺跡の設定

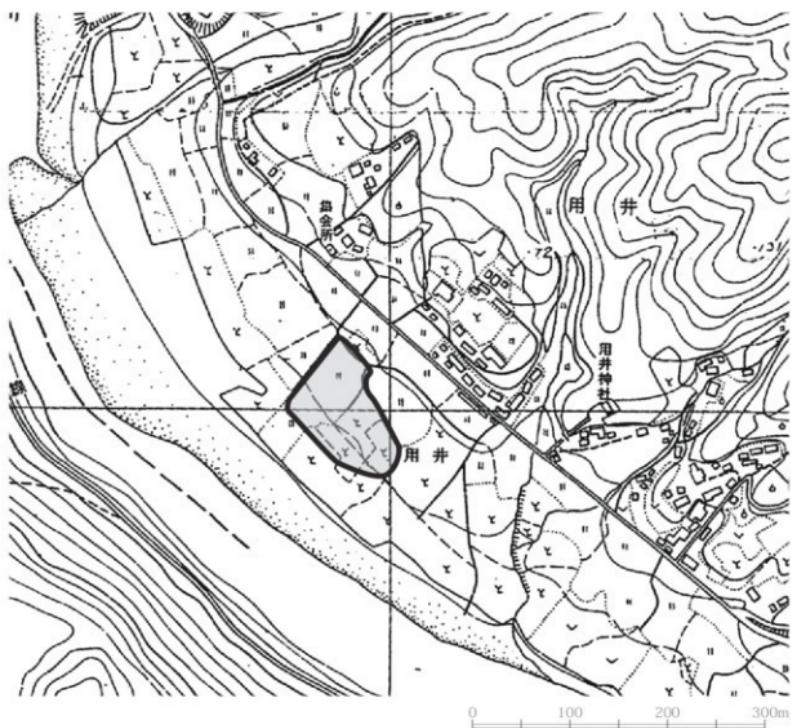


図 21 オキショウジ遺跡の範囲 (1:5,000)

試掘確認調査を実施した結果、埋蔵文化財の良好に残存するエリアが明らかとなった。エリアは用井地区中央部付近の市道白岩用井線から四万十川へ下る現耕作地内にある。試掘調査で確認したトレーニング内の堆積状況及び現在地表で観察できる水路、谷地形等から、遺跡は二つの谷筋に挟まれた微高地上に立地していたものと想定される。今回の調査ではエリアの北端と南端を調査し、南北の谷筋にむかって傾斜しつつある遺跡の状況を確認することができる。しかし、遺跡の広がりの中心であろうと考えられる畑地・水田については事業計画外となっていたためトレーニングを設定し得なかった。

今回の試掘確認調査の成果を受けて、四万十市と高知県教育委員会との間で協議・調整を行い、埋蔵文化財の適切な保護と活用を行うため、図21に示す範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地として指定することとした。今回新たに包蔵地に加えられた遺跡は所在する小字名にちなんで「ヲキショウジ遺跡」と呼称することとし、平成21年6月12日付けで周知の埋蔵文化財包蔵地として新設された。

第2節 本発掘調査の成果

(1) 調査の方法

調査区の設定 事業地の中で発掘調査の対象となったのは、地下の遺物包含層・遺構等に影響が及ばない盛土部分を除いた 207m²である。調査区の位置及び範囲は図 22 に示すとおりである。

発掘調査にあたっては遺物の採取や図面作成の便宜上、グリッドを設定した。調査区が狭小で扁平な形状をなすため、割付作業等に都合の良い任意の間隔で地区設定を行った。グリッドの名称は北から南に向



調査前の現状

かって A ~ C、東から西に向かって 1 ~ 2 の各単位を割り当てた。このグリッドの設定は、調査区の平面形に対して相対するよう配慮したものであり、国土座標に対しては任意の傾きを持っている。グ

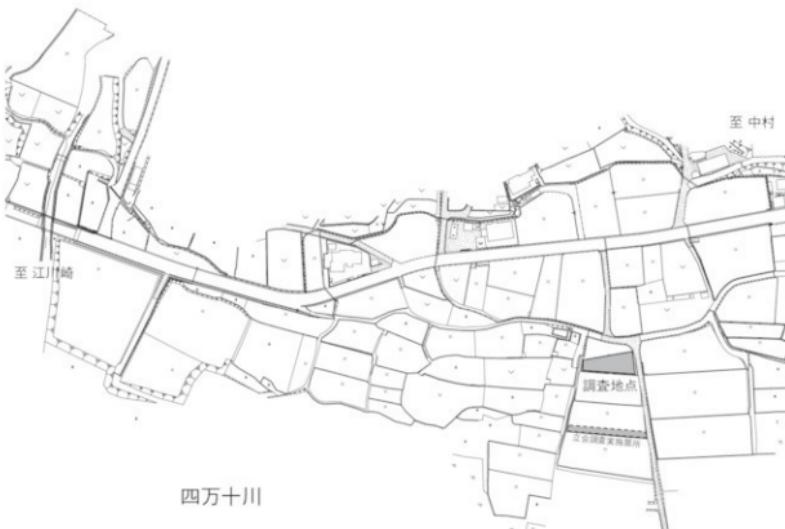


図 22 本発掘調査範囲位置図 (1 : 2,500)

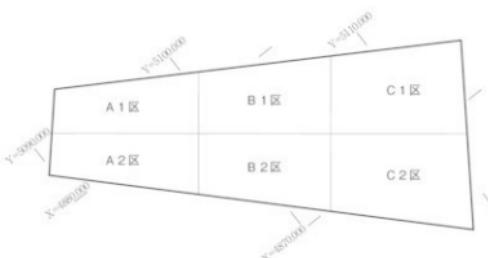


図 23 調査区設定図（1：300）

リッドの名称と配置、国土座標との関係は図 23 に整理した。

発掘調査の方法 現地での調査は遺物包含層に至るまでを重機を使用して掘削を進め、最上層の包含層以下は人力で掘削を行った。発掘作業の体制は、教育委員会職員の指導のもと、作業員（7名）を雇用し総勢 8 名の体制で調査にあたった。

調査時に必要となる遺構平面図、遺物の出土状況図、土層断面図等の実測及び写真撮影は、すべて担当職員が行った。

現地調査中は、調査地の管理等に十分留意したが、出水期の増水や台風の襲来等により何度も調査区が水没した。調査終了後は、そのまま事業実施に伴う掘削工事に移行し、調査区の埋め戻し等は行っていない。

なお、調査地は現在耕作地として利用されており、事業実施後も水田としての利用が見込まれている。このことから、発掘調査に際しても、耕作土とその他の土を区別して管理するよう配慮し、調査終了後は整備後のは場に利用した。

整理作業の方法 発掘調査で出土した遺物、記録した実測図等については、調査終了後すみやかに整理作業を開始した。整理作業は平成 23 年 3 月に報告書を刊行する計画とし、平成 21 年 12 月から着手した。

ヲキショウジ遺跡は四万十市内でも旧西土佐村地域に所在する遺跡であるが、整理作業をおこなう都合上、すべての出土遺物、図面、写真を旧中村市域に所在する教育委員会生涯学習課に集めて管理し、作業を進めることとした。作業は生涯学習課の所在する四万十市立中央公民館並びに埋蔵文化財整理作業用に借り受けた作業場で行った。

整理作業は教育委員会職員の指導のもと、3 名の臨時職員を雇用し、総勢 4 名の体制で実施した。報告書作成に必要な遺物の洗浄、注記、復元、実測図の作成、写真撮影等全ての作業をこの体制で行った。

(2) 基本的な層序

調査地点は、四十万川に向かって傾斜する斜面上にあり、全面が農地として利用されている。また、遺跡を含む周辺の場合は全体としては下流に向かって緩やかに下る。しかし、調査区周辺の微地形を詳しく見ると、北側に水路として利用されている谷筋が通っており、堆積の過程では北側の谷筋に向かって傾斜する時期があったものと思われる。

堆積の状況 本調査においては、先述のとおり耕作地としての土地利用が継続しており、調査区の西側は耕作地整備のために削平され、石垣が形成されていた。このため、調査区西側では、壁面で地表面からの連続した堆積状況を確認することはできなかった。また、北側壁面についても、谷筋に近接するため地下水等の影響を受けたものであろうか湧水・変色等が著しい状況であった。

本項では、調査実施にあたって層位確認の基準とした南側及び東側壁面断面の状況を図25～27に示した。東壁を南北に分けている搅乱は、Ⅲ章第1節で述べた試掘確認調査時に設定したトレーナー(Tr-19)によるものである。南壁面に見られる堆積は、上部では概ね水平に堆積し、下部では緩やかに河川に向かって傾斜することが看取できる。また、東壁面では上部では北側水路に向かって緩く下がるのに対して、下部では基盤層が北側ほど高く微地形に変化があることが分かる。

図24は、各壁面で観察された層位を、堆積を構成する要素や出土遺物をもとに再整理した表である。個別の土層図に記載する層名はアラビア数字で記載し、基本層序として整理した層群についてはローマ数字で記載した。なお、図25～27で使用される層名は共通のものである。

以下では、図24をもとに各基本層序を詳述する。

基本層序	層名	堆積の様相	特徴
I	1	暗灰色粘質層	現耕土
II	2	明灰色砂質層	
III	3	黄橙～暗灰色砂質層	
IV	4、5、6	明褐色粘質層	旧耕土
V	7	黒褐色極細粒砂層	中世？
VI	8、9	褐色粘砂質層	洪水堆積
VII	10	褐色粘質層	弥生前期～
VIII	11	明褐色粘質層	
IX	12、13	褐色粘質層	弥生～繩文
X	14、15	暗褐色粘質層	繩文晩期
XI	16	黄褐色粘質層	基盤層
XII	17	黄橙色粘質層	
XIII	18	黄褐～赤褐色粘質層	

図24 基本層序整理表

第I層 現在利用されている耕作土である。暗灰色を呈するシルト層。層厚は約10cm。

第II層 現耕作土に伴う床土層である。明灰色の堅緻な堆積で、Ⅲ層が若干混入する。

第III層 現耕作土に伴う床土層である。にぶい黄橙～黄褐色を呈する堅緻にしまった堆積である。

第IV層 灰褐色～暗灰色を呈する旧耕作土層である。IV層を構成するのは4～6層である。4層は暗灰色を呈する中～粗粒砂を主体とする弱い砂層で、5層上面との層理面が安定せず、複雑なラインを描く。5～6層は明褐色の縮まった粘質の極細粒砂層である。

第V層 7層と対応する。暗褐色の極細粒砂に細粒砂が混入する縮まった粘質の堆積である。調査区全体で均一に確認できる層位であり、試掘確認調査では中世期の所産と考えられる須恵器片が出土している。しかし、全体として遺物に乏しく明確な時期を特定するには至らない。

第VI層 8～9層で構成される細粒砂を主とした弱い粘質の堆積である。やや土壤化が進行するが、8層は均質な砂質を呈する厚い堆積であり、洪水等によって短期に堆積したものと推測される。9層は概ね8層に近似するが、よりシルトを多く含み粘質である。VI層からは中世～縄文各期の遺物が微量ながら混在して出土している。

第VII層 断面図に記載する10層が対応する。シルトを主とした縮まった粘質の堆積である。調査全域で確認できる層位であるが、場所によって細粒砂やシルトが塊状に混入するなど、やや不均一な様相である。当該層位からは微量ながら縄文・弥生時代～中世にかけての遺物が出土する。

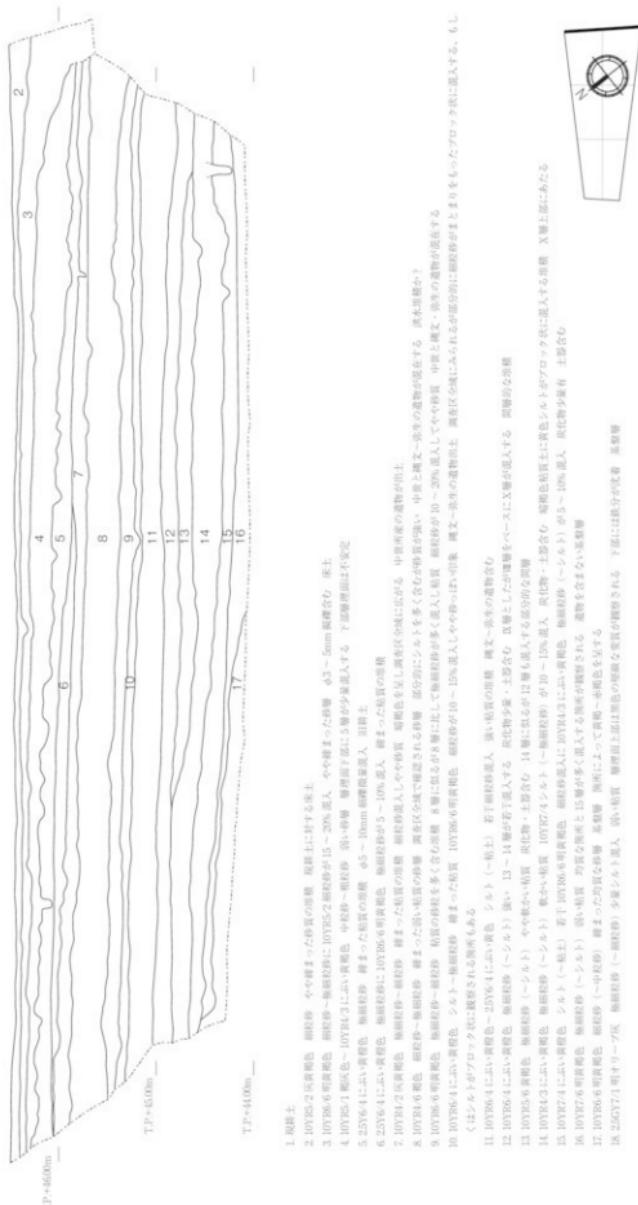
第VIII層 11層と対応する。厚く堆積した強い粘質を呈する堆積である。弥生時代を主とする遺物が出土する。調査区内で遺物量が増加するのはこの層位以下である。遺物量が北端部では減少する傾向が認められる。

第IX層 12～13層と対応する。極細粒砂にシルトを含む強い粘質の堆積である。上部にあたる12層では11層に近似する粘質の堆積に暗褐色の極細粒砂が混入したものである。また、12層の中でも様相は漸移的に変化しており層理面を形成するには至らないものの、南北端で観察される印象が異なる。北端部では遺物量が減少する傾向にある。IX層下部にあたる13層ではX層に見られる暗褐色極細粒砂が主体となり、より14層(X層)に近い様相を示す。13層が確認されるのは、調査区南壁と西壁の南端付近のみであり、局所的な地形の起伏に起因する堆積と考えるべきかもしれない。

IX層(12・13層)からX層(14層)への移行は漸移的に変化する箇所が多く、断面上では確認しても平面で層の変化を区別しながら掘り下すことについては難航した。IX層からは弥生時代と縄文時代の遺物が混在して出土する。

第X層 14～15層が該当する。堆積は暗褐色の軟弱な粘質土を主として、黄橙色シルトが細かなプロック状に少量混入する。また、炭化物が微量含まれる。X層は南側では顕著に確認されるが、調査区北端で急に厚みを減じ、調査区端から4m程南で途切れる。当該層群からは縄文時代晚期を中心とする遺物が出土する。

第XI層 16層が対応する。弱い粘質を呈する極細粒砂層で、西に向かって緩やかに傾斜する。南東部で薄く、北西に向って厚みを増す。また、X層の途絶える北端では12層直下で検出される。遺物を含まず、人為的痕跡も認められない基盤層。本調査における最終遺構検出面である。



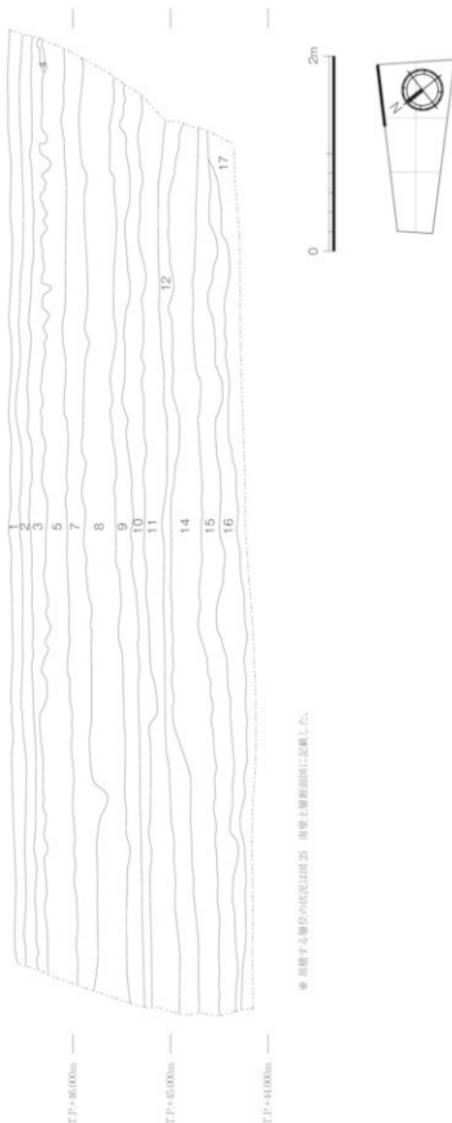


図 26 東壁土層断面図 北半 (1 : 50)

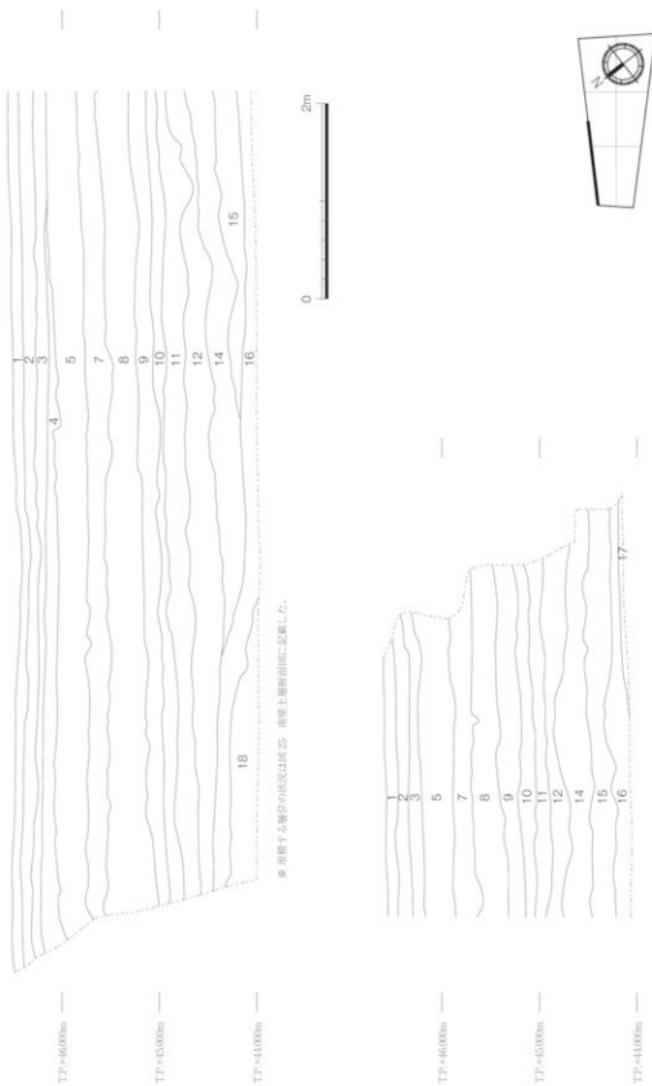


図27 東壁土層断面図 南半 (1:50)

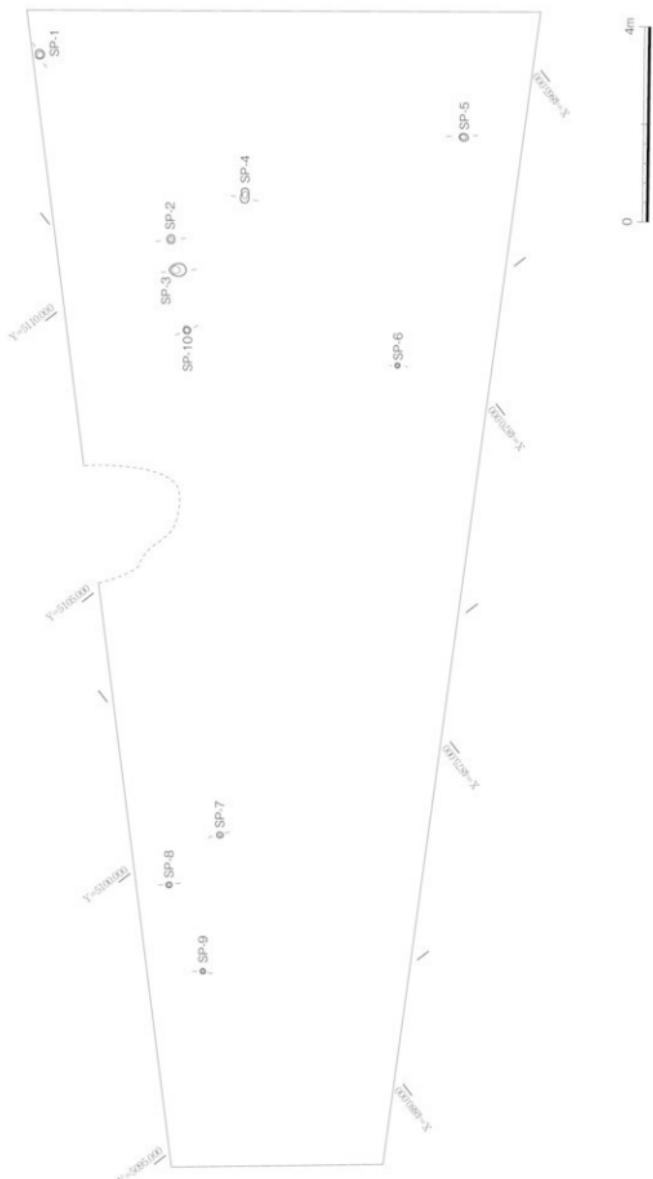


図28 VI層 遺構平面図 (1:100)

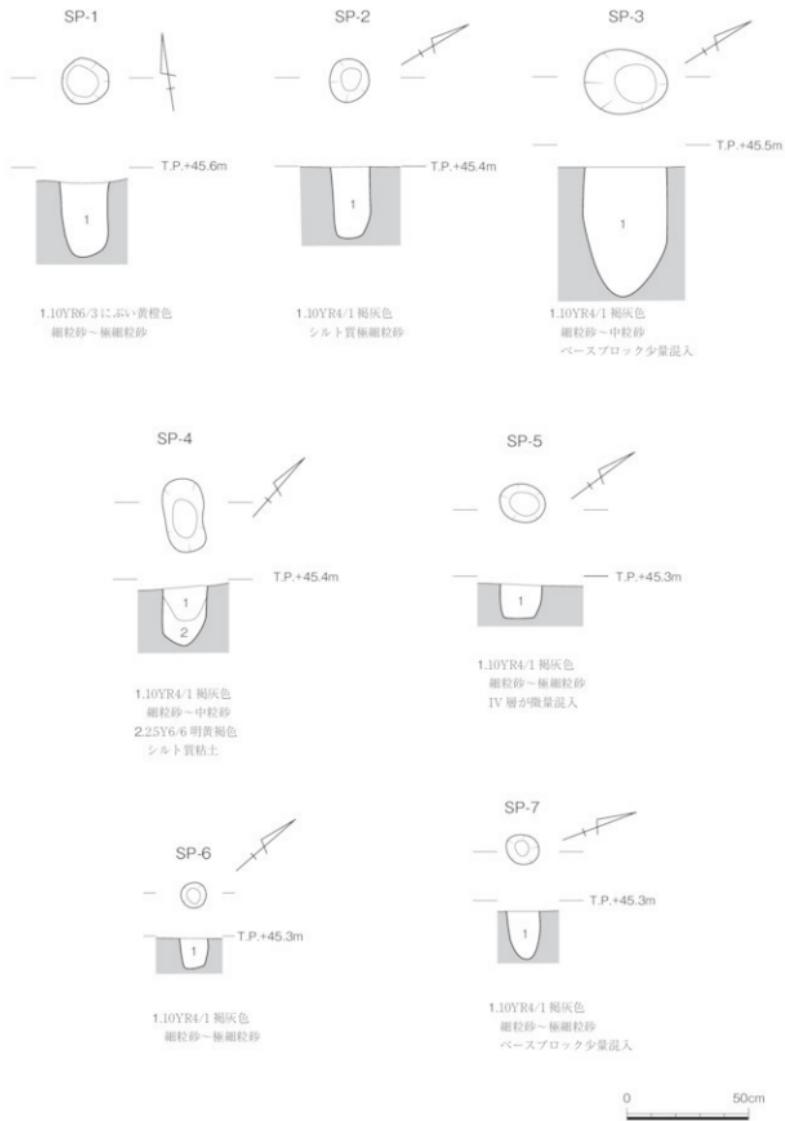


図29 VI層 遺構平面・断面図(1)(1:20)

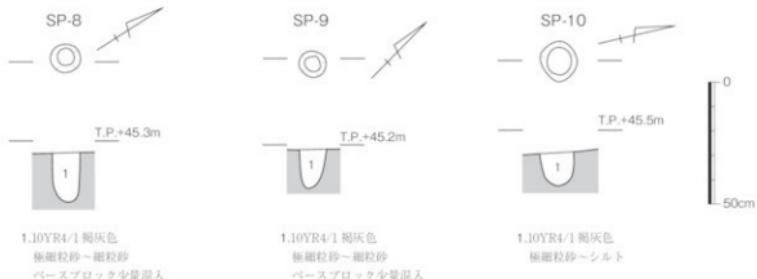


図 30 VI 層 遺構平面・断面図（2）（1：20）

第 XII 層 17 層が対応する。細粒砂～中粒砂で構成される締まった堅緻な砂層である。調査区南東部でのみ確認される。色調は黄褐～赤褐色を呈し、遺物を含まない。基盤層。

第 XIII 層 18 層が該当する。調査区北端でのみ確認される弱い粘質の堆積。16 層との層理面付近では黒色の堅緻な変質が認められる。下部では黄橙色の鉄分沈着が顯著に見られる。基盤層。

以上、南壁面、東壁面を基軸に調査区内における基本的な層序について述べてきた。当該調査区では急激な地形の変化は認められないが、XI 層以下では西側に向かっての傾斜が認められるとともに北端部に隆起する微地形の存在が明らかとなった。また、出土する遺物の時期等を勘案すると縄文晩期～弥生時代、中世にかけて存続した遺跡であることがわかる。主として遺物を出土する層位は VI ～ X 層であり、次項からはこの整理をもとに各期の様相を整理する。

(3) VI ～ VII 層の遺構と遺物

検出した遺構 VI 層では、遺構の検出が可能であった 9 層上面で調査区全体の遺構分布状況を確認し、

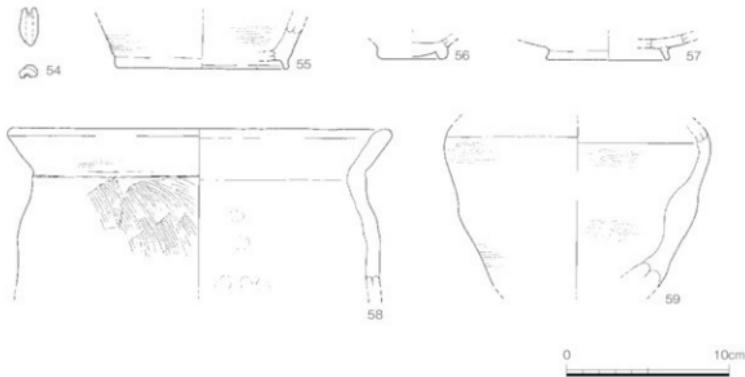


図 31 VI 層出土遺物（1：3）

統計 10 基の遺構を確認した（図 28）。

当該遺構面で確認した遺構は SP-1 ~ SP-10 で、いずれも直径 15cm ~ 30cm 程の円形状をなし、残存する深さは 20 ~ 30cm を測る（図 29 ~ 30）。埋土は褐灰色の細粒砂を主とした、弱い粘質の堆積である。形状等から小規模な柱穴と想定される。遺構の分布は調査区南東部と北東部にやや偏りが見受けられ、中央付近には分布しない。遺構間の距離や密度もまばらで各々の遺構の関係性は明らかでない。VI 層出土遺物 VI 層から出土した遺物は図 31 に示す。54 は土鍤である。片側一部を欠損する。55 は高台を持つ須恵器壺底部である。56 は青磁碗底部である。見込み部分に縁軸が見られる。57 は土師器底部である。高台は外側に向かって外反して開く。58 は土師器壺口縁部である。外面は粗いハケ調整で仕上げ、口縁端部にむかってやや外反しつつ丸く求めている。内面はナデ調整で仕上げ、指頭圧痕が顕著に観察される。59 は須恵器壺体部片である。肩部へ稜をなして伸びるものと想定される。焼成時に器壁内で生じた膨張が内外面の形状に影響しており、焼成状態は不良である。

図 33 の 65・66 は石鍤である。65 はチャートを石材とする凹基式の石鍤で、中心部にまで及ばない浅い剥離が連続して直線的な作用部を形成し、鋭利な逆刺をもつ。66 はサスカイトを石材とする平基式の石鍤である。浅い剥離の連続によって形成される作用部は緩くカーブを描いて基部へ向かう。片側の逆刺を欠損する。69 は二次加工のある剥片である。ともに姫島産の黒曜石を石材とする。69 は背面側に連続する微細な剥離が認められる。70 は打面を不定に移転させながら剥離を行っている。

VII 層出土遺物 VII 層より出土した遺物は図 32・33 に示す 60 ~ 64、67・68、71 ~ 74 である。なお、75 は排土からの表面採取資料だが、VII 層からの出土が明らかであつたため、図中に含めている。

60 ~ 62 は口縁部片である。60 は口縁端部下に半円状の断面をもつ突帯を有する。61 は口縁端部下に低く幅広の突帯を持ち、内面に沈線を有する。62 は貼付け突帯に刻目を施す。63 は浅鉢肩部片かと考えられる。64 は壺体部片である。

67・68 は平基式の石鍤である。両者ともサスカイトを石材とする。作用部はほぼ直線的に仕上げられているが、逆刺は明瞭でない。71・72 は剥片である。71 はチャートを石材とする。縦長を志向する剥片で、上端にバルバスカーが残る。下端に折れを生じている。72 は姫島産黒曜石を石材とする。73 は姫島産黒曜石を石材とする二次加工のある剥片である。下方に腹面を切る剥離が認められるが、先端部に折れを生じており形状は明らかでない。74 はスクレイパーである。頁岩を素材として腹面側から剥離を連続させて作用部を作り出している。75 は打製石斧である。砂岩円礫を打削して得られた剥片の刃縁を腹面側から連続する剥離によって直線的に調整する。作用部は直線的に仕上げられているが、使用によるためか剥離面に潰れが生じている。背面側には円礫面が残存しており、簡易な整形調整のみで仕上げられていることが分かる。

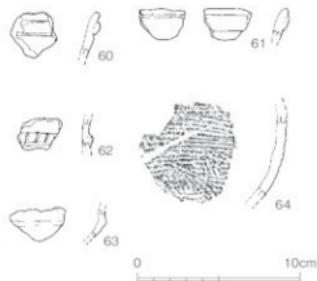


図 32 VII 層出土遺物 (1 : 3)

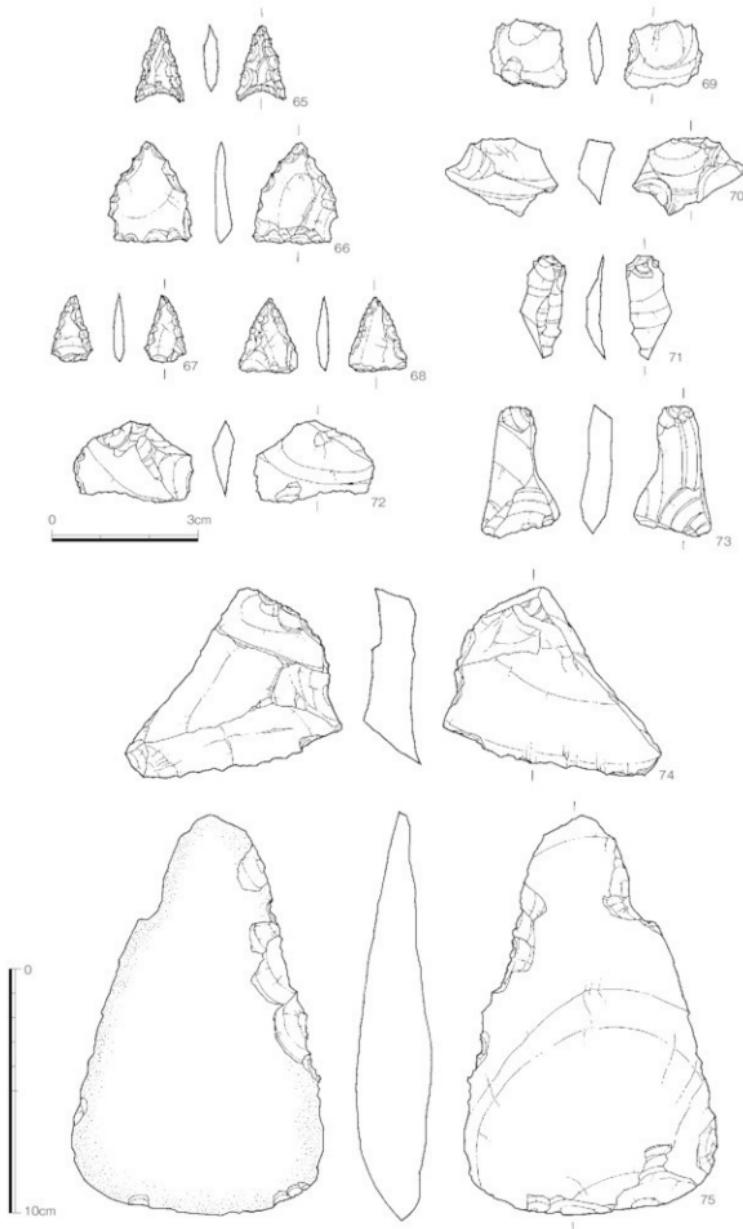


図 33 VI ~ VII 層出土石器 (1 : 1)

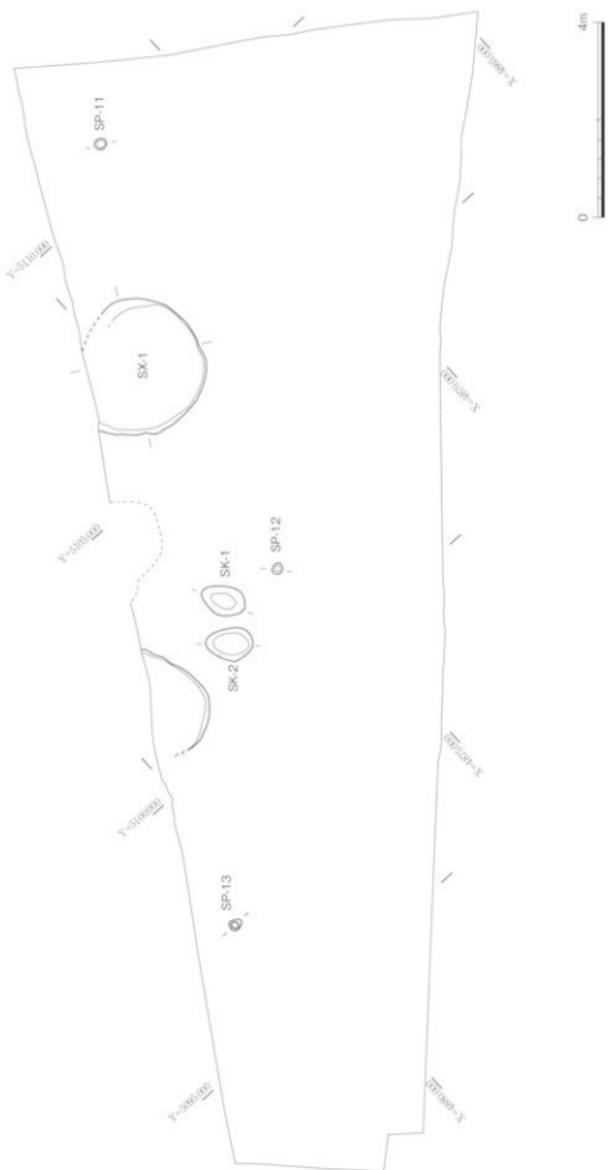


図 34 VIII 層 遺構平面図 (1 : 100)

(4) VIII層の遺構と遺物

検出した遺構 VIII層で検出した遺構は土坑、柱穴、落ち等である(図34)。遺構の検出は、壁面断面図11層中で行っている。11層中に存在する遺構群が12層上面では残存しない例が見受けられたことから11層中の遺構検出に務めた。しかし、全体として遺構密度は低く、残存状態も良好とは言えない。遺構の分布は調査区東側(A~C1区)に偏る傾向が看取され、西側では希薄である。以下では主だったものを取り上げて解説する。

SX-1 調査区南東(C1区)で検出した楕円形の落ちで、最大径約28mを測る。遺構の東側については調査区外へ伸びるため明らかでないが、およそ正円に近い楕円形をなすものと考えられる。遺構の輪郭は明瞭ではなく、不定な印象をうける。残存する深さは10~15cmほどであり、埋土中には炭化物や土器細片が含まれる。遺構内部や近隣に関係性の認められる遺構はなく、自然地形の凹みの堆積を考えるべきかもしれない。

SP-11 調査区南東隅(C1区)で確認した柱穴である。直径28cm程の円形を呈し、深さ8cm程が残存する。柱穴の底部分のみが残存しているものと思われる。

SP-12 調査区中央東側(B1区)で検出した柱穴である。直径22cmほどの小型の柱穴で、深さ

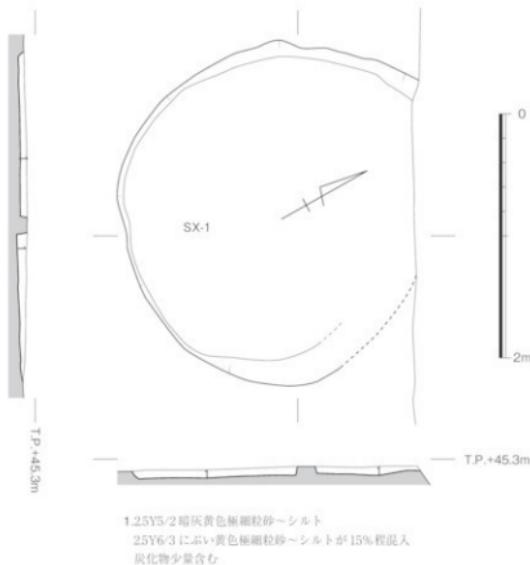


図35 SX-1 遺構平面図・断面図 (1:40)

13cm が残存する。ベース層となる堆積に灰白色極細粒砂が混入することで識別される。

SP-13 調査区北東側（A 1 区）で検出した柱穴である。検出時の直径は 27cm ほどであるが、下端では 14cm ほどになる。遺構底部のみを確認したものと考えられる。

SK-1・SK-2 調査区中央東側（B 1 区）で 2 基の土坑を検出した。SK-1、SK-2 は概ね長軸を並行させて隣接する楕円形の土坑である。SK-1 は長軸 94cm、短軸 63cm、SK-2 は長軸 94cm、69cm を測る。概ね同規模の土坑で、残存する深さとともに 12cm ほどで類似する。

VIII 層中で検出し得た遺構群はおよそ残存する深さが浅く、存在は確認しうるもの、その内容や遺構間の関係性を明らかにするには得られる情報量に乏しい。しかし、調査区内における遺構密度が低いことは、前節でも述べたとおり、今回の調査区がワキショウジ遺跡の辺縁にあたることを考える

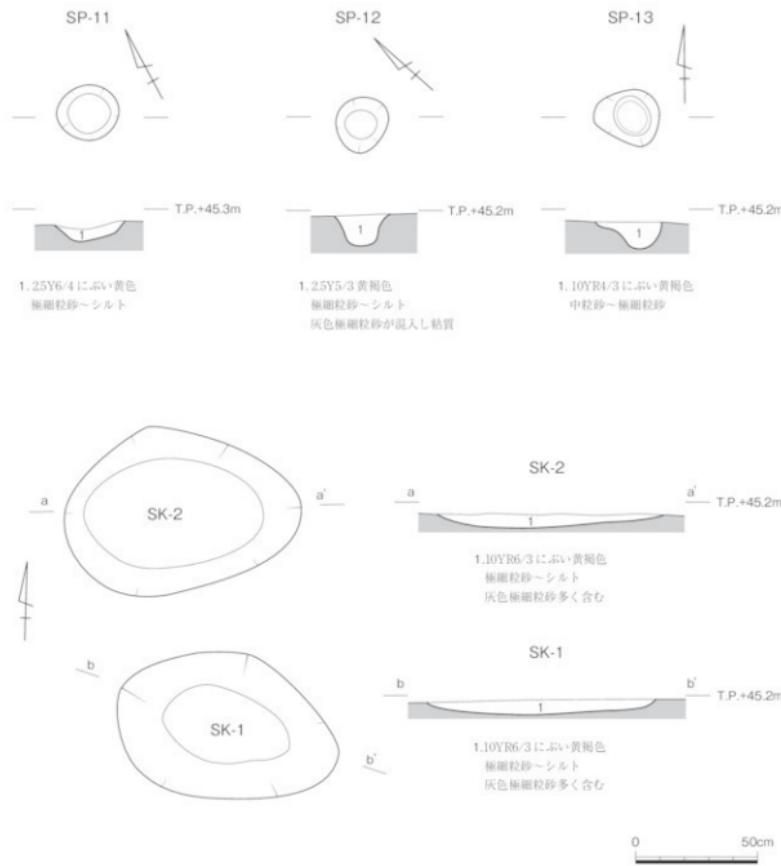


図 36 VIII 層出土遺構平面・断面図 (1 : 20)

とその立地の特徴を表しているというべきであろうか。

VIII層出土遺物 当該層位から出土した遺物のうち実測可能であったものは土器27点、石器6点である（図37・図38）。なお、VIII層からIX層にかけての包含層の掘削では層面の曖昧さから若干上下層の遺物が混在した可能性がある。したがって、VIII層出土遺物とは区別して、VIII～IX層出土遺物として後述する（図39～図44）。

76～83は口縁端部である。76は肥厚させた口縁を端部でやや内傾ぎみに丸く收め、内側に沈線を一条巡らせる。77・78は南四国型壺の口縁端部である。端部に刻目を有し、直下に微隆起突帯が貼付される。端部から頸部へは厚みを大きく減じる。79は、直線的に立ち上がる壺の口縁部である。端部下に幅広の高さの低い突帯を添付する。口縁端部はほぼ欠損しているが、小さめの刻目が1箇所のみ確認できるため、口縁端部に刻目を巡らすものと想定される。80は壺の口縁部である。粘土帶貼付け

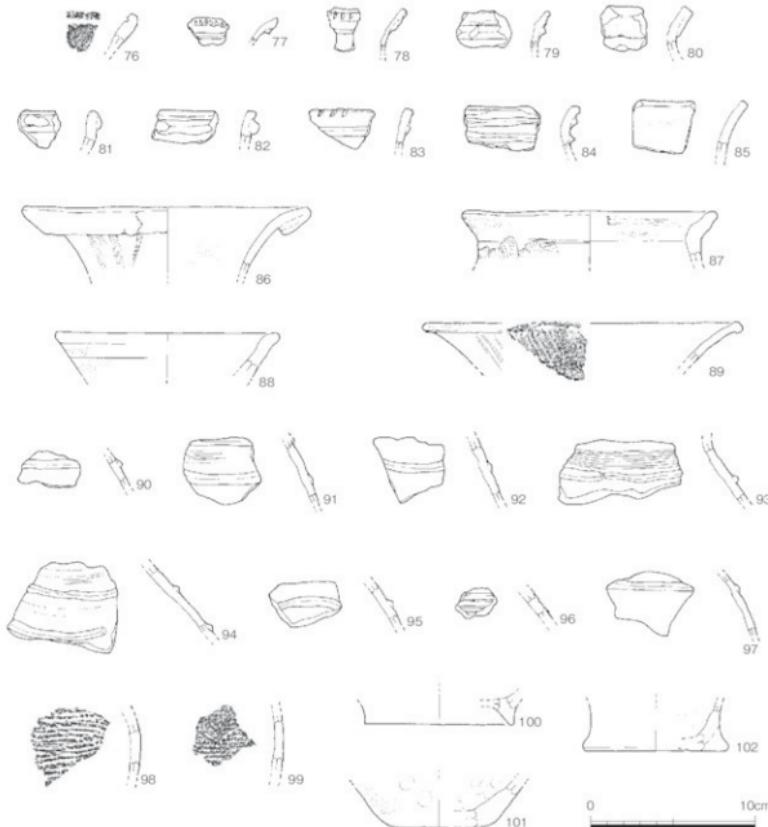


図37 VIII層出土遺物 (1 : 3)

によって端部を肥厚させる。口縁部下には貼付粘土帯の端が確認できる。81は突帯文土器口縁部である。口縁部直下に突帯を有し、端部内側に連続するものと思われる刻目を施す。器面は摩耗が著しい。82は直線的に立ち上がる甕の口縁端部である。口縁端部は平坦に仕上げ、端部から約5mmほど下位に突帯が貼付される。83は南四国型甕口縁端部である。口縁外縁に刻目を有し、微隆起突帯が1条貼付される。器面は摩耗が著しく調整は明らかでない。84は甕口縁部である。外反しつつ立ち上がる口縁部に2条の微隆起突帯が貼付されている。下端で再度器面がカーブを描きはじめため、微隆起突帯が下部にも続く可能性がある。端部は平坦で、内外面共にナデで仕上げられる。85は甕口縁部で、内外面共にナデ調整が認められる。86は弥生土器甕口縁部である。粘土帶貼付によって口縁部を肥厚させる。器面は摩耗が著しく調整が明瞭でないが、ナデ調整で仕上げられているものと思われる。端部の粘土帶部分には指頭圧痕が顕著に見受けられる。87は小型の甕口縁部である。体部はハケ調整で器面を整え、口縁部は内外面共にナデ調整を施す。88は口縁端部下に1条細い沈線が見られる。89は外反しつつ立ち上がる口縁部である。端部はやや丸みをもっておさめる。外面はハケ調整、内面はナデが認められる。90～95、97は壺体部である。いずれも器壁は薄く、外面は橙白色で内面は暗灰色を呈している。出土地点も近接することから同一個体の可能性が高い。これらのうち、比較的器面の残りが良く、調整の確認できるものは93と94である。両片とも2条の微隆起突帯を有し、その間を櫛描文で埋めている。上部の微隆起突帯からは変化することから、頸部への変換点であるものと考えられる。内面はナデ調整が見受けられる。96は弥生土器體部片である。外面に4条の沈線が施文されている。内面はナデで仕上げられる。98・99は弥生土器體部片である。外面は粗いハケ調整がみられ、内面はナデ調整である。100～102は底部である。100は高台状になるもの、101は丸底、102は平底になるものである。102は底部から体部へと外反しつつ立ち上がる。

103・104は石錐欠損品である。103はチャートを石材とする。中央部まで及ばない浅い剥離を連続させて作業部を形成するが、基部を欠損している。なお、腹面側の調整が右側縁に及んでいないことから、製作途中に折れを生じたものか。製作段階の廃棄品とするならば未製品とするべきか。104はサスカイトを石材とする凹基式の石錐である。作用面を形成する剥離は中央部まで及ばず浅く、逆刺はやや鋭さを欠く。作用部先端は折れを生じて欠損する。105は二次加工のある剥片である。主要剥離面の打点に近い方向から二次加工を行っている。腹面側から打撃を加え、後に背面側から剥離を行っている。腹面側には打点は残存しないがバルバスカーが確認でき、背面側には打点が残存する。腹面側からの剥離によって剥片の長さが短くなっているにもかかわらず背面側から調整を行っていることを評価すると、上部刃を作用部として利用することを目的としたものと考えられる。背面側には原縫面が一部残存する。106はチャートを石材とするチップである。上刃の背面側に微細な剥離が連続しており、複数回の打撃等を行う過程で剥離したものと考えられる。107は砂岩製の叩き石である。長楕円の長軸両端部に割れが生じている。石材の性質上打点等は明瞭に観察できないが、両端の剥離は同じ面からの打撃によるものと考えられる。側縁部には敲打痕と思しき痕跡も認められるが、使用頻度は低かったものか顕著な痕跡ではない。108は打製石斧である。頁岩を素材とする。亞円碟から取得した素材剥片を背面側からの打撃によって整形し、腹面側からの剥離で調整している。両側縁から

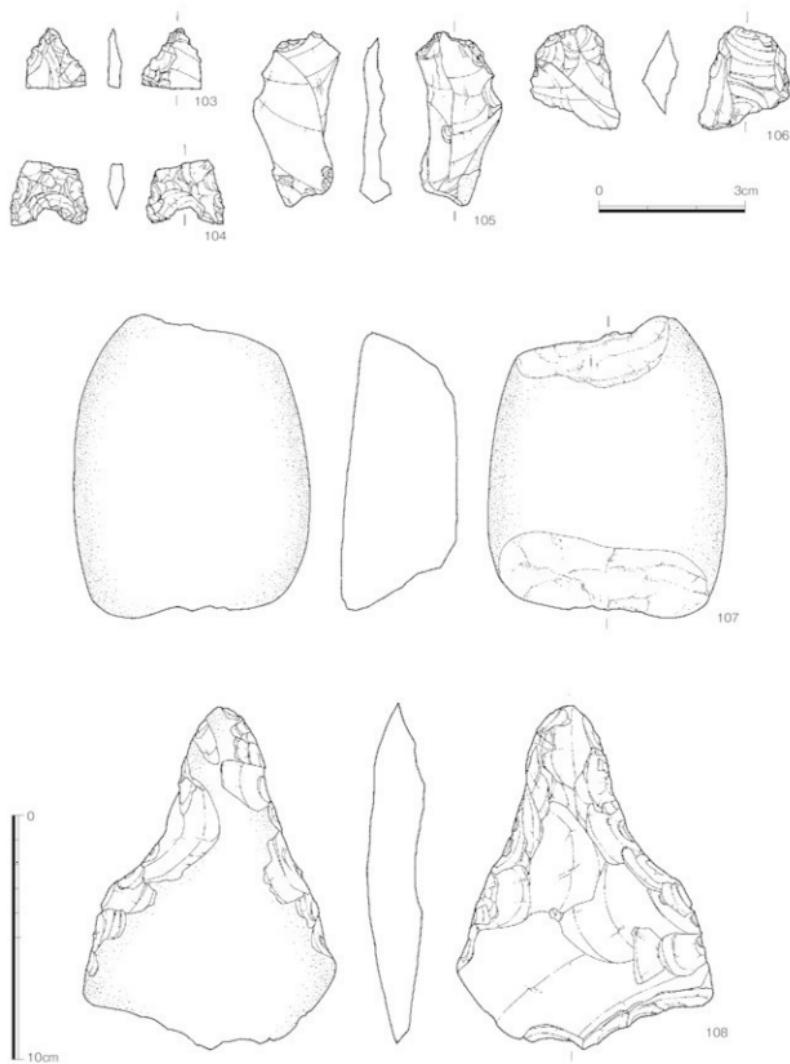


図38 VIII層出土石器（1:1、1:2）

の剥離によって基部は細く整えられ、作用部は緩く弧を描く。背面側には原縁面が残存する。

VIII～IX層出土遺物 先述のとおり VIII 層から IX 層への包含層の変化は平面で認識しづらく、掘り下げ時に両層の遺物が混在した可能性がある。図 39～図 44 に挙げる遺物は VIII 層～IX 層で出土した遺物である。

109～127 は口縁端部片である。109 は器厚が薄く、端部に向かって屈曲する。110 は突帯をもつ口縁端部である。摩耗が著しく調整は不明瞭である。111 は外反して立ち上がり、口縁端部はやや肥厚する。ナデ調整で仕上げられている。112 は口縁端部直下に幅 6 mm 程の刻目突帯を有する。113 は南四国型壺の口縁部である。外反する口縁部に微隆起突帯が 1 条巡る。口縁端部は肥厚させて平坦な面をなす。114 も南四国型壺口縁端部であろうと思われる。表面の摩耗が進み調整が明らかでないが、外端に刻目を有し、端部下に微隆起突帯を持つものであろう。115・116 は突帯文土器口縁端部である。115 は端部下に刻目突帯を有し、116 は無刻目の突帯をもつ。また 116 の内面には沈線が一条確認される。117 は弥生土器、壺もしくは壺の口縁部である。端部に向かってやや内湾する。端部外面下に微隆起突帯が 1 条みられ、微隆起突帯に上接する箇所に円形浮文が確認できる。118 は南四国型壺の口縁部である。外反して平坦な面をなす口縁端部をもち、微隆起突帯を 1 条巡らせるもので、113 と類似する。119・120・122～127 は突帯文土器口縁端部である。119、122 は刻目をもたない突帯が 1 条観察される。内外面ともにナデ調整で仕上げられる。120 は壺口縁部である。器面の摩耗が著しく不明瞭であるが、刻目をもつ突帯を有する。口縁端部の刻みは不明瞭で判別が難しい。123 は口縁部下にやや低めの断面台形の突帯を有する。端部内面には沈線が施される。124 は突帯に工具による刻みを有するタイプである。125・126 は突帯に指もしくは工具を押し付けることにより波状に仕上げるもの。器形は直線的に立ち上がる壺である。127 は刻目突帯を有する。128 は弥生土器壺の体部片であろうと思われる。工具による斜方向の刻目をもつ突帯が確認できる。

129～137 は体部片である。129 は外面に浅い沈線が 3 条確認される。130・131・133 は明瞭な沈線を持つ。133 は沈線下部にハケ調整が確認できる。134・136 は弥生土器壺である。微隆起突帯を 1 条ないし 2 条確認できる。図 37 の 93 等と類似する。135 は壺の体部～頸部であろうと思われる。微隆起突帯を 1 条もつ。もしくは口縁部片とすべきかもしれない。137 は南四国型壺体部片である。在地の胎土を用いたもので 3 条の微隆起突帯が確認される。

138～141 は口縁部～頸部片である。いずれも南四国型壺のものと考えられる。138・139 は粘土帶貼付によって口縁を肥厚させており、共に外端に刻目を施す。139 は肥厚する口縁部下端に微隆起突帯を付す。140 は口縁部を肥厚させることなく丸く仕上げ、微隆起突帯を口縁端部下に 1 条、体部上方に 1 条巡らせる。141 は緩く外反して立ち上がる口縁部で、端部を肥厚させる。頸部には飾文が付される。142～146 は底部片である。142～144、146 は平底のもの、145 は高台状をなすものである。

図 40～図 44 は当該層位から出土した石器である。147～150 は石鎌である。147 は赤いチャートを素材とする凹基式の石鎌で粗い剥離で整形している。148～150 はサスカイトを石材とする石鎌である。148・149 ともに片側の逆刺を欠損する。150 は先端と逆刺を欠損する。152・153 は剥片である。152 は腰岳産の黒曜石を、153 は姫島産の黒曜石を素材とする。154 は二次加工のある剥片である。長軸に

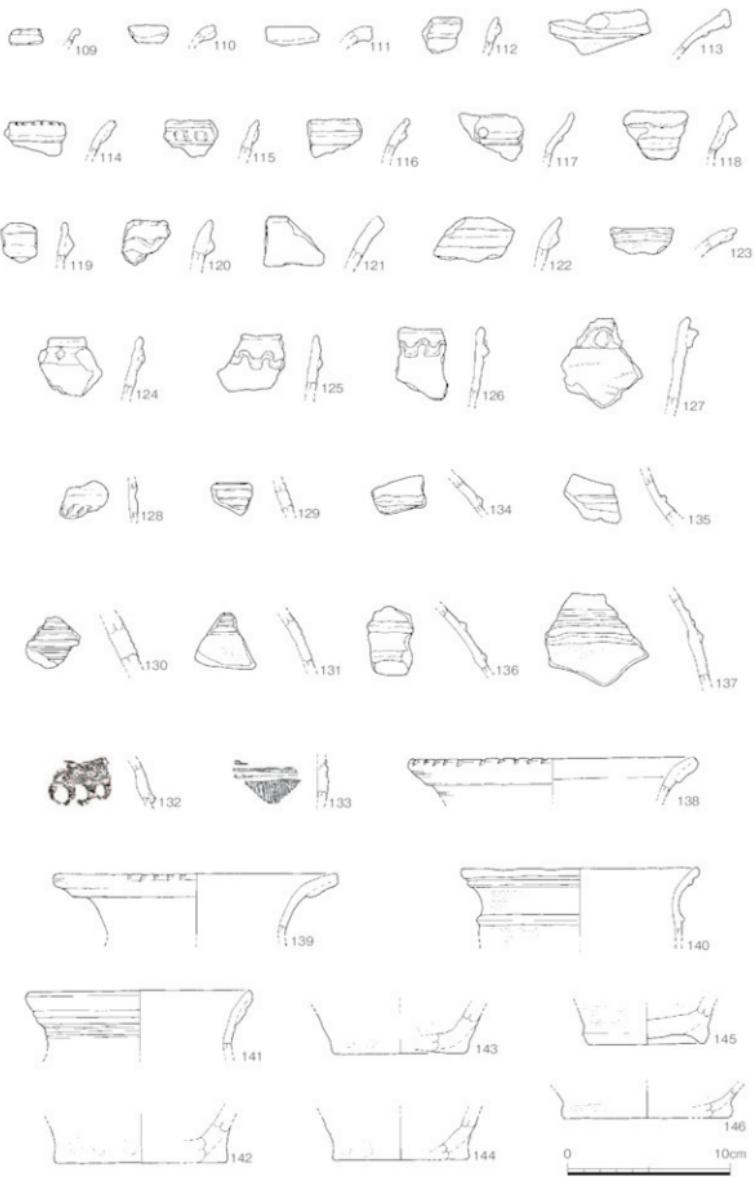


図39 VIII～IX層出土遺物（1:3）

対して上下方向からの剥離が観察される。155～157は打製石斧である。155は基部から刃部へかけて湾曲しながら杓子状にひらく。背面側には原礫面が残存しない。156は右側縁ではやや杓子型を志向するように思われるが、腹面左側の辺縁の剥離によって左側縁が直線的な形状をなす。背面側には原礫面が残存する。157は両側縁がほぼ直線的に伸び、刃部直前で撮形にひらく。背面側に原礫面を残す。158は磨製石斧である。胴部下には研磨が施され、稜をもつ刃部が形成されるが、上半部は磨きが及ばない。159・160は打製石斧欠損品である。ともに基部を欠き、背面に原礫面を残す。159はほぼ短冊形をなして側縁が直線的であるが、160は刃部にかけて撮形にひらく形状をなす。161～163は打製石斧の基部である。161・163は細身の基

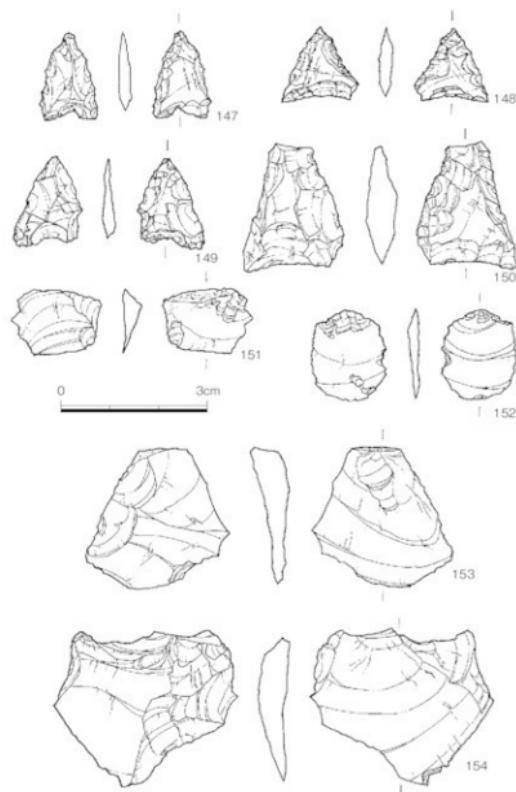


図40 VIII～IX層出土石器(1)(1:1)

部から湾曲して杓子形をなして刃部へ向かうタイプと考えられる。両者ともに背面に原礫面を残している。側縁の剥離は連続するものの剥離面の大きさ等は不均一である。162は撮形にひらくものが湾曲して杓子状になるものか明らかでない。素材剥片の選択によるものか背面側には原礫面は見られない。礫面の風化が著しく判別が難しいが、基部上端は原礫面である可能性がある。側縁の調整は片側は連続するが、片側は折れ面をそのまま利用する。164～166は打製石斧刃部である。164は厚みのあるやや大型のタイプと思われる。表面の風化が進みリング、フィッシュマークが判別しづらいが、腹面側には主要剥離面の打点もしくは打点付近が残存するものと思われる。なお、打点付近の平坦な面は原礫面の残存である可能性がある。胴部への変化点付近で折れを生じており、基部へ向かう形状は明らかでない。折れ面に後出する剥離が背面右側からなされており、再利用したもののか165は未製品である。主要剥離面の打点が観察される。腹面側縁の一部を加工しているが、折れを生じている。背面は原礫面である。166は刃部最大幅付近で折れが生じている。背面は原礫面が残る。167は礫面とネガティ

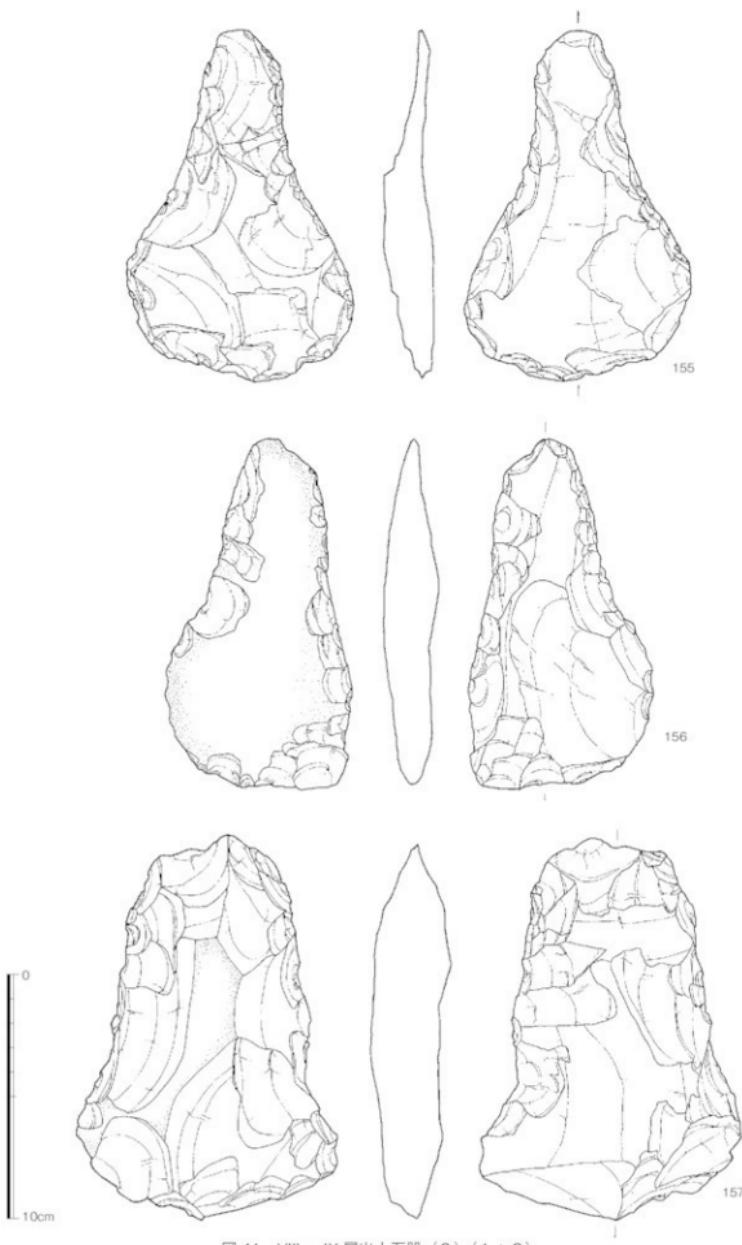


図41 VIII～IX層出土石器(2)(1:2)

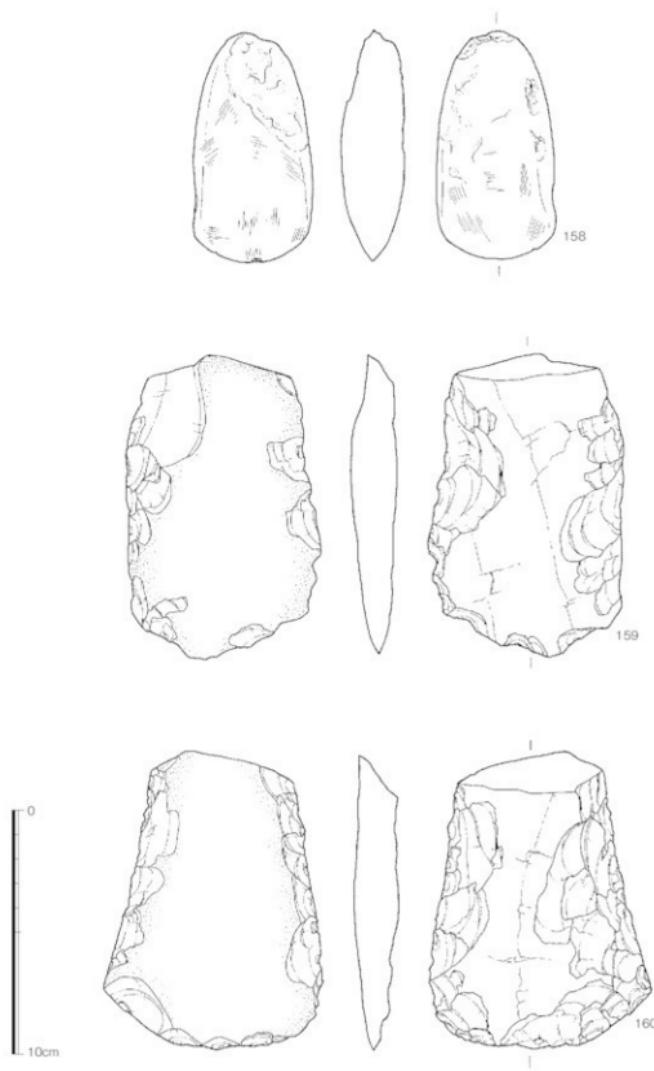


図42 VIII～IX層出土石器（3）（1：2）

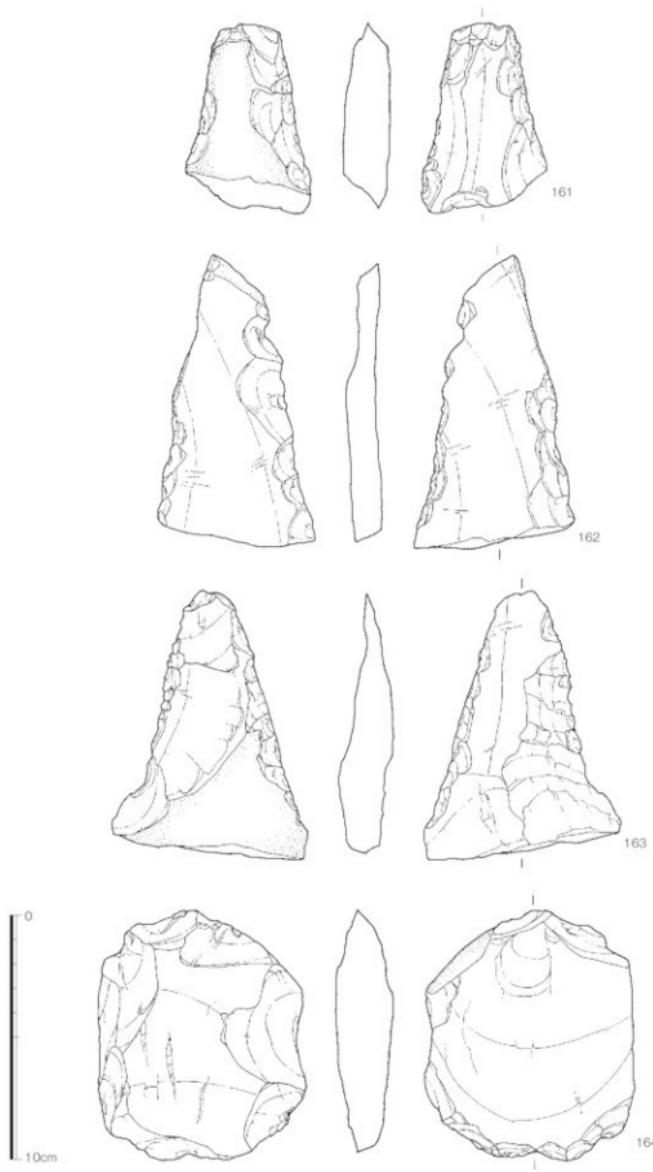


図43 VIII～IX層出土石器(4)(1:2)

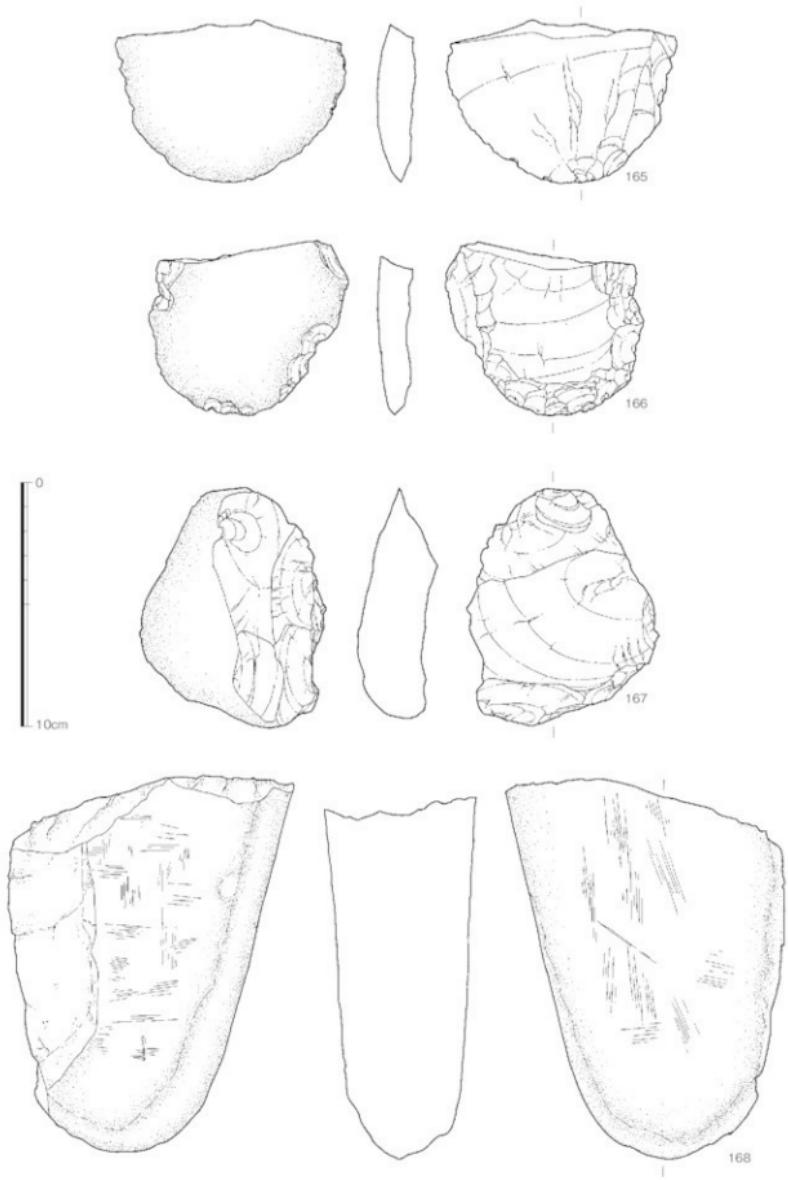


図44 VIII～IX層出土石器(5)(1:2)

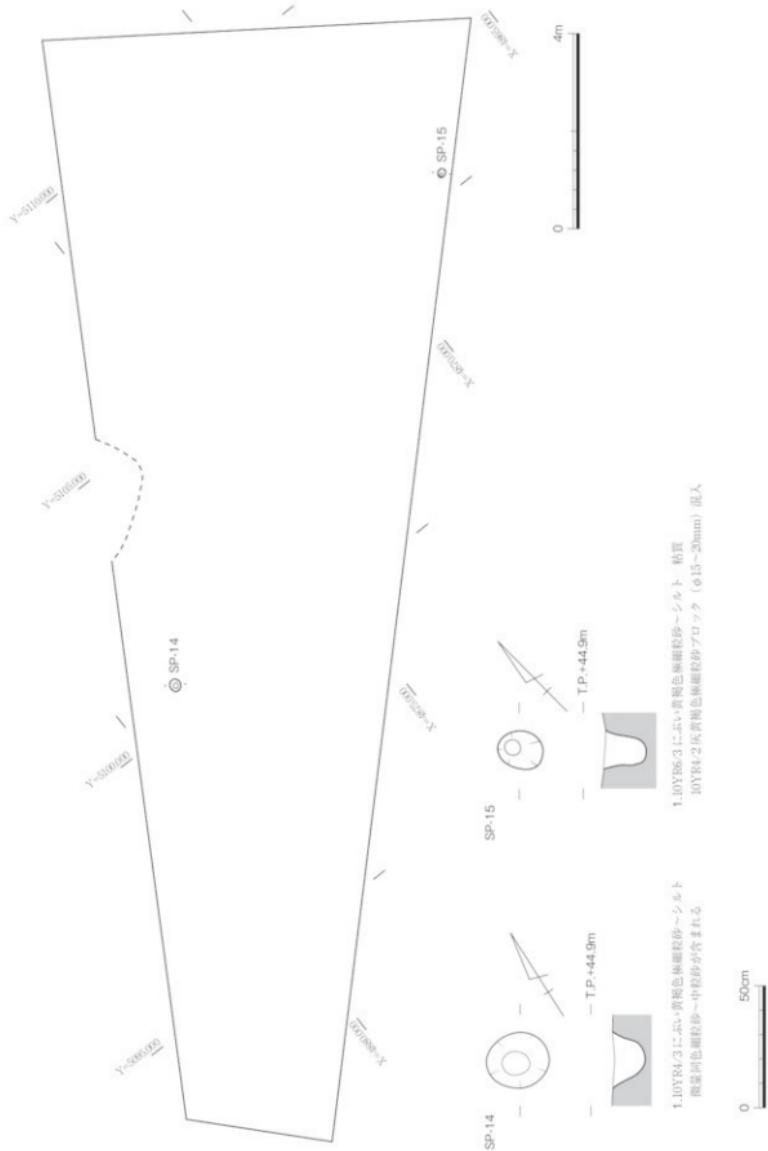


図45 IX層構造平面図及び平面・断面図 (1:100、1:20)

アな面のみから構成される石核である。168は叩き石もしくは擦り石である。敲打痕と磨耗した面が観察される。

(5) IX層の遺構と遺物

検出した遺構 IX層で検出した遺構は柱穴2基である。IX層は遺物を多く含み、良好な包含層であるが、遺構はほとんど確認されず、分布にも傾向は認められない。当該層位における遺構の分布と、各遺構の状況を図45に示した。

SP-14 調査区北東（A 1区）で検出した直径23cm程の楕円形の柱穴である。深さは約13cm残存

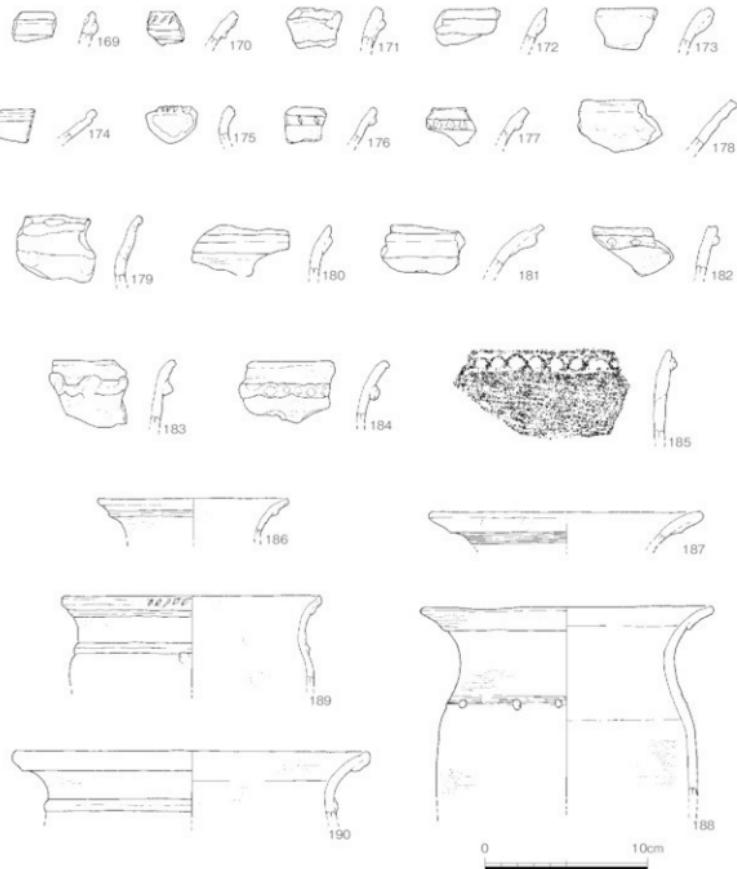


図46 IX層出土遺物(1)(1:3)

しており、埋土は明確にベース層（IX 及び X 層）と区別できる。

SP-15 調査区南西（C 2 区）で検出した直径 15cm 程の楕円形の柱穴である。深さは約 18cm 残存し、埋土にはブロックや炭化粒を含む。

IX 層での遺構検出は上面から作業を行い、掘削中も隨時必要に応じて精査に務めたが、検出した遺構はわずかであった。

IX 層出土遺物 当該層位から出土した遺物のうち実測可能であったものは土器 43 点、石器 14 点である（図 46～図 50）。なお、VIII 層以下では、出土する遺物に縄文晩期に帰属するものと弥生時代に帰属するものの 2 者が存在することをうけ、より詳細な比較を行うため、IX 層出土遺物と IX～X 層間の層理面付近での出土遺物は区別することとし、後者は IX～X 層出土遺物として後述する。

図 46 に示すものは口縁端部片及び口縁～体部片である。縄文時代晩期の突帯文土器と弥生時代の壺等が混在する。

169、171、172、174、178、180～185 は縄文時代晩期の特徴を有するものである。169・172・180・181 は端部下に刻目を持たない突帯文を付し、端部は細く仕上げている。181 は内面に 1 条沈線を施している。172・180 は内面に沈線を持たず、169 は欠損のため明らかでない。171 は刻目突帯文を巡らせる。174 は浅鉢口縁端部である。178 は黒色の胎土で、直線的に立ち上げる深鉢であろうと思われる。平坦な端部に細い刻目を有する。内面には 1 条沈線を施す。182 は端部をやや平坦に仕上げ、刻目を有する細い突帯を巡らせる。183 は直線的に立ち上がる突帯文土器口縁部である。突帯を指によって強く押圧することによって波状の突帯を形成している。184 は口縁端部下 15mm ほどの箇所に刻目を有する突帯が巡る。端部は外面側に小さく肥厚する。185 は直線的に立ち上がる端部直下に刻目突帯を有する。

170、173、175～177、179、186～190 は弥生時代の特徴を有する遺物である。170 は口縁外端に工具による刻目を施し、端部下に微隆起突帯を 1 条付す。173 は粘土帶貼付によって口縁部を肥厚させた壺もしくは壺であり、端部内側に沈線が 1 条巡る。176 は丸く収める口縁端部下に細い刻目突帯を有する。177 は緩く外反する口縁部で、端部は平坦に仕上げ低い刻目突帯を有する。167・177 は器壁が薄く、胎土は他の弥生土器に類似する。179 は緩く外反する壺であり、端部は外面側にやや肥厚する。186 は頸部に微隆起突帯が 1 条巡る壺である。内面は摩滅が著しい。187 は粘土帶添付によって口縁部を肥厚させている。肥厚させた口縁部下には櫛描文が確認できる。188 は粘土帶貼付口縁であるが肥厚はさせない。体部上方に櫛描文が巡り、櫛描文下部に重ねて円形浮文が貼付される。189 は口縁端部に刻目を有し、その直下に微隆起突帯を付す。体部から頸部への変換点付近にさらに微隆起突帯 1 条を巡らせ、その直下に円形浮文を添付している。190 も粘土帶貼付による肥厚口縁をもつ壺で、体部～頸部変換点付近に微隆起突帯 1 条が巡る。

図 47 に示すものは体部～底部片である。191、192、194、196、198、202 は体部に微隆起突帯をもつ一群である。191・192 は 1 条、196 にはおそらく 3 条、198 には 2 条の微隆起突帯が確認できる。194 は 1 条の微隆起突帯の下に線刻が見られる。202 も 2 条の微隆起突帯を有するが、196、198 に比して間隔が広い。193・195 は在地の胎土とは異なる乳白色の胎土をもち外面に赤色顔料を塗布するものと

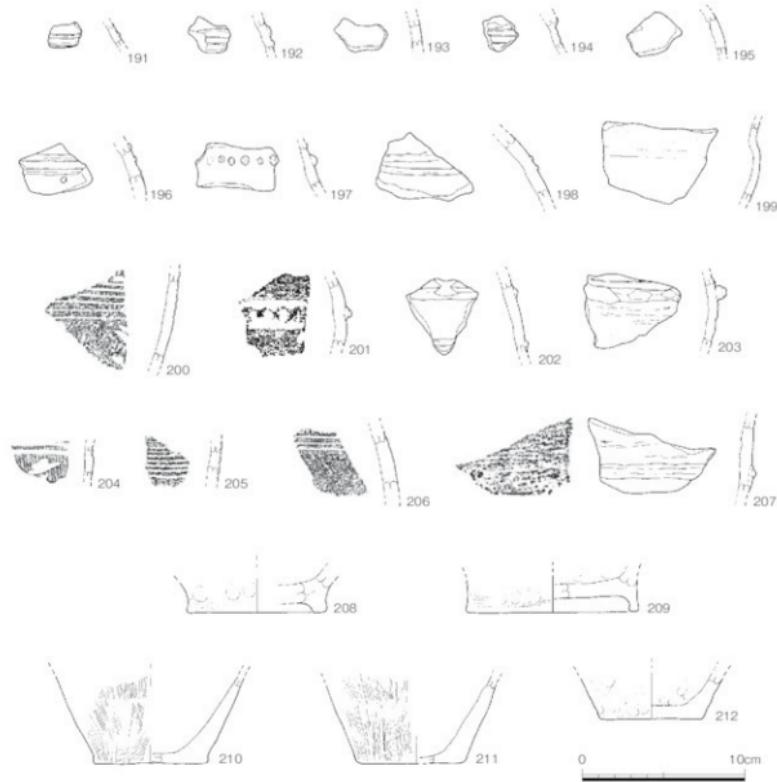


図47 IX層出土遺物（2）（1：3）

思われる。2点は搬入品の可能性がある。外面はナデで仕上げられており、内面の調整は摩耗が激しく不明瞭である。197は壺もしくは壺の体部であろうと考える。微隆起突帯が一条めぐりその下部に不定形の浮文が5つ等間隔に残存する。内外面ともにナデ調整で仕上げる。200・204～206では体部に沈線が確認される。199は縄文土器浅鉢体部である。頸部へ向かって屈曲する。200は6条の沈線が観察される。204は沈線が1条もしくは2条存在するものであろう。沈線の下部はハケ調整、内面はナデ調整で仕上げる。205、206はそれぞれ8条、3条の沈線が巡る。201・203は弥生土器壺体部である。両者とも刻目突帯を付す。203は刻目突帯の下部に沈線が3条巡る。207は突帯文土器体部である。表面の劣化のため刻目の有無は明瞭でない。内外面ともに条痕文が確認できる。

208～212は底部片である。208・209は高台状をなす。210・211は平底で外面にハケ調整、内面をナデ調整で仕上げる。212は平底を呈する弥生土器壺底部である。

213は継長に剥離した剥片である。姫島産黒曜石を素材とする。214は平基式の石鎌である。サヌカ

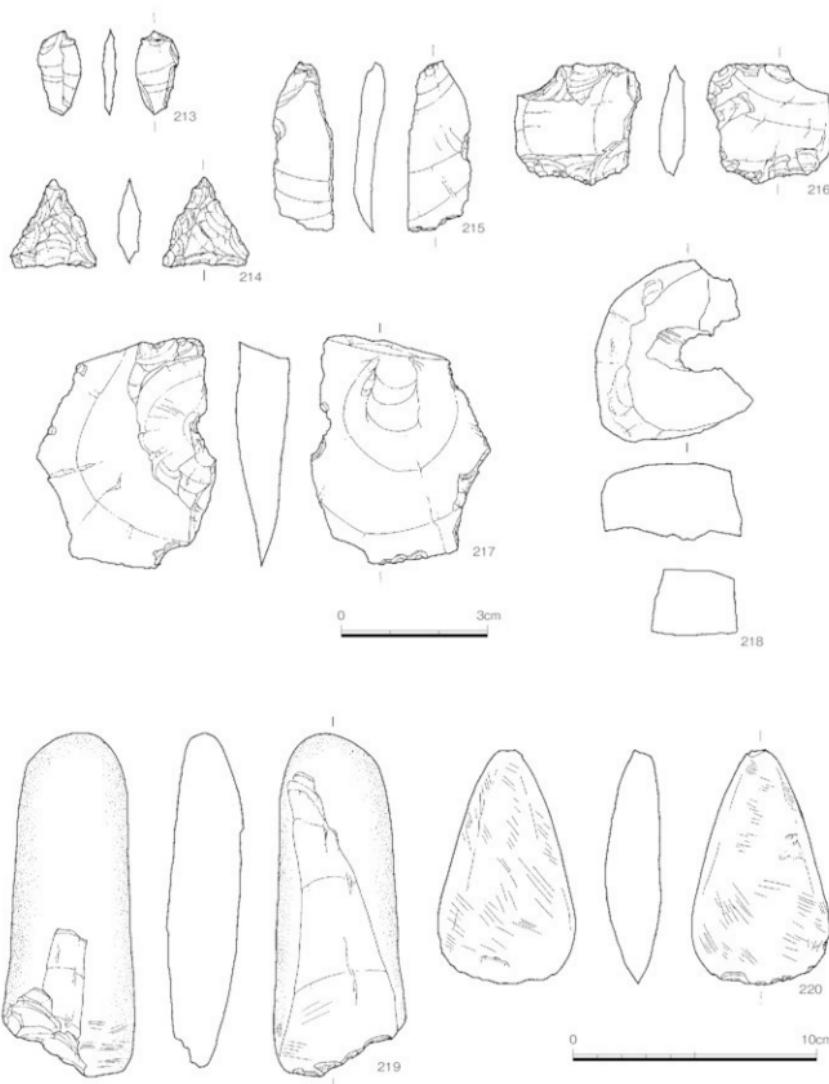


図 48 IX 層出土石器 (1) (1 : 1、1 : 2)

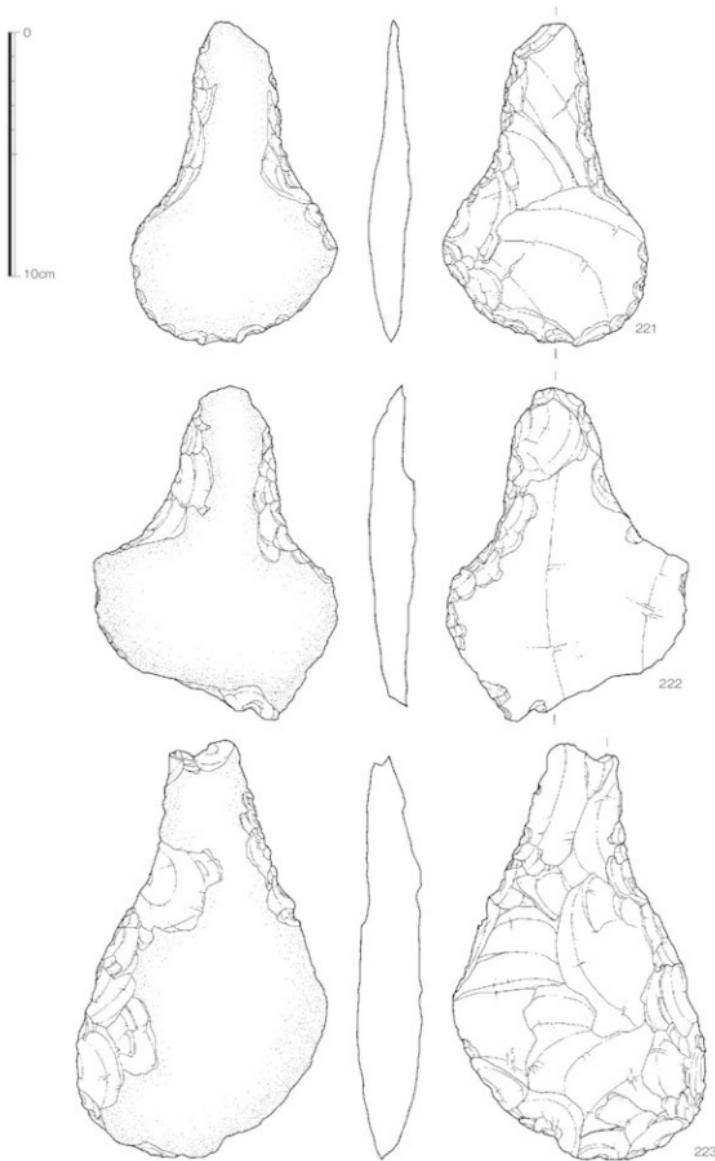


図49 IX層出土石器（2）（1:2）

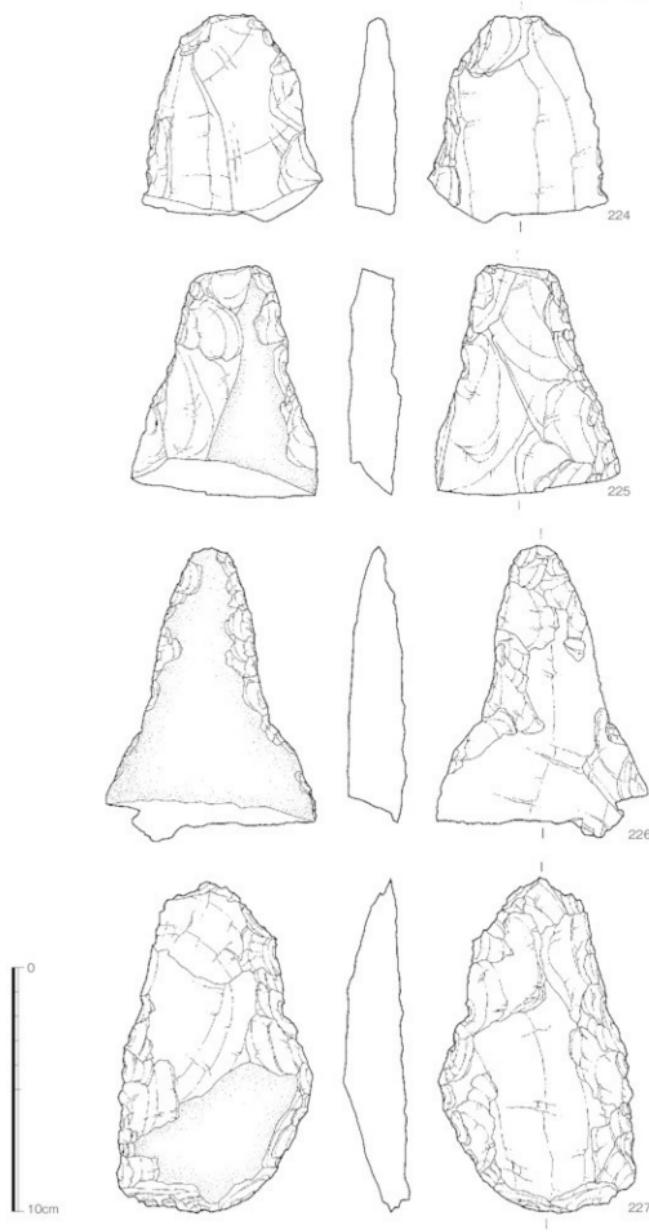


図50 IX層出土石器(3)(1:2)

イトを石材とする。作用部を形成する剥離は浅く中央部まで及ばない。215・217は二次加工のある剥片である。215はチャートを石材とし、縦長の剥片を志向し、腹面にバルブが観察される。腹面右側側縁に後出する剥離があるため現象としては二次加工のある剥片とすべきであろう。背面側には一部原礫面が残る。217は頁岩を素材とする。打点及びバルブが残存しており、腹面下部と右側縁上方に連続する微細な剥離が認められる。216は上下端からの剥離が認められる楔形石器である。218は不定形な砂岩を円柱状に打削し、中心部に直径10mmほどの穿孔を施している。穿孔は上下両側から細い工具を利用して行われたものと推測される。全体の半分ほどを欠損する。219・220は磨製石斧である。219は刃部から基部にかけて大きな剥離が認められる。この剥離により研磨された刃部を欠損した為か、刃部にさらに剥離を加えている。剥離による刃部の再生を意図したものか。220は刃部に敲打による刃の潰れを生じている。

221～227は打製石斧である。いずれも両側縁からの剥離によって基部を細く整形し、刃部に向かって湾曲しながら大きく聞く杓子形をなす。221は細かな剥離が連続して刃部を形成しており、背面側に原礫面を残す。222の刃部は割れを生じて欠損している。背面側に原礫面が観察できる。223の腹面側左側縁は素材の段階で適度なカーブがあったためか整形のための剥離は少なく、右側に剥離が連続する。基部先端は折れを生じており、背面に原礫面を残す。

225・226は打製石斧の基部である。225は撮形に聞くタイプ、226は基部を細く仕上げるタイプである。両者とも刃部へと幅を増す箇所で折れを生じている。225の基部先端は欠損したものの可能性がある。226は背面に原礫面が残る。227は側縁が直線的に緩やかに聞く短冊形で、粗い剥離によって外形の整形を行っている。背面側の刃部付近に原礫面が残る。

IX～X層出土遺物 224、228～237はIX層～X層掘削時に出土した遺物群である。各層に含まれていたものが混在している可能性がある。228・230は弥生土器甌口縁部である。230は南四国型甌で、口縁部外端に刻目を有し、その直下に微隆起突帯が巡る。229・232には突帯が巡る。229の突帯は低く細いが、232は厚みのある稜線が上方寄りの突帯が付される。両者とも内外面ともにナデ調整で仕上げる。231は縄文土器深鉢口縁端部である。瘤状突起を有する。233は浅鉢口縁部である。補修孔と考えられる穿孔が内側から施されている。内外面ともにミガキ。234は弥生土器体部である。沈線2条とハケ調整が認められる。内面はナデで仕上げる。235～237は底部片である。235・237は高台状



図51 IX～X層出土遺物(1:3)

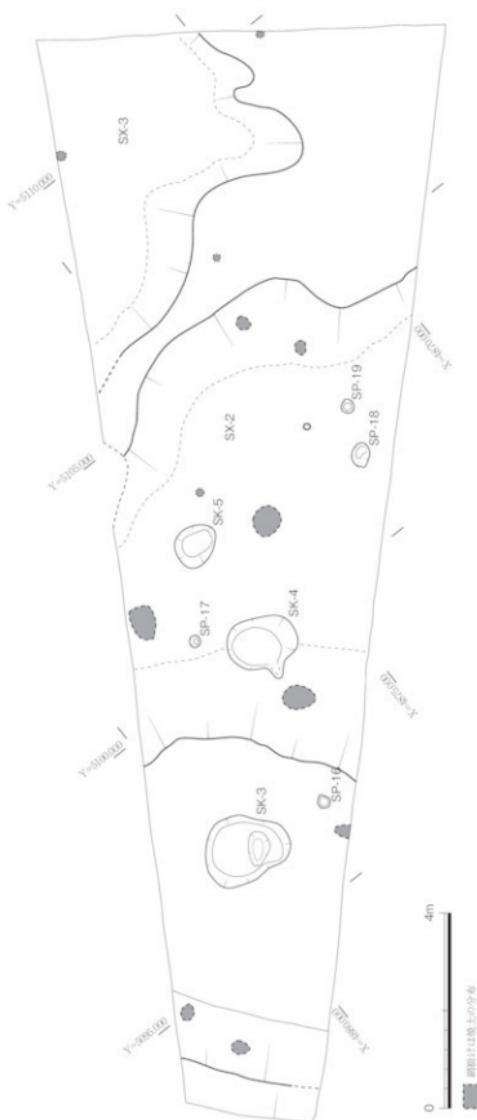


図 52 X～XI 層構造平面図 (1:100)

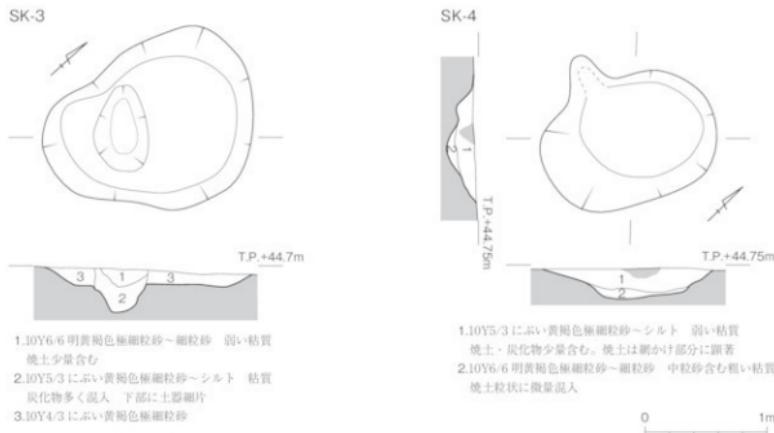


図 53 SK-3・SK-4 平面・断面図 (1 : 40)

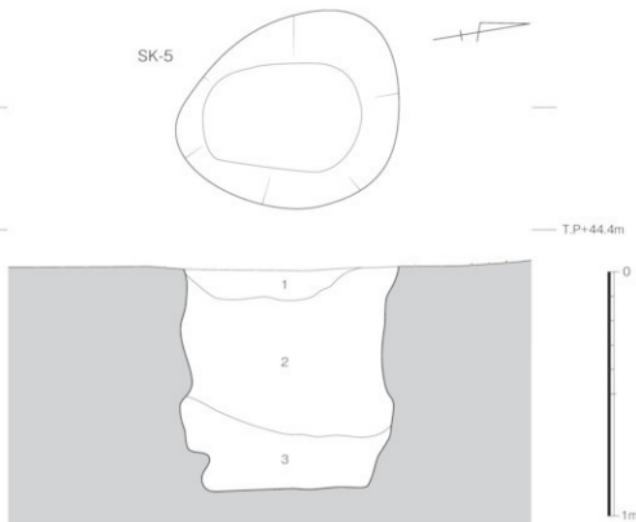


図 54 SK-5 平面・断面図 (1 : 20)

をなす。236は小型の甕の平底と考えられる。当該層位から出土した石器は224のみである（図50）。224は打製石斧基部と考えられる。辺縁に剥離を連続させて整形している。原礫面は残存しない。

（6）X層の遺構と遺物

検出した遺構 X層で検出した遺構は、土坑3基、柱穴5基、落ち、焼土等である。X層で確認される遺構のなかには残存する深さが浅く、包含層中で消滅してしまうものが存在したため、必要に応じ、隨時遺構検出のための精査を行った。なお、最終検出を行ったのは基盤層となるIX層上面である。検出した遺構群は図52に整理した。なお、図52はX層中で確認した遺構と、基盤層（XI層）で確認した遺構をまとめて整理している。

遺構の分布は調査区中央部（B区）に偏る傾向が認められる。なお、焼土については、調査区全体にまばらに分布する。

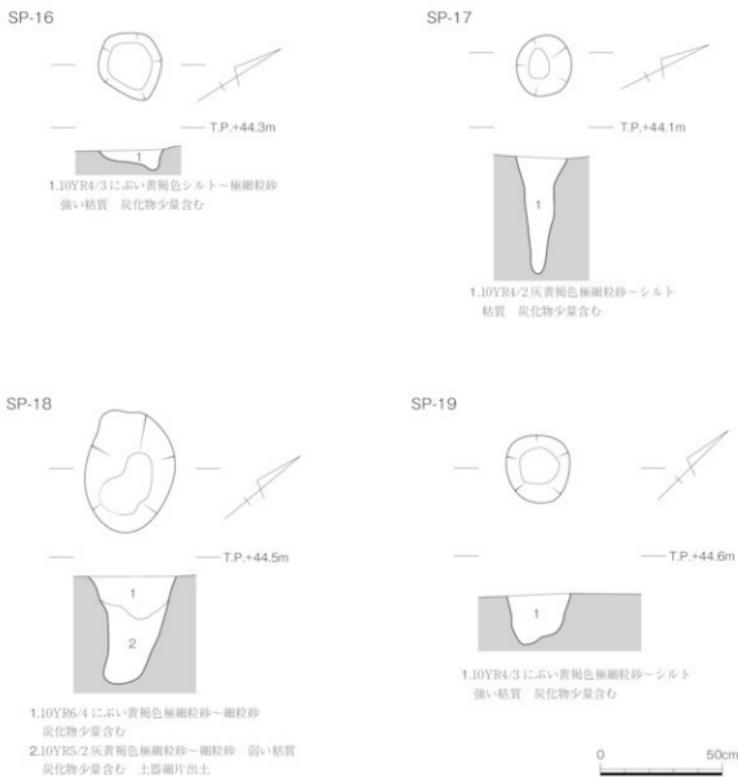


図55 SP-16～19平面・断面図（1：20）

SK-3 調査区北部(A区)で検出した楕円形の土坑で、長軸1.8m、短軸1.4mを測る。中央付近で段をもつて底部へと下がる。埋土は段落ちする付近に焼土や炭化物を少量含む。浅い箇所については埋土がやや曖昧で遺構の立ち上がりが明瞭でない箇所もある。

SK-4 調査区中央(B2区)付近で検出した土坑である。長軸1.46m、短軸1.04mを測る。楕円形を呈し、底にむけて緩くすり鉢状に下がる。埋土上層には焼土や炭化物が粒状に混入する。

SK-5 調査区中央東(B1区)で検出した土坑である。土坑のなかでは唯一XI層で検出した遺構である。長軸90cm、短軸78cmを測る楕円形を呈し、深さが約90cm残存する。検出面から直線的に下がるが、下半で一旦オーバーハングし、最大径を測る。底部は平坦な形状をなす。埋土より294が出土する。

SP-16 調査区北西(A2区)で検出した直径30cm程の楕円形をなす柱穴である。明瞭な埋土が堆積して、容易に区別が可能な遺構だが、残存しているのはわずかに8cm足らずである。柱穴の底部を確認したものと考えられる。

SP-17 調査区中央東(B1区)で確認した柱穴である。検出面では直径30cm程の円形を呈するが、深さは直径を減じながら約47cm残存し、下半では径は5cm～10cmほどに窄まる。杭状の柱穴であろうか。

SP-18 調査区中央西(B2区)で検出した柱穴である。検出面での形状は、48cm×36cm程の楕円形をなすが、下方ではほぼ円形に近づく。埋土中には炭化物や土器細片が含まれ、深さ約44cmが残存する。

SP-19 調査区中央西(B2区)で確認した柱穴である。直径29cmほどの円形をなす。深さ約20cmが残存する。埋土は強い粘質を呈し、炭化物を少量含む。

SX-2 調査区中央に位置する地形の凹みである。東壁壁面で見受けられる15層が対応するものと考えられる。深さは浅く10cm～15cm程度である。平面の形状は不定で、SX-2とした中に小規模な地形の凹凸を含む。しかし、本調査では地区内の現象として“微地形の凹凸が著しくなる箇所”を示す大きな単位として、これら微細な変化を一括し「落ち」として扱った。

SX-3 調査区南東(C1区)で検出した落ちである。SX-2と同質の地形の凹みであり、輪郭は不定で図示に際しては微細な変化を一括して「落ち」としてまとめている。なお、SX-3からは後述する258～292、295、296の遺物が出土する。

X層の出土遺物は、調査区南半に偏重する傾向があり、SX付近からの出土も多い。また、遺構群も中央付近に分布しており、このような現象からSX-2、SX-3は意図的に形成された遺構ではないものの、生活面としての土地利用等による人為に起因するものである可能性が高い。

焼土 X層中において直径30cmほどの楕円形で、焼土が混入する範囲を数箇所確認することができた。これらは焼土と炭化物、またはその影響を受けたと思われるベース層の変化した堆積で区別することができるが、遺構としての明確な掘形を追うことは難しい。比較的まとまりのある焼土の分布を調査では12箇所検出しているが、いずれも焼土の分布は平面的で、深さ10cm程度で曖昧にベースと同化する。

X層出土遺物 当該層位から出土した遺物のうち実測可能であったものは土器59点、石器4点である

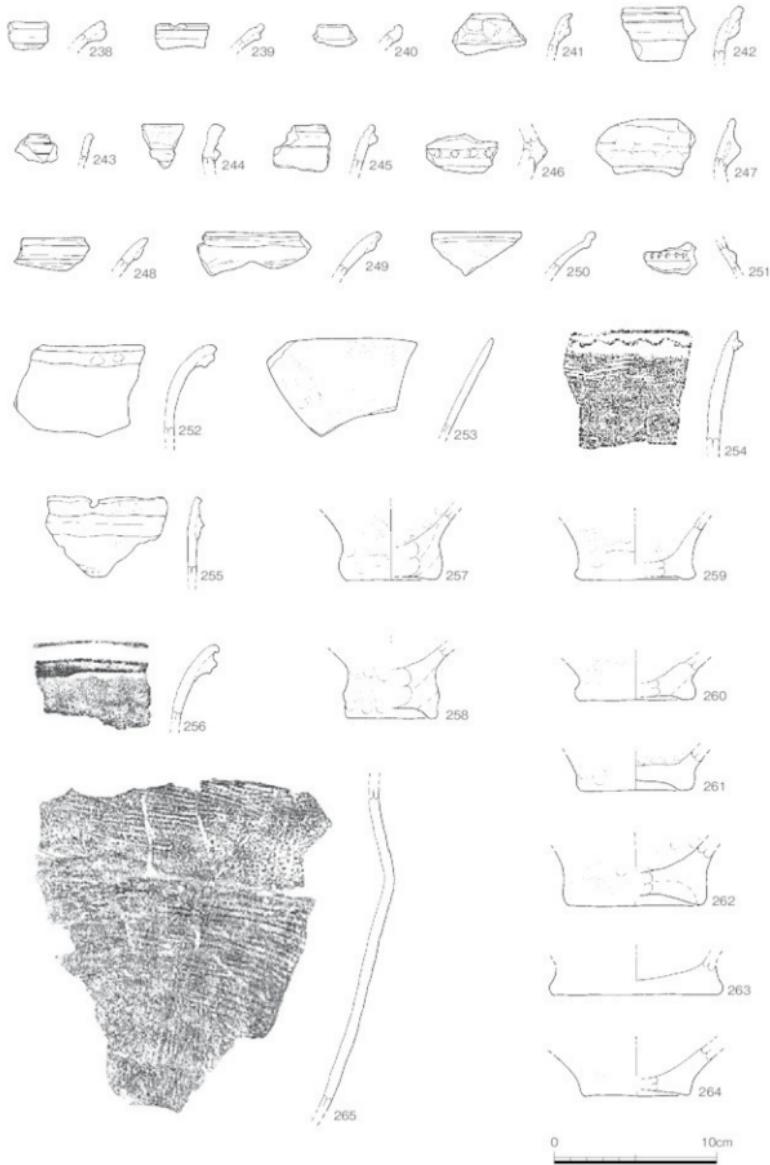


図 56 X 層出土遺物 (1) (1 : 3)



図 57 X 層出土遺物 (2) (1 : 3)

(図56～図60)。このうち土器については14層に含まれる遺物を主に図56に、15層に含まれる遺物を主に図57に図示した。なお、X層中で詳細な層位の判別が定かでないもの及びSX-3出土遺物は図58に示した。

238、247～249は無刻目突帯を有する突帯文土器口縁部である。238は口縁端部直下に突帯を巡らせる。247は幅広の突帯で、器壁と突帯の間に粘土帯の隙間を観察することができる。248・249は幅の狭い低めの突帯をもつ。239・242・245・252は無刻目突帯を有し、端部内側に沈線を巡らせるものである。239は低く細い突帯を付す。242は幅広の突帯を有し、その上側に沈線2条が観察される。245は内面に2条の沈線が巡る。252は外反して立ち上がる口縁に断面台形の突帯が付され、端部内側に沈線が1条巡る。240・250・253は浅鉢口縁端部である。240は内面に、250は外面に沈線を有する。253は口縁端部に向けて直線的に立ち上がる。241は刻目を有する突帯文土器である。突帯文を指圧によって刻む。243は弥生土器である。244は口縁端部で、断面三角形の突帯を巡らせる。246は刻目突帯を有する縄文土器深鉢体部片である。254は緩く外側に開くバケツ状の器形をなす。口縁端部直下に指圧による刻目突帯文を有し、内外面で条痕文を確認できる。255は直線的に立ち上がる深鉢で、幅広の無刻目突帯を付す。内外面をナデで仕上げ、端部は外側へやや肥厚する。256は断面台形の突帯文を有し、端部が外側に肥厚する。外面は摩耗で調整が不明瞭であるが、内面は条痕後ナデで仕上げている。257～264は底部である。257・258はやや高台状をなして底部に厚みを有する。259～262・264は高台状をなすもの、263は平底状をなすものである。265は縄文土器深鉢の体部である。内外面に条痕文を確認できる。

267・271は深鉢口縁部である。直線的に立ち上がり端部を丸く仕上げる。267は内外面ともにナデ、271は内外面ともに条痕文が確認される。

268・272・274・275・281は突帯文土器口縁部である。268は外反ぎみに立ち上がる口縁に無刻目突帯が付される。端部内側には沈線が1条巡る。内外面ともにナデ。272は刻目突帯文を付し、内外面は条痕文が観察される。274は外反する口縁下に断面三角形の突帯が2条巡る。外面は条痕が残り、内面はナデで仕上げている。275は口縁端部は欠損するが無刻目突帯の一部が観察できる。内外面ともにナデで仕上げる。281は刻目突帯を有する。内外面ともに条痕文が観察される。

270・282は古い様相を示す縄文土器口縁部である。270は波状口縁であろうと思われる。外面に沈線を有し、内面は条痕文が観察される。282は縄文土器深鉢口縁部である。波状口縁をなし、口縁端部は肥厚する。波頂部には円形刺突文が施され、内側に沈線が1条巡る。外面は区画文と磨消縄文が見られる。内面は条痕が顕著に残る。

273はほぼ直立に立ち上がる深鉢口縁部である。浮線網状文と思われる多条化した低い突帯を有する。水式土器の影響を受けたものか。

269・272は浅鉢である。269は口縁端部外面と内面に各々1条沈線が巡る。内外面ともにミガキで仕上げられている。

277～280は縄文土器体部である。277～279は外面に区画文が観察される。内面は条痕、もしくは条痕後にナデを施す。280は2本の沈線による磨消縄文が見られ、内面は条痕文が残る。

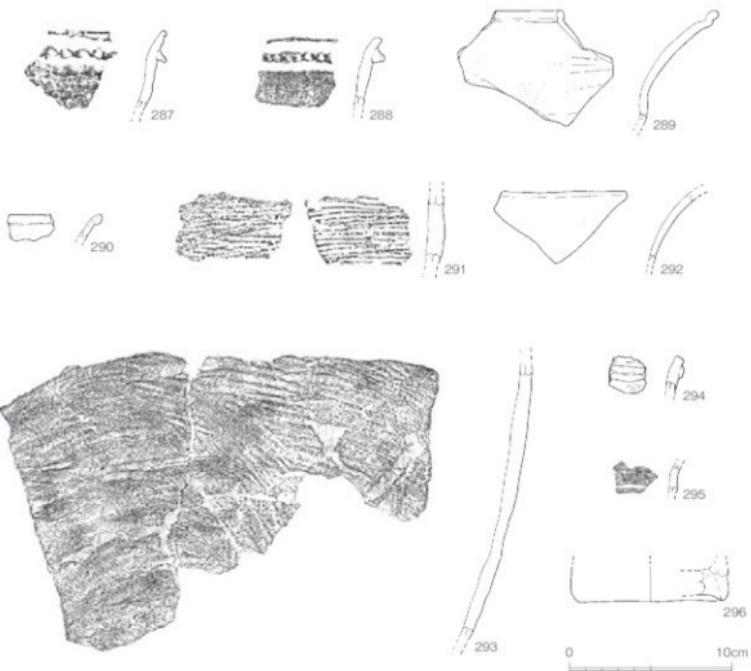


図 58 X 層出土遺物 (3) (1 : 3)

283～286は底部片である。283～286は縄文土器深鉢の低い高台状底部である。283は浅鉢の底部で、低い高台状をなす。

287・288は突帯文土器口縁部である。ともに刻目突帯を有し、端部が肥厚する。287は内面に条痕を残し、288は条痕施文後ナデで仕上げる。289・290・292は浅鉢である。いずれもミガキで調整される。289は端部外面に沈線を各々1条巡らせ、290は端部直前で屈曲する。291は深鉢体部片である。内外面に条痕文が観察される。294は突帯文土器口縁端部である。幅の狭く低い無刻目突帯が貼付される。SK-5より出土した遺物である。296は低い高台状をなす深鉢底部である。

図 59・図 60はX層より出土した石器である。X層からは打製石斧1点、叩き石2点、石核1点が出土している。

297は打製石斧である。側縁が直線的に刃部へ続く短冊形をなしており、背面側から主な整形の剥離を行い、腹面側からは微調整と思われる細かな剥離が連続する。刃部には使用による割れが観察される。背面側上部には原礫面が残存する。

298・299は叩き石である。298は砂岩を素材とする叩き石でおよそ半分を欠損する。表裏中央部に敲打痕が認められ、側縁部はわずかに使用痕が確認される。被熱したものか礫面が赤黒色に変色をき

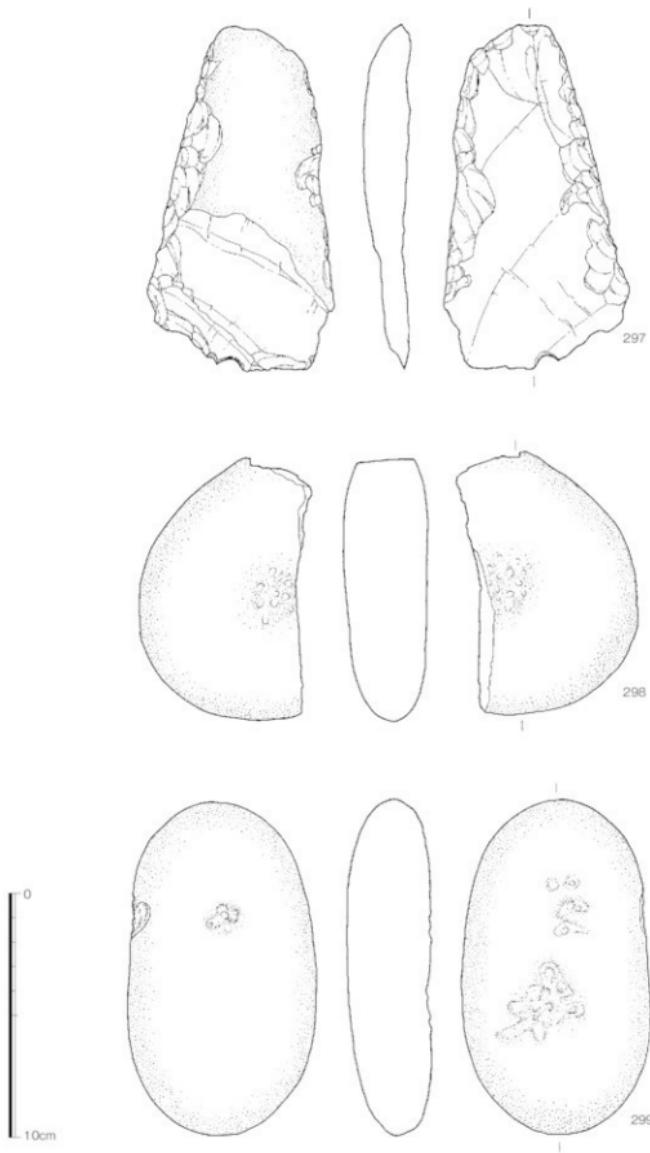


図59 X層出土石器(1)(1:2)

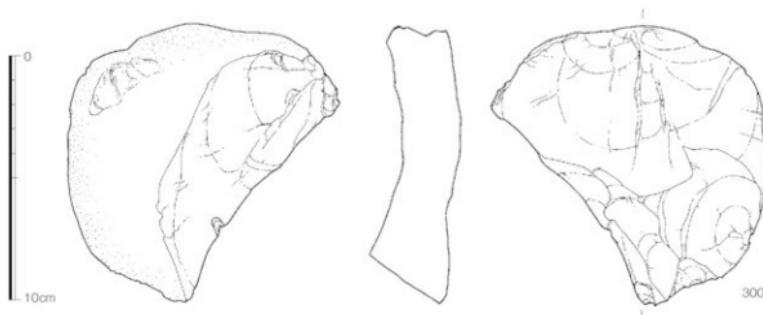


図 60 X層出土石器（2）（1：2）

たしている。299も砂岩を素材としており、両面に敲打痕が認められる。側縁使用の痕跡はわずかである。

300はネガティブな面のみで構成されることから、石核と考えられる。主要剥離面に対して上下方向からの剥離が認められ、背面側には繰面が残存する。

なお、調査期間中に並行して調査地近隣で一部の工事が進められており、遺跡の範囲の確認等のため必要に応じて随時立会調査を行った。その際に出土した遺物を図61に示す。

301は弥生土器壺体部片であろうと考えられる。小片で詳細



図 61 立会調査出土遺物（1：3）

が明らかでないが、斜線文6条が観察される。302は端部を平坦に仕上げる口縁部片である。緩く外反する口縁部に外面側から穿孔されている。穿孔は内面まで貫通しておらず、内面側には穿孔によつて粘土の膨らみが生じている。明瞭に観察できる穿孔は1箇所であるが、左右の剥落部分に各1箇所の穿孔痕が見られるため、連続した施文が等間隔で行われているものと想定される。孔列文土器片であろうと考える。

第IV章 まとめ

は場整備事業に伴って実施された試掘確認調査でその存在が明らかとなったヲキショウジ遺跡は、四万十川本流左岸側の微高地に立地し、南北を本流に注ぐ小河川で区切られる小規模な遺跡である。今回の調査では、縄文時代晚期から弥生時代にかけての遺物と遺構を確認した。

とくに層位的に縄文時代晚期から弥生時代にかけての変遷が追えたことは一つの成果であろう。本報告ではこれらの遺物について十分な検討を加えられてはいないが、出土層位毎に時間的な変化や特徴が看取されており、以下でその概略を記載してまとめとしたい。

包含層層中で最も下層にあたるX層では、突帯文土器と精製浅鉢が共伴する。当該層位から出土する突帯文土器は、調整に条痕文が観察されるものが多く、幅と高さのある突帯を付される割合が高い。突帯には刻み目を有するものと刻み目を持たないものの2種が認められ、刻み目を持つものは指圧による刻み目が施される。また、突帯文土器の口縁内側に沈線が巡るものも存在する。

上層のIX層になると、突帯文土器と弥生土器が混在した状況が看取される。当該層位では突帯文自体にいくつかの変化が認められる。まず、従来の幅と高さのある突帯は減少し、低く幅広のものや、細い突帯が付されるものが数を増す。これらの突帯文土器には、指圧による刻み目のほか、工具を用いた刻み目を持つものが含まれる。これは、同層位から出土する口縁端部に刻み目を有する弥生土器の施具と同類の工具による想定される。この他、X層出土の突帯文土器に比してやや下方に突帯文を有するものが見られるようになる。器面の調整では、X層で大半を占めていた条痕文による調整が減少し、ナデによる仕上げが増加する。これらの突帯文における変化は、弥生時代以降にも当該遺跡で晩期突帯文からの系譜を引く突帯文土器が、弥生土器と製作技法を折衷しつつ変化し、継続して製作されていることを表すものと考えられよう。

IX層から加わる新しい要素である弥生時代の遺物については、粘土帶貼付けによって口縁端部を肥厚させ、口縁部や体部に微隆起突帯を有する所謂南四国型甕が特徴的である。これらは弥生時代中期に向かって口縁が大きく外反し、刻み目や微隆起突帯等による加飾性が高まるものと考えられるが、IX層出土の南四国型甕は外反の程度も低く、微隆起突帯も1条のみ付されるものが大半を占めており、型式的に先行する感が強い。

続くVIII層では、さらに突帯文土器が減少し、IX層で新たに出現したやや弥生化したタイプが少量見られるにとどまり、弥生土器の割合が大半を占めるようになる。

ヲキショウジ遺跡で多数出土したものの中に打製石斧がある。未製品、欠損品も含めIX層を中心として22点が出土しており、その形状から撥形のもの、杓子形のもの、短冊形のものの3類型に大別できるものと思われる。いずれも背面側に鏝面を残すものが多く、付近で採取可能な砂岩や頁岩を素材とする。刃部の形状から、刃部欠損後の剥離で刃部の再生を行っていることを想起させる例もある。

また、從前から認知されている腰帯、姫島産の黒曜石に加え、X層（もしくはIX層に対応する試掘層位）より孔列文を有する土器（13・302）や浮線文系土器（273）の細片等他地域からの影響を受けた遺物が僅ながら出土している。

ヲキショウジ遺跡の発掘調査からは縄文時代晚期から弥生時代にかけて、時代の移行期における高知県西南部の様相を知るうえで良好な資料が得られたものと考えられる。

今回の調査地点は、ヲキショウジ遺跡の範囲のなかでは北側の辺縁にある。当遺跡の中心部と考えられる南側のほう場については、事業対象外のため試掘確認調査も実施し得ていないが、その南北の状況から、良好な状態で遺跡の残存する可能性が高く、周辺における開発等について十分留意が必要であることを周知すると共に今後の調査に期待したい。

遺物観察表

出土土器観察表

団 番号	団版 番号	種 類	器 種	部 位	特 徴	法 量(cm)	色 調			出 土 地 点			
							白様	豊高	外面	内面	断面	調査区	遺構
12	1			口縁端部		-	(2.1b)	7.5YR6/6 にぶい橙 根	7.5YR5/3 にぶい根	7.5YR6/6 にぶい根	Tz16		
12	2	弥生土器	要	口縁端部	内外面に微隆起突帯1条 外面ハ ケ	-	(1.8)	7.5YR6/4 にぶい根	7.5YR5/4 にぶい根	SYR6-6根	Tz16	SD-I	
12	3	奥帯文土器	深鉢／要	口縁端部	削目奥帯文 内外面直後ナデ	-	-	10YR6/4 にぶい黄根	10YR4/2 にぶい黄根	10YR5/3 にぶい黄 根	Tz16		
12	4			口縁部		(1.8)	(3.2)	10YR5/4 にぶい黄根	7.5YR4/3 にぶい根	7.5YR4/4 にぶい根	Tz16		
12	5	奥帯文土器	深鉢／要	口縁部	微隆起突帯 内外面ナデ	(17.8)	(3.6)	2.5Y5/2 灰黄	10YR5/2 灰黄根	10YR4/1 灰灰	Tz16	SD-I	3層
12	6	绳文土器	深鉢	口縁部	内面柔軟	(10.1)	(4.2b)	7.5YR5/4 にぶい根	7.5YR4/2 灰根	7.5YR5/3 にぶい根	Tz16	SD-I	3層
12	7	绳文土器	深鉢	口縁部	内面柔直後ナデ	(30.8)	(4.05)	7.5YR4/2 灰根	10YR7/6 明黄根	SYR6-6根	Tz16	SD-I	3層
12	8	绳文土器	深鉢	口縁部	内面柔直後ナデ 7と同一個体の 可能性有り	(28.4)	(3.0)	10YR7/4 にぶい黄根	7.5YR4/3 根	SYR6-6根	Tz16	SD-I	3層
12	9	—	深鉢／要	底部	外面ハケ	-	(3.7)	10YR8/3 浅黄根	2.5Y6/2 灰 黄	10YR7/3 にぶい黄 根	Tz16	SD-I	3層
12	10	弥生土器	要	底部	外面ナデ	-	(5.3)	5Y2/1黑	SYR6-6根	SYR5-3 灰 赤根	Tz16	SD-I	
12	11	绳文土器	深鉢	口縁～底部	内外面柔軟	(24.2)	(10.1)	10YR7/3 にぶい黄根	10YR7/3 にぶい黄根	10YR5/2 灰黄根	Tz16	SD-I	
12	12	弥生土器	要	口縁～底部	薄部に削目 底部に沈澱5条 体 外部削ハケ 内外面ナデ	(22.5)	(7.8)	10YR6/4 にぶい黄根	10YR6/2 にぶい黄根	2.5Y6/1 灰	Tz16	SD-I	3層
12	13	绳文土器	深鉢	口縁部	孔列文土器 細い突帯3条 空孔	(18.0)	(5.45)	10YR3/2 にぶい根	7.5YR5/6 明黄根	10YR2/2 黑根	Tz16	SD-I	
12	14	绳文土器	深鉢?	頭部	細い突帯2条 脱土が13と類似す る	-	(4.7)	10YR4/2 にぶい根	7.5YR5/4 にぶい根	7.5YR4/3 根	Tz16	SD-I	
12	15	弥生土器	要	体部	微隆起突帯3条 内外面ナデ	-	(5.6)	7.5YR5/2 灰根	7.5YR5/3 にぶい根	7.5YR2/1 黑	Tz16	SD-I	
12	16	绳文土器	浅鉢	口縁部	ヒレ状突帯 内外面ミガキ	(34.6)	(6.25)	7.5YR5/2 にぶい根	7.5YR5/3 にぶい根	7.5YR5/4 にぶい根	Tz16	SD-I	
12	17	绳文土器	浅鉢?	体部	ミガキ	-	(3.3)	7.5YR4/3 根	SYR5/4 に 赤根	10YR5/1 灰灰	Tz16	SD-I	
14	23	奥帯文土器	要	口縁端部	削目奥帯文 内外面ナデ 弥生 化?	-	(1.5)	7.5YR6/6 根	10YR3/2 黑根	7.5YR6/6 根	Tz16		
14	24	弥生土器	要	口縁端部	微隆起突帯2条	-	(1.75)	10YR7/1 灰白	10YR8/2 灰白	N4/O灰	Tz18		
14	25	弥生?	要	口縁端部	沈澱6条 内外面ナデ	-	(2.1)	7.5YR7/6 根	10YR3/2 黑根	10YR3/1 黑根	Tz18		
14	26	弥生土器	要	口縁端部	微隆起突帯2条	(23.6)	(2.0)	7.5YR7/2 明麗灰	7.5YR7/2 明麗灰	7.5YR2/1 黑	Tz18		

番号	国際番号	種類	器種	部位	特徴	法量(cm)	色調			出土場所			
							口掛 唇高	外面	内面	顔面			
										顔面	内面	顔面	
14	27	弥生土器	要	口掛け部	内外面ナデ	(27.5)	(26)	10YR7/3 に赤い黄澄 灰黒褐色	10YR5/2 に赤い黄澄 灰黒褐色	10YR7/3 に赤い黄澄 灰黒褐色	Tr-18		
14	28	弥生土器	不明	底部	平底	-	(21)	5YR6-6 棕	7.5YR5/3 に赤い黄澄 灰黒褐色	5YR6-6 棕	Tr-18		
14	29	弥生土器	不明	底部	平底	-	(43)	7.5YR3/1 黒褐色	7.5YR7/6 7.5YR6/6 棕	7.5YR3/1 黒褐色	Tr-18		
14	30	弥生土器	要	口掛け部	外面ハケ	(23.4)	(47)	25Y6/8 棕	7.5YR5/3 に赤い黄澄 灰黒褐色	25Y6/8 棕	Tr-18		
14	31	弥生土器	要	口掛け部	微隆起突帯1条 内外面ナデ	(21.1)	(42)	10YR8/3 浅黄褐色	10YR5/3 に赤い黄澄 灰黒褐色	10YR6/2 に赤い黄澄 灰黒褐色	Tr-18		
14	32	弥生土器	要	体部	外面ハケ/ 内外面ナデ	-	(57)	7.5YR4/2 灰黒褐色	7.5YR6/6 棕	7.5YR3/1 黒褐色	Tr-18		
14	33	弥生土器	要	頭部	突帯3条 沈窪6条 外面ナデ	-	(68)	10YR7/6 明黄褐色	7.5YR7/6 7.5YR6/6 棕	25Y4/1 黄 灰	Tr-18		
14	34	弥生土器	要	体部	微隆起突帯3条 内外面ナデ	-	(60)	10YR6/6 明黄褐色	5YR6/6 棕	10YR2/1 黒	Tr-18		
16	39	陶磁器	焼?	底部	高台状 緑色釉薬	-	(175)	5Y8-3 淡黄	5Y7-3 浅黄	2.5Y7/1 灰 白	Tr-19	6層	
16	40	突帯文土器	深鉢/要	口掛け部	削目突帯文 内外面ナデ	-	(61)	25Y3/3 壁	10YR7/4 オリーブ灰 に赤い黄澄 灰	2.5Y3/1 黑 褐色	Tr-19	8~9層	
16	41	突帯文土器	深鉢/要	口掛け部	削目突帯文 内外面ナデ	-	(45)	7.5YR5/4 に赤い黒 褐色	7.5YR4/1 褐色	5YR2/6 棕	Tr-19	8~9層	
17	42	-	土鍤	-	ナデ	22	33	10YR7/4 に赤い黄澄 灰	10YR7/4 に赤い黄澄 灰	2.5Y7/3 淡 黄	Tr-25		
17	43	縦文土器	焼?	体部	沈窪3条	-	-	7.5YR17/1 黒	7.5YR4/3 黒褐色	7.5YR3/1 黒褐色	Tr-25	8層	
17	44	弥生土器	要	口掛け部	微隆起突帯1条 内外面ナデ	(21.2)	(29)	10YR3/2 黒褐色	7.5YR4/3 黒褐色	5YR6/6 棕	Tr-25	6層	
17	45	突帯文土器	深鉢/要	口掛け部	口掛け部に削目 刻目 突帯文 外面 ハケ/ 内外面ナデ	(26.0)	(42)	7.5YR6/4 に赤い黒 褐色	7.5YR4/2 灰褐色	5YR6/8 棕	Tr-25	7層	
31	54	-	土鍤	-	-	40	(235)	10YR4/2 灰褐色	10YR8/4 浅黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	A~C区	VI層	
31	55	須恵器	亞	底部	高台状	-	(285)	N6/灰	N7/灰白	N7/灰白	A~C区	VI層	
31	56	青磁	焼	底部	高台状 緑色釉薬	-	(10)	2.5GY7/1 明オーライブ 灰	2.5GY8/1 灰 白	N7/灰白	A~C区	VI層	
31	57	土鍤器	焼	底部	高台状	-	(165)	5RY8/4 淡 黄	5RY8/3 淡 黄	5RY8/4 淡 黄	A~C区	VI層	
31	58	土鍤器	要	口掛け部	体部外側ハケ/ 口掛け部ナデ	(23.5)	(99)	7.5YR5/6 明褐色	7.5YR5/6 明褐色	7.5YR5/6 明褐色	A~C区	VI層	
31	59	須恵器	亞	体部	燒成不良	-	(99)	25Y7/1 灰 白	25Y7/2 灰 黃	2.5Y7/1 灰 白	A~C区	VI層	
32	60	突帯文土器	深鉢/要	口掛け部	無削目突帯 内外面ナデ 弥生化?	-	(275)	10YR6/6 明褐色	7.5YR6/6 7.5YR6/6 棕	10YR6/6 明褐色	B~C区	錯層	
32	61	突帯文土器	要	口掛け部	外面無削目突帯 内面沈窪 弥生化?	-	(19)	10YR5/4 に赤い黄澄 灰褐色	25Y5/2 壁 に赤い黄澄 灰褐色	25Y5/2 壁 に赤い黄澄 灰褐色	B~C区	錯層	
32	62	弥生土器	要	口掛け部	削目突帯	-	(19)	10YR7/3 に赤い黄澄 灰褐色	10YR6/2 灰褐色	10YR4/1 灰褐色	B~C区	錯層	
32	63	縦文土器	浅鉢	肩部	内外面ミガキ	-	(205)	10YR4/2 灰褐色	10YR4/1 灰褐色	10YR4/2 灰褐色	B~C区	錯層上面	
32	64	弥生土器	要	体部	外面タタキ 内外面ナデ	-	(55)	10YR5/3 に赤い黄澄 灰褐色	10YR5/3 に赤い黄澄 灰褐色	10YR3/1 黒	B~C区	錯層	

固 定 番 号	固 定 番 号	種 類	器 種	部 位	特 徴	法 量(cm)	色 調				出 土 地 点	
							口径	器高	外 面	内 面	断 面	調査区
37	26	陶文土器?	甕	口縁端部	口縁部内側に沈線	-	(21)	10YR6/6 に赤い黄橙 褐色	10YR6/4 に赤い黄橙 褐色	10YR5/3 に赤い黄橙 褐色	C区	壁面
37	27	陶生土器	甕	口縁端部	口縁端部に削目 肩隆起突帯1条	-	(11)	10YR6/3 に赤い黄橙 褐色	10YR5/1 黒灰	10YR4/1 黒灰	B区	壁面
37	28	陶生土器	甕	口縁端部	口縁端部に削目 肩隆起突帯1条	-	(26)	10YR6/3 に赤い黄橙 褐色	10YR4/2 赤黄褐	10YR4/2 赤黄褐	C2区	壁面
37	29	陶帶文土器	甕	口縁端部	口縁端部に削目 無削目突帯 陶 化?	-	(225)	25Y5/1 黃 灰	25Y4/2 褐 灰	25Y6/2 黑 灰	C1区	壁面
37	30	陶生土器	甕	口縁端部	粘土帶貼付口縁 内外面ナデ	-	(27)	7.5YR7/4 に赤い橙 褐色	7.5YR7/4 に赤い橙 褐色	10YR4/1 黒灰	C区	壁面
37	31	奕帶文土器	深鉢	口縁端部	無削目突帯 口縁端部に削目 内 外面ナデ	-	(23)	5YR4/6 赤 褐色	5YR4/4 黒	7.5YR4/4 黒	C2区	壁面
37	32	奕帶文土器	深鉢	口縁端部	無削目突帯 内外面ナデ	-	(20)	10YR6/6 明黄褐	10YR6/3 に赤い黄 褐色	10YR6/3 に赤い黄 褐色	B-C区	壁面
37	33	陶生土器	甕	口縁端部	口縁端部に削目 肩隆起突帯1条	-	(245)	10YR7/4 黒灰	10YR3/1 黒褐	10YR3/1 黒褐	C区	壁面
37	34	陶生土器	甕	口縁部	肩隆起突帯2条	-	(27)	10YR6/6 明黄褐	10YR4/1 黒灰	10YR7/6 明黄褐	B区	壁面
37	35	陶生土器	甕	口縁部	外面ナデ/ 内面ナデ	-	(33)	10YR7/4 に赤い黄 褐色	7.5YR7/4 に赤い橙 褐色	10YR4/1 黒灰	B区	壁面
37	36	陶生土器	甕	口縁部	粘土帶貼付口縁 内外面ナデ	17.2	(40)	5YR2/6 棕 褐色	7.5YR7/6 黄 褐色	10YR8/6 黄 褐色	上面	壁面上面
37	37	陶生土器	甕	口縁部	外面粗いハケ / 内面ナデ	15.2	(31)	10YR6/6 明黄褐	7.5YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	B区	壁面上面
37	38	陶生土器	甕	口縁部	内外面ナデ 口縁部下に沈線?	13.5	(265)	10YR5/4 に赤い黄 褐色	10YR4/3 に赤い黄 褐色	10YR5/4 に赤い黄 褐色	B-C区	壁面上面
37	39	陶生土器	甕?	口縁部	外面ハケ? / 内面ナデ?	(19.2)	(25)	7.5YR5/4 に赤い橙 褐色	7.5YR5/4 に赤い橙 褐色	10YR4/4 黒	A-B区	壁面上面
37	40	陶生土器	甕	体部	肩隆起突帯2条 粘入品?	-	(225)	10YR4/1 黒灰	5YR4/6 棕 褐色	5YR4/4 棕 褐色	B区	壁面
37	41	陶生土器	甕	体部	肩隆起突帯2条 粘入品?	-	(41)	10YR4/1 黒灰	7.5YR7/6 黒	10YR6/1 黒灰	B区	壁面
37	42	陶生土器	甕	体部	肩隆起突帯2条 粘入品?	-	(40)	10YR4/1 黒灰	7.5YR7/6 黒	10YR5/1 黒灰	B区	壁面
37	43	陶生土器	甕	体部	肩隆起突帯2条 楊枝文 粘入 品?	-	(39)	10YR4/1 黒灰	7.5YR7/6 黒	7.5YR8/4 浅黄褐	B区	壁面
37	44	陶生土器	甕	体部	肩隆起突帯2条 楊枝文 粘入 品?	-	(43)	10YR4/1 黒灰	7.5YR7/6 黒	10YR4/1 黒灰	B区	壁面上面
37	45	陶生土器	甕	体部	肩隆起突帯1条 粘入品?	-	(28)	10YR4/1 黒灰	7.5YR7/6 黒	10YR4/1 黒灰	B区	壁面上面
37	46	陶生土器	甕?	体部	沈線4条	-	(19)	7.5YR4/3 黒	10YR7/6 明黄褐	5YR4/8 赤	C2区	壁面
37	47	陶生土器	甕	体部	肩隆起突帯1条 粘入品?	-	(39)	10YR3/1 黒褐	7.5YR7/6 黒	10YR5/1 黒灰	B区	壁面
37	48	陶生土器	甕	体部	外面ハケ / 内面ナデ?	-	(35)	10YR3/1 黒褐	10YR2/2 黒褐	10YR2/2 B-C 2区	壁面	
37	49	陶生土器	甕	体部	外面ハケ / 内面ナデ?	-	(35)	5YR4/3 に赤い 褐色	10YR3/3 黒	10YR2/1 黒	A-B区	壁面上面
37	50	陶生土器	—	底部	高台状	-	(19)	10YR2/2 黒褐	5YR4/4 棕 褐色	10YR2/2 黒	A-B区	壁面上面
37	51	陶生土器	—	底部	平底	-	(29)	10YR5/1 黒灰	7.5YR8/4 浅黄褐	10YR5/1 黒灰	表面取 土	壁面

番号	国版 番号	種類	形種	部位	特徴	法量 (cm)	色調			出土地点			
							口掛 部高	外面	内面	断面	溝合区	邊縫	輪位
37	102	渦生土器	一	底部	平底	-	(28)	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 5/2 灰黄褐	B 1 ~ C 1K	課題	
39	109	渦生土器	要	口縁部	内外面ナデ	-	(10)	5YR 5/6 明 赤褐	5YR 5/6 明 赤褐	5YR 5/1 褐 灰	B ~ C 区	課題~瓦器	
39	110	渦生土器	要	口縁部	内外面ナデ	-	(105)	5YR 4/4 に ぶい赤褐	5YR 4/4 に ぶい赤褐	5YR 4/6 赤 褐	A ~ B 区	課題~瓦器	
39	111	渦生土器	要	口縁部	端部肥厚 内外面ナデ	-	(11)	10YR 7/6 明黄褐	7.5YR 7/6 明黄褐	10YR 4/1 灰灰	B ~ C 区	課題~瓦器	
39	112	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	削目突帯文 内外面ナデ	-	(215)	10YR 6/3 にぶい黄橙	10YR 6/4 にぶい黄橙	10YR 8/4 灰黄褐	B ~ C 区	課題~瓦器	
39	113	渦生土器	要	口縁部	端部肥厚 微隆起突帯 1 条 内外 面ナデ	-	(27)	10YR 6/1 微灰	10YR 5/1 微灰	10YR 3/1 黑褐	A ~ B 区	課題~瓦器	
39	114	渦生土器	要	口縁部	端部に削目 突隆起突帯 1 条	-	(22)	5Y 4/1 黑	5Y 3/1 オ リーブ黒	5Y 3/1 オ リーブ黒	B 区	課題~瓦器	
39	115	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	削目突帯文 内外面ナデ 渦生 化?	-	(225)	10YR 8/6 黄褐	10YR 3/3 黄褐	10YR 3/3 黄褐	B 区	課題~瓦器	
39	116	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	無削目突帯文 内面に沈縫 1 条 内外面ナデ	-	(225)	10YR 4/3 にぶい黄褐	5YR 4/6 未 定	10YR 5/4 にぶい黄褐	B 区	課題~瓦器	
39	117	渦生土器	要(?)	口縁部	微隆起突帯 1 条 円形浮文	-	(29)	10YR 8/4 浅黄褐	10YR 5/2 灰黄褐	10YR 3/1 黑褐	B 区	課題~瓦器	
39	118	渦生土器	要	口縁部	端部に削目 微隆起突帯 1 条	-	(295)	10YR 6/6 明黄褐	10YR 3/1 黑褐	10YR 5/1 黑褐	B 区	課題~瓦器	
39	119	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	無削目突帯 1 条 内外面ナデ	-	(245)	10YR 5/6 黄褐	10YR 6/4 にぶい黄褐	10YR 3/2 黑褐	A ~ B 区	課題~瓦器	
39	120	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	削目突帯 1 条 内外面ナデ	-	(26)	10YR 6/6 明黄褐	5YR 5/6 明 赤褐	10YR 4/2 灰黄褐	B ~ C 区	課題~瓦器	
39	121	渦生土器	要	口縁部	内外面ナデ	-	(31)	5YR 5/6 明 赤褐	2.5Y 5/3 黄 2.5Y 4/3 オ リーブ黒	B 1 ~ C 1K	課題~瓦器		
39	122	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	無削目突帯 1 条 内外面ナデ	-	(27)	10YR 5/6 黄褐	10YR 5/4 にぶい黄褐	10YR 3/1 黑褐	B 2 ~ C 2K	課題~瓦器	
39	123	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	無削目突帯 1 条 内面に沈縫 1 条 内外面ナデ	-	(16)	10YR 7/6 明黄褐	2.5YR 5/6 明赤褐	10YR 7/6 明黄褐	B 区	課題~瓦器	
39	124	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	削目突帯 1 条 内外面ナデ 渦生 化?	-	(36)	10YR 6/6 明黄褐	10YR 7/4 にぶい黄褐	10YR 6/6 明黄褐	2K	課題~瓦器	
39	125	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	液状の削目突帯 1 条 内外面ナデ	-	(34)	10YR 7/6 明黄褐	10YR 5/4 にぶい黄褐	10YR 6/6 明黄褐	B 区	課題~瓦器	
39	126	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	液状の削目突帯 1 条 内外面ナデ	-	(45)	10YR 6/6 明黄褐	10YR 5/4 にぶい黄褐	10YR 6/6 明黄褐	B 区	課題~瓦器	
39	127	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	削目突帯 1 条 内外面ナデ	-	(55)	10YR 6/4 にぶい黄褐	7.5YR 6/6 にぶい黄褐	10YR 3/1 黑褐	出土地点	課題~瓦器	
39	128	渦生土器	要	体部	削目をもつ突帯貼付	-	(23)	7.5YR 6/1 白	7.5YR 7/3 にぶい黄褐	10YR 4/1 灰白	A ~ B 区	課題~瓦器	
39	129	渦生土器	要	体部	沈縫 3 条 内面ナデ	-	(20)	7.5YR 6/6 白	7.5YR 3/1 黑褐	7.5YR 6/6 白	B ~ C 区	課題~瓦器	
39	130	渦生土器	要	体部	沈縫 7 条 内面ナデ	-	(32)	10YR 7/4 にぶい黄褐	5YR 6/6 白	2.5Y 6/2 黄 1K	B 1 ~ C 1K	課題~瓦器	
39	131	渦生土器	要(?)	体部	沈縫 4 条 内面ナデ	-	(35)	10YR 7/1 灰白	10YR 7/4 にぶい黄褐	10YR 8/2 灰白	B 2 ~ C 2K	課題~瓦器	
39	132	突帯文土器	深鉢/要	口縁部	削目突帯文 内外面ナデ	-	(255)	10YR 3/1 黑褐	10YR 8/4 液状	10YR 6/6 液状	A ~ B 区	課題~瓦器	
39	133	渦生土器	要	体部	沈縫 3 条 ハケ調整 内面ナデ	-	(255)	10YR 7/6 明黄褐	10YR 5/3 にぶい黄褐	7.5YR 7/6 白	B 2 ~ C 2K	課題~瓦器	

回 番号	地盤 番号	種類	器種	部位	特徴	法量(cm)	色調			出土地点		
							口径	器高	外面	内面	断面	調査区
39	134	陶生土器	壺	体部	微隆起突帯1条 橫指文 内面ナデ 瓶入品?	-	(24)	10YR5/1 黒灰	7.5YR8/4 明黄橙	10YR5/1 黒灰	B-C区	縦層～汎層
39	135	陶生土器	壺	体部	微隆起突帯1条 内外面ナデ	-	(30)	10YR5/1 黒灰	10YR6/6 明黄橙	10YR4/1 黒灰	B区	縦層～汎層
39	136	陶生土器	壺	体部	微隆起突帯2条 内面ナデ 瓶入品?	-	(43)	10YR4/1 黒灰	7.5YR7/6 灰白	7.5YR8/2 B区		縦層～汎層
39	137	陶生土器	壺	体部	微隆起突帯3条 内外面ナデ	-	(54)	10YR8/4 にぶい黄橙	10YR7/4 灰白	10YR7/1 B区		縦層～汎層
39	138	陶生土器	壺	体部	粘土貼付口縁 外端に削目	-	(24)	7.5YR7/1 明黄灰	10YR4/1 黒灰	10YR5/1 B区		縦層～汎層
39	139	陶生土器	壺	口縁部	粘土貼付口縁 外端に削目 微隆起突帯1条 内面ナデ	-	(38)	7.5YR6/1 黒灰	7.5YR7/1 明黄灰	10YR3/1 黒灰	B区	縦層～汎層
39	140	陶生土器	壺	口縁～頸部	微隆起突帯2条	-	(42)	10YR3/1 黒灰	10YR4/1 黒灰	10YR3/1 黒灰	B区	縦層～汎層
39	141	陶生土器	壺	口縁部	粘土貼付口縁 橫指文	-	(375)	7.5YR6/4 にぶい程	7.5YR6/4 にぶい程	10YR5/1 黒灰	B-C区	縦層～汎層
39	142	陶生土器	一	底部	平底	-	(30)	10YR5/3 にぶい黄橙	7.5YR7/6 明黄橙	10YR7/6 明黄橙	B-C区	縦層～汎層
39	143	陶生土器	一	底部	平底	-	(27)	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR5/4 にぶい黄橙	10YR6/6 明黄橙	B-C区	縦層～汎層
39	144	陶生土器	一	底部	平底	-	(265)	5Y6-6 稨	7.5YR6/6 にぶい程	7.5YR5/3 にぶい程	B-C区	縦層～汎層
39	145	織文土器	深鉢	底部	高台状	-	(235)	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/6 明黄橙	5YR6-8 稨	A-B区	縦層～汎層
39	146	陶生土器	壺?	底部	平底	-	(185)	10YR3/1 黒灰	7.5YR6/6 程	10YR5/3 にぶい黄 程	A-B区	縦層～汎層
46	169	突帯文土器	深鉢	口縁部	無削口突帯 内外面ナデ	-	(18)	10YR6/6 明黄橙	10YR6/8 明黄橙	10YR4/4 程	A-B区	汎層
46	170	陶生土器	壺	口縁部	口縁外端に削目 微隆起突帯1条 内外面ナデ	-	(21)	7.5YR6/6 程	10YR4/2 黒灰	7.5YR6/6 程	B-C区	汎層
46	171	突帯文土器	深鉢	口縁部	削い無削口突帯	-	(25)	10YR4/3 にぶい黄橙	10YR3/2 黒灰	10YR4/4 程	B-C区	汎層
46	172	突帯文土器	深鉢	口縁部	無削口突帯 内外面ナデ	-	(23)	10YR4/4 程	10YR3/2 黒灰	10YR4/4 程	B-C区	汎層
46	173	陶生土器	壺	口縁部	粘土貼付口縁 内面に沈線1条 内外面ナデ	-	(26)	2.5Y7/4 黄 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄 程	10YR5/6 黄 程	B-C区	汎層
46	174	織文土器	浅鉢	口縁部	内外面ナギ	-	(20)	10YR6/6 明黄橙	10YR6/4 明黄橙	10YR4/1 黒灰	A-B区	汎層
46	175	陶生土器	壺	口縁部	罐部に削目 内外面ナデ	-	(23)	7.5YR6/6 程	7.5YR6/6 程	10YR4/4 程	A-B区	汎層
46	176	突帯文土器	深鉢	口縁部	削い削目突帯文1条 陶生化?	-	(22)	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR3/2 黒灰	10YR3/2 黒灰	B区	汎層
46	177	突帯文土器	深鉢	口縁部	削目突帯文 内外面ナデ 陶生化?	-	(23)	10YR6/6 明黄橙	10YR6/6 明黄橙	10YR6/6 明黄橙	B-C区	汎層
46	178	織文?	深鉢	口縁部	罐部に削目 内面に沈線1条 内外面ナデ	-	(32)	10YR3/1 黒灰	10YR3/1 黒灰	10YR3/1 黒灰	B区	汎層
46	179	陶生土器	壺	口縁部	粘土貼付 内外面ナデ	-	(415)	7.5YR5/2 程	7.5YR4/1 黒灰	7.5YR4/1 黒灰	B-C区	汎層
46	180	突帯文土器	深鉢	口縁部	無削口突帯文 内外面条痕後ナデ	23.8	(310)	10YR4/3 にぶい黄 程	10YR2/3 にぶい黄 程	10YR4/3 にぶい黄 程	B-C区	汎層
46	181	突帯文土器	深鉢	口縁部	無削口突帯文 罐部内面に沈線1条 内外面ナデ	-	(30)	2.5Y7/3 黄 にぶい黄	10YR7/4 黄 にぶい黄 程	10YR4/4 程	B-C区	汎層

番号	国名 番号	種類	形態	部位	特徴	法量 (cm)	色調			出土地点		
							口掛 形高	外面	内面	断面	溝谷区	通積
46	182	突管土器	深鉢／浅	口縁部	網目突管文 内外面条直接ナデ	(30)	10YR4/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色	10YR4/2 灰黃褐色	A～B区	Ⅷ層	
46	183	突管土器	深鉢／浅	口縁部	網目突管文 (波形) 内外面条直接ナデ	(42)	10YR4/2 灰黃褐色	10YR3/1 黒褐色	10YR5/2 灰黃褐色	A～B区	Ⅷ層	
46	184	突管土器	深鉢／浅	口縁部	網目突管文 内外面ナデ	(38)	10YR7/2 に赤い黄褐色	10YR4/1 褐色	10YR4/1 褐色	A～B区	Ⅷ層	
46	185	突管土器	深鉢／浅	口縁部	網目突管文 内外面ナデ	(55)	SYR5/6 明 赤褐色	10YR5/4 明 に赤い黄褐色	2.5YR5/4 黄褐色	B～C区	Ⅷ層	
46	186	弥生土器	要	口縁部	底部に鶴巣起突帶 1条 内外面ナデ	(24)	10YR4/1 褐色	10YR6/1 褐色	10YR4/1 褐色	B～C区	Ⅷ層	
46	187	弥生土器	要・亞	口縁部	粘土帶黏付口縁 白縁下に施描文 内外面ナデ	(95)	10YR6/3 に赤い黄褐色	7.5YR6/6 程	10YR5/1 褐色	B～C区	Ⅷ層	
46	188	弥生土器	要	口縁～体部	粘土帶黏付口縁 体部上方に鶴巣 文 内形容文5	(178)	10YR6/8 明黄色	10YR7/6 明黄色	10YR5/6 黄褐色	C 2区	Ⅷ層	
46	189	弥生土器	要	口縁～体部	底部に刺目 離部下と体部上方に 鶴巣起突帶 円形容文 内外面ナデ	(56)	7.5YR8/3 浅黃褐色	N4/灰	N4/灰	1区	Ⅷ層	
46	190	弥生土器	要	口縁～体部	粘土帶黏付口縁 体部上方に鶴巣 文 内外面ナデ	(415)	10YR7/6 明黄色	10YR3/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色	B～C区	Ⅷ層	
47	191	弥生土器	—	体部	鶴巣起突帶 1条 内外面ナデ	(16)	7.5YR7/6 に赤い程	7.5YR5/4 褐色	10YR4/1 褐色	B～C区	Ⅷ層	
47	192	弥生土器	要?	体部	鶴巣起突帶 2条 内外面ナデ	(225)	7.5YR4/6 褐色	7.5YR6/6 褐色	10YR5/1 褐色	B～C区	Ⅷ層	
47	193	弥生土器	—	体部	内外面ナデ	(18)	10YR8/1 灰白	10R6/4 に赤い褐色	10YR8/1 灰白	B～C区	Ⅷ層	
47	194	弥生土器	—	体部	鶴巣起突帶 1条 沈縫 3条 内外 面ナデ	(21)	7.5YR4/1 褐色	10YR6/3 に赤い黄褐色	7.5YR4/1 褐色	A～B区	Ⅷ層	
47	195	弥生土器	—	体部	内外面ナデ	(26)	SYR7/6 種	2.5YR7/6 に赤い赤褐色	2.5YR8/1 灰 白	A～B区	Ⅷ層	
47	196	弥生土器	要(?)	体部	鶴巣起突帶 3条 不定形容文5	(315)	7.5YR6/6 程	10YR7/4 に赤い黄褐色	2.5YR6/3 に赤い黄褐色	C区	Ⅷ層	
47	197	弥生土器	要(?)	体部	鶴巣起突帶 1条 内外面ナデ	(295)	10YR5/3 に赤い黄褐色	10YR8/4 浅黃褐色	10YR4/1 褐色	B～C区	Ⅷ層	
47	198	弥生土器	要(?)	体部	鶴巣起突帶 2条 内外面ナデ	(42)	10YR6/6 明黄色	10YR6/6 明黄色	10YR6/6 明黄色	B～C区	Ⅷ層	
47	199	織文土器	浅鉢	体部	内外面ナデ	(51)	10YR5/1 褐色	10YR8/3 浅黃褐色	10YR8/3 浅黃褐色	B～C区	Ⅷ層	
47	200	弥生土器	要	体部	沈縫 6条 内外面ナデ	(57)	10YR6/6 明黄色	2.5YR4/4 半 9-1/6	10YR6/6 明黄色	B区	Ⅷ層	
47	201	弥生土器	亞	体部	網目突管 1 内外面ナデ	(43)	10YR5/1 褐色	10YR6/6 明黄色	10YR5/1 褐色	B区	Ⅷ層	
47	202	弥生土器	要	体部	鶴巣起突帶 2条 内外面ナデ	(46)	7.5YR6/6 程	10YR6/6 明黄色	10YR6/6 明黄色	B～C区	Ⅷ層	
47	203	弥生土器	亞	体部	網目突管文 1 沈縫 3条 内外面 ナデ	(45)	SYR6/6 種	SYR6/8 種	SYR6/6 種	B～C区	Ⅷ層	
47	204	弥生土器	要	体部	沈縫 1条 ハケ調整 内外面ナデ	(22)	10YR6/4 明黄色	10YR5/4 に赤い黄褐色	10YR7/8 黄褐色	B～C区	Ⅷ層	
47	205	弥生土器	要	体部	沈縫 8条 内外面ナデ?	(25)	SYR4/8 種	SYR4/8 種	SYR4/8 種	B～C区	Ⅷ層	
47	206	弥生土器	要?	体部	沈縫 3条 内外面ナデ?	(39)	10YR6/4 に赤い黄褐色	10YR5/3 に赤い黄褐色	10YR4/2 灰黃褐色	B～C区	Ⅷ層	
47	207	突管土器	深鉢／浅	体部	突管文 内外面条直	(46)	2.5YR6/4 赤 黄	10YR5/6 灰 黄褐色	2.5YR6/4 赤 黄	B区	Ⅷ層	

固 固 番号	固 固 番号	種 類	器 種	部 位	特 徴	法 量(cm)	色 調			出 土 地 点			
							口径	器高	外面	内面	断面	調査区	遺構
47	208	縄文土器?	深鉢?	底部	高台状	-	(27)	SYRS/4 に ふい黄褐色	SYRS/4 に ふい黄褐色	SYRS/4 に ふい黄褐色	A-B区	瓦層	
47	209	縄文土器?	深鉢?	底部	高台状	-	(24)	2SY3/1 黒 褐	7.5YR5/6 明黄褐色	2SY4/4暗 オーブー 褐色	B-C区	瓦層	
47	210	弥生土器	甕	底部	平底 外面ハケ / 内面ナデ	-	(53)	10YR3/2 黒 褐	10YR4/2 灰黄褐色	10YR3/2 黑褐色	B-C区	瓦層	
47	211	弥生土器	甕	底部	平底 外面ハケ / 内面ナデ	-	(54)	10YR5/3 に ふい黄褐色	10YR5/3 に ふい黄褐色	10YR5/3 に ふい黄褐色	B-C区	瓦層	
47	212	弥生土器	甕	底部	平底 内外面ナデ	-	(28)	10YR7/6 明 黄褐色	10YR7/6 明 黄褐色	10YR3/1 黑褐色	B-C区	瓦層	
51	228	美濃文土器	深鉢?	口縁端部	研い突帯文 内外面ナデ 弥生化?	-	(20)	2.5YR6/4 に ふい橙	2.5YR5/4 に ふい黄	2SY6/2 に ふい黄	B-C区	瓦層-X層	
51	229	美濃文土器	深鉢?	口縁端部	長い突帯文 内外面ナデ 円形浮 文?	-	(215)	10YR7/6 明 黄褐色	10YR8/6 黄褐色	10YR3/2 黑褐色	B-C区	瓦層-X層	
51	230	弥生土器	甕	口縁端部	外縁に刻目 横條突帯1条 内 外面ナデ	-	(22)	10YR7/3 に ふい黄褐色	10YR4/1 灰黄褐色	10YR4/1 灰黄褐色	A-C区	瓦層-X層	
51	231	縄文土器	深鉢	口縁端部	短突起部 内面柔軟?	-	(21)	10YR4/1 灰黄褐色	10YR7/6 明黄褐色	10YR4/1 灰黄褐色	B-C区	瓦層-X層	
51	232	美濃文土器	深鉢?	口縁端部	無削口突帯 内外面ナデ	-	(33)	10YR5/6 黄褐色	7.5YR5/6 明黄褐色	10YR5/6 黄褐色	A-C区	瓦層-X層	
51	233	縄文土器	浅鉢	口縁端部	内外面1ガキ 補修孔有り	-	(55)	2.5Y6/3 に ふい黄	10YR4/1 灰黄褐色	10YR4/1 灰黄褐色	B-C区	瓦層-X層	
51	234	弥生土器	甕?	体部	沈縫2条 外面ハケ調整 内面ナ デ?	-	(35)	10YR5/4 に ふい黄褐色	10YR4/3 に ふい黄褐色	10YR4/3 明黄褐色	B-C区	瓦層-X層	
51	235	縄文土器	深鉢	底部	高台状 内面柔軟 ナデ?	-	(27)	SYR4/6 赤 褐	SYR4/6 赤 褐	SYR4/6 赤 褐	A-B区	瓦層	X層-X層
51	236	弥生土器	甕	底部	平底 小型 内外面ナデ	-	(135)	10YR4/2 に ふい黄褐色	2.5YR6/6 に ふい黄褐色	10YR4/3 に ふい黄褐色	B-C区	瓦層-X層	
51	237	弥生土器	甕?	底部	高台状 内外顔ナデ	-	(22)	10YR6/2 灰黄褐色	2.5YR7/3 灰黄褐色	2.5YR4/1 灰黄褐色	A-C区	瓦層-X層	
56	238	美濃文土器	深鉢?	口縁端部	画面三角形無削口突帯 内外面ナ デ?	-	(17)	2.5Y3/1 黒 褐	7.5YR6/8 暗オーブー 褐色	2SY3/3暗 オーブー 褐色	B区	X層上部	
56	239	美濃文土器	深鉢?	口縁端部	長い無削口突帯 内面に沈縫 内 外面ナデ 弥生化?	-	(15)	7.5YR4/6 黑褐色	7.5YR4/6 黑褐色	7.5YR3/2 黑褐色	B区	X層上部	
56	240	縄文土器	浅鉢?	口縁端部	内面に沈縫 内外面ナデ	-	(12)	7.5YR5/4 に ふい黄褐色	7.5YR6/4 に ふい黄褐色	7.5YR6/4 に ふい黄褐色	B-C区	X層	
56	241	美濃文土器	深鉢?	口縁端部	突帯に指伝による刻目 内外面ナ デ?	-	(25)	10YR7/2 に ふい黄褐色	10YR4/2 灰黄褐色	10YR5/1 灰黄褐色	C区	X層上部	
56	242	美濃文土器	深鉢?	口縁端部	横削口突帯 内面に沈縫 内外面 ナデ?	-	(33)	SYR6/6 暗 褐色	10YR8/4 明黄褐色	10YR6/6 明黄褐色	B-C区	X層上部	
56	243	弥生土器	甕?	口縁端部	内外面に沈縫各1条 内外面ナデ	-	(18)	10YR3/2 黑褐色	10YR6/2 灰黄褐色	10YR6/2 灰黄褐色	B区	燒土	X層上部
56	244	美濃文土器	深鉢?	口縁端部	画面三角形無削口突帯 内面ナデ	-	(27)	10YR8/3 灰黄褐色	10YR5/3 灰黄褐色	10YR3/1 黑褐色	C区	X層上部	
56	245	美濃文土器	深鉢?	口縁端部	長い無削口突帯 内面に沈縫2条 内面ナデ 弥生化?	-	(29)	10YR5/3 に ふい黄褐色	10YR2/1 黒	10YR7/6 明黄褐色	B-C区	X層上部	
56	246	縄文土器	深鉢?	体部	刻目突帯	-	(24)	7.5YR3/2 黑褐色	7.5YR3/2 黑褐色	SYR5/6明 黄褐色	C区	X層上部	
56	247	美濃文土器	深鉢?	口縁端部	無削口突帯 内外面ナデ	-	(35)	10YR6/8 明黄褐色	10YR4/4 明黄褐色	10YR6/8 明黄褐色	B区	X層上部	
56	248	美濃文土器	深鉢?	口縁端部	無削口突帯 内外面ナデ	-	(20)	10YR3/1 黑褐色	7.5YR3/2 黑褐色	10YR4/3 明黄褐色	A-B区	X層	

件 番号	国版 番号	種類	形種	部位	特徴	法量(cm)		色調			出土場所		
						口径	厚高	外面	内面	断面	調査区	通鑑	層位
56	249	突帯文土器	深鉢／甕	口縁部	無い無刻口突帶 内外面摩耗	-	(27)	10YR2/1 黒	10YR5/4 にぶい黄褐色	25Y5/6 黄 にぶい黄褐色	B-C区	X層	
56	250	縦文土器	浅鉢	口縁部	外面に沈縫1条 内外面ミガキ？	-	(27)	25Y3/1 黒 褐色	25Y7/3 淡 灰	25Y4/1 黄 褐色	B-C区	X層	
56	251	弦生土器	甕	全体	微隆突帯1条 工具による削目 内外面ナデ	-	(205)	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR4/2 にぶい黄褐色	C区	X層上部	
56	252	突帯文土器	深鉢／甕	口縁部	無刻口突帶 内面に沈縫1条 内 外面ナデ	-	(56)	10YR4/2 灰黄褐色	7.5YR5/6 明褐色	10YR4/4 褐色	B区	X層上部	
56	253	縦文土器	浅鉢	口縁部	外面ミガキ？	-	(60)	2.5YR6/6 明黄褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR3/2 黒褐色	B-C区	X層上部	
56	254	突帯文土器	深鉢／甕	口縁部	細目突帶文 内外面条痕	-	(74)	10YR4/4 褐色	7.5YR3/2 黒褐色	10YR4/4 褐色	C区	X層上部	
56	255	突帯文土器	深鉢／甕	口縁部	無い無刻口突帶 内外面ナデ	-	(48)	10YR4/2 灰黄褐色	10YR3/2 黒褐色	10YR4/2 灰黄褐色	B-C区	X層上部	
56	256	突帯文土器	深鉢／甕	口縁部	無刻口突帶文 外外面ナデ / 内外面 直接ナデ	-	(50)	10YR6/8 明黄褐色	7.5YR4/6 褐色	10YR6/8 明黄褐色	B-C区	X層	
56	257	縦文土器	-	底部	高台状	-	(445)	10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR4/2 灰黄褐色	C区	X層上部	
56	258	縦文土器	-	底部	高台状	-	(455)	10YR5/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/6 褐色	10YR5/2 にぶい黄褐色	B区	X層上部	
56	259	縦文土器	-	底部	高台状	-	(559)	7.5YR7/6 褐色	7.5YR7/6 褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	A区	X~E層	
56	260	縦文土器	深鉢	底部	高台状 内外面条痕	-	(265)	7.5YR7/2 明褐色	7.5YR7/2 明褐色	10YR5/2 灰黄褐色	C区	X層上部	
56	261	縦文土器	深鉢	底部	高台状	-	(26)	10YR5/4 褐色	7.5YR4/4 褐色	10YR5/4 褐色	C区	X層上部	
56	262	縦文土器	深鉢	底部	高台状 内外面ナデ	-	(405)	5YR6/3 にぶい黄褐色	7.5YR6/6 にぶい黄褐色	10YR5/2 にぶい黄褐色	B-C区	X層上部	
56	263	縦文土器	深鉢	底部	平底 内外面ナデ	-	(24)	10YR6/4 にぶい黄褐色	7.5YR5/6 明褐色	2.5Y7/4 淡 黄	B-C区	X層上部	
56	264	縦文土器	深鉢	底部	高台状 内外面摩耗	-	(315)	2.5Y8/1 灰白	7.5YR8/1 灰白	2.5Y5/1 黄 褐色	B区	X層上部	
56	265	縦文土器	深鉢	全体	外面条痕 内外面条痕ナデ	-	(201)	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR3/3 にぶい黄褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	A-B区	X層	
57	266	弦生土器？	甕	口縁部	内外面ナデ	-	(23)	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	A-B区	燒土 X層	
57	267	縦文土器？	深鉢	口縁部	内外面ナデ	-	(45)	10YR5/2 にぶい黄褐色	10YR5/2 にぶい黄褐色	10YR5/2 にぶい黄褐色	B-C区	X層	
57	268	突帯文土器	深鉢	口縁部	無刻口突帶 内面沈縫1条 内外 面ナデ	-	(40)	7.5YR5/6 明褐色	7.5YR5/8 明褐色	10YR4/4 褐色	B-C区	X層	
57	269	縦文土器	浅鉢	口縁部	罐部内外面に沈縫各1条 内外面 ミガキ	-	(48)	10YR3/2 黒褐色	10YR3/2 黒褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	B区	SK4 X層	
57	270	縦文土器	深鉢	口縁部	口縁部及び脇部に縦文 外面に 区画文	-	(35)	10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	C区	X層下部	
57	271	縦文土器	深鉢	口縁部	内外面条痕文	-	(43)	10YR2/1 黒	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR4/1 褐色	C区	X層下部	
57	272	突帯文土器	深鉢／甕	口縁部	細目突帶文 内外面条痕	(294)	(28)	10YR8/2 灰白	2.5Y7/2 淡 黄	10YR7/8 黄褐色	C区	X層下部	
57	273	縦文土器	深鉢	口縁部	浮縫網状文 式の模倣か？ 内 外面条痕ナデ	-	(47)	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR4/2 灰褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	C区	X層下部	
57	274	突帯文土器	深鉢／甕	口縁部	前面三角形の突帯2条 外外面 内外面ナデ 244と類似	-	(60)	10YR8/3 浅黄褐色	10YR4/2 灰褐色	10YR4/1 褐色	C区	X層下部	

固 番号	固 番号	種 類	器 種	部 位	特 徴	法 量(cm)	色 調			出 土 地 点		
							口径	器高	外面	内面	断面	調査区
57	275	突帯文土器	深鉢／甕	口縁部	無刷目突帯 文外縁ナデ 端部欠損	- (49)	10YR4/4 灰褐色	5YR4/4 に ぶい黄褐色	10YR4/4 灰褐色	B区	X層上部	
57	276	縄文土器	浅鉢	体部	ミガキ？	- (19)	10YR7/3 に ぶい黄褐色	10YR7/3 に ぶい黄褐色	10YR4/1 灰褐色	B区	X層下部	
57	277	縄文土器	深鉢	体部	区画文 内面条痕ナデ	- (36)	10YR4/2 灰褐色	7.5YR5/4 に ぶい黄褐色	7.5YR5/4 に ぶい黄褐色	C区	X層下部	
57	278	縄文土器	深鉢	体部	区画文 内面条痕	- (35)	7.5YR4/3 灰褐色	10YR4/3 灰褐色	10YR3/4 灰褐色	C区	X層下部	
57	279	縄文土器	深鉢	体部	区画文 内面ナデ？	- (14)	5YR3/3 端 水褐色	5YR3/3 に ぶい水褐色	5YR3/3 端 水褐色	C区	X層下部	
57	280	縄文土器	深鉢	体部	区画文 壁面開文 内面柔軟	- (70)	10YR5/3 に ぶい黄褐色	7.5YR5/4 に ぶい黄褐色	10YR4/3 に ぶい黄褐色	C区	X層下部	
57	281	突帯文土器	深鉢／甕	口縁～体部	刷目突帯文 内外面柔軟	- (80)	10YR3/1 黒褐色	10YR6/4 に ぶい黄褐色	10YR4/2 灰褐色	C区	X層下部	
57	282	縄文土器	深鉢	口縁部	液状口縁 液痕部円柱斜突 口縁部内側に沈殿 区画文 壁面開文 内面柔軟 外面条痕ナデ？	- (50)	10YR4/3 に ぶい黄褐色	5YR4/3 に ぶい水褐色	10YR4/3 に ぶい黄褐色	C区	X層下部	
57	283	縄文土器	深鉢	底部	低い高台状底部	- (23)	7.5YR7/6 明黄褐色	10YR6/6 に ぶい黄褐色	10YR5/3 に ぶい黄褐色	B区	X層下部	
57	284	縄文土器	深鉢	底部	低い高台状底部	- (20)	2.5YR1/1 灰 白	10YR7/6 明黄褐色	2.5YR7/3 浅 黄	C区	X層下部	
57	285	縄文土器	深鉢	底部	低い高台状底部	- (27)	7.5YR5/6 明褐色	10YR4/6 明褐色	7.5YR5/6 明褐色	B-C区	X層下部	
57	286	縄文土器	浅鉢	底部	低い高台状底部 体部大きく開く	- (105)	7.5YR5/6 明褐色	7.5YR3/1 黒褐色	10YR4/3 に ぶい黄褐色	C区	X層下部	
58	287	突帯文土器	深鉢／甕	口縁部	刷目突帯文 外面ナデ 内面柔軟	- (48)	10YR7/4 に ぶい黄褐色	10YR4/3 に ぶい黄褐色	10YR6/1 灰褐色	B区	X層	
58	288	突帯文土器	深鉢／甕	口縁部	刷目突帯文 外面ナデ 内面柔軟	- (42)	7.5YR4/2 灰褐色	10YR3/2 黒褐色	7.5YR4/2 灰褐色	B-C区	SX-3	X層
58	289	縄文土器	浅鉢	口縁部	端部外面に比較各1条 内外面ナデ	- (70)	10YR4/1 端 水褐色	10YR5/3 に ぶい黄褐色	10YR4/1 端 水褐色	B-C区	SX-3	X層
58	290	縄文土器	浅鉢	口縁端部	内外面ミガキ	- (16)	7.5YR4/2 灰褐色	7.5YR5/3 に ぶい黄褐色	10YR5/4 に ぶい黄褐色	B-C区	SX-3	X層
58	291	縄文土器	深鉢	体部	内外面柔軟	- (43)	10YR4/2 灰褐色	10YR5/2 灰褐色	5YR4/1 灰	B-C区	SX-3	X層
58	292	縄文土器	浅鉢	体部	外縁接合 外面柔軟 内面柔軟	- (22)	7.5YR5/4 に ぶい褐色	7.5YR3/3 に ぶい褐色	7.5YR3/3 に ぶい褐色	C区	X層	
58	294	突帯文土器	深鉢／甕	口縁端部	低い突帯文 内外面ナデ？	- (17)	10YR3/3 端 水褐色	7.5YR4/4 端 水褐色	5YR5/4 に ぶい水褐色	B区	SK-5 X層 上層因2層	
58	295	漬生土器	甕	体部	沈縫2条 内面柔軟？	- (19)	10YR7/4 に ぶい黄褐色	10YR5/3 に ぶい黄褐色	10YR5/3 に ぶい黄褐色	B-C区	SX-3	X層
58	296	縄文土器	深鉢	底部	低い高台状底部	- (21)	10YR7/3 に ぶい黄褐色	10YR6/8 明 黄褐色	10YR2/1 黑	B-C区	SX-3	X層
61	301	漬生土器	甕？	体部	斜縫6条	- (26)	5YR5/6 赤褐色	5YR4/6 明 黄褐色	5YR5/6 明 黄褐色	II会調査		
61	302	縄文土器	深鉢	口縁部	孔列文土器 内外面ナデ？	- (31)	7.5YR4/2 灰褐色	7.5YR5/4 に ぶい褐色	7.5YR4/2 灰褐色	II会調査		Te-16 3層と対応

出土石器観察表

団番号	国版番号	部種	法量 (mm/g)				石材	特徴	出土地点		
			最大長	最大幅	厚さ	重量			調査区	層位	遺構
13	18	スクレイバー	695	856	14	873	頁岩	欠損品	Tr-16		
13	19	スクレイバー	568	123	12	708	粘板岩		Tr-16		
13	20	スクレイバー	68	119	14	1005	頁岩		Tr-16		SD-I
13	21	石核	105	121	36	500	頁岩		Tr-16		
13	22	叩き石	122	102	52	900	頁岩		Tr-16		
15	35	二次加工のある調片	21	22	6	35	チャート		Tr-18		
15	36	二次加工のある調片	86	52	21	933	頁岩		Tr-18		
15	37	叩き石	135	96	49	910	砂岩		Tr-18		
15	38	叩き石	132	113	49	1400	砂岩		Tr-18		
18	46	二次加工のある調片	101	940	13	117	頁岩		Tr-25	6層	
18	47	打製石斧	165	101	23	260	頁岩		Tr-25	6層	
18	48	叩き石	137	91	38	750	砂岩		Tr-25	6層	
19	49	磨製石斧	6460	416	11	439	頁岩	基部を欠損する。石材	Tr-25	6層	
19	50	二次加工のある調片	97	118	20	210	頁岩		Tr-25	7層	
19	51	二次加工のある調片	160	797	23	280	頁岩	打製石斧?	Tr-25	7層	
20	52	二次加工のある調片	106	103	32	300	砂岩		Tr-25	8層	
20	53	石核	128	122	56	900	砂岩		Tr-25	8層	
33	65	石礫	15	10	2	0.3	チャート	円錐式	A区	V1層	
33	66	石礫	20	17	2	0.9	サヌカイト	平底式	A区	V1層	
33	67	石礫	13	8	1	0.2	サヌカイト	平底式	A～B区	V1層	
33	68	石礫	15	11	1	0.4	サヌカイト	平底式	A～B区	V1層	
33	69	二次加工のある調片	14	15	2	0.6	黒耀石(鷲島産)		A区	V1層	
33	70	二次加工のある調片	16	22	4	12	黒耀石(鷲島産)		A区	V1層	
33	71	調片	21	9	2	0.5	チャート		B～C区	V1層	
33	72	調片	16	24	3	12	黒耀石(鷲島産)		A～B区	V1層	
33	73	二次加工のある調片	26	15	3	24	黒耀石(鷲島産)		A～B区	V1層	
33	74	スクレイバー	38	44	6	129	頁岩		C区	V1層	
33	75	打製石斧	83	51	8	56	砂岩		A区	V1層	
38	103	石礫	12	12	2	0.5	チャート	欠損品	B 1～C 1区	V1層	
38	104	石礫	130	15	2	0.5	サヌカイト	欠損品	B区	V1層上面	
38	105	二次加工のある調片	35	17	3	35	黒耀石(鷲島産)		A～B区	V1層上面	
38	106	チップ	21	18	4	16	チャート		B 1～C 1区	V1層	
38	107	叩き石	124	98	23	820	砂岩		B区	V1層	
38	108	打製石斧	141	105	12	280	頁岩		C2区	V1層	
40	147	石礫	18	11	3	0.4	チャート	円錐式	B区	V1層～V2層	
40	148	石礫	15	15	3	0.5	サヌカイト	円錐式 逆剥片側欠損	B～C区	V1層～V2層	

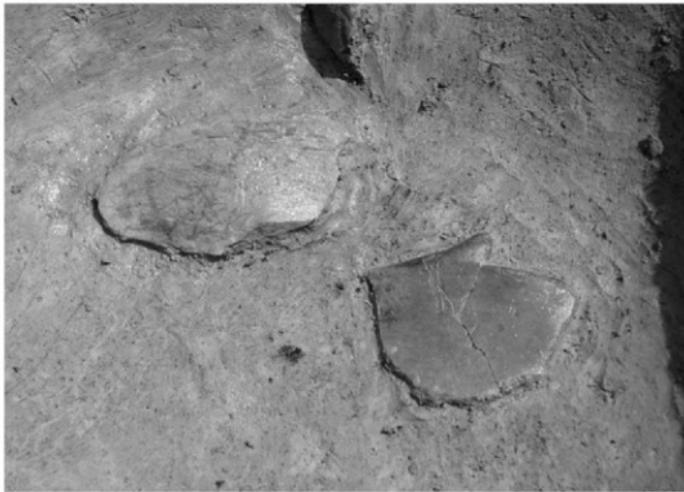
図番号	図版 番号	器種	法量 (mm/g)				G 材	特徵	出土地點		
			最大長	最大幅	厚さ	重量			調査区	層位	遺構
40	149	石鏃	18	13	3	0.6	サヌカイト	四基式 逆刺片側欠損	B 2～C 2区	縄繩～弦縄	
40	150	石鏃	26	20	6	24	サヌカイト	四基式 先端・逆刺欠損	B～C 区	縄繩～弦縄	
40	151	チップ	13	18	4	0.7	チャート		B 区	縄繩～弦縄	
40	152	調片	18	15	4	0.5	黒曜石(鷲島産)		B 1～C 1区	縄繩～弦縄	
40	153	調片	28	28	8	28	黒曜石(鷲島産)		B 区	縄繩～弦縄	
40	154	二次加工のある調片	32	37	6	8.1	頁岩	楔形石器の可能性あり	2 区	縦～弦縄	
41	155	打製石斧	143	92	21	240	頁岩		A 区	縄繩～弦縄	
41	156	打製石斧	143	75	23	220	頁岩		A 区	縄繩～弦縄	
41	157	打製石斧	156	108	33	530	頁岩		2 区	縦～弦縄	
42	158	磨製石斧	93	49	26	1825	蛇紋岩		B 区	縄繩～弦縄	
42	159	打製石斧	120	81	19	240	頁岩	欠損品 脚部～刃部	B 区	縄繩～弦縄	
42	160	打製石斧	121	91	19	250	砂岩	欠損品 脚部～刃部	B 区	縄繩～弦縄	
43	161	打製石斧	179	(51)	19	78	頁岩	欠損品 基部	B 区	縄繩～弦縄	
43	162	打製石斧	119	669	15	99.5	頁岩	欠損品 基部	B 区	縄繩～弦縄	
43	163	打製石斧	110	680	21	136.6	頁岩	欠損品 基部	A～B 区	縄繩～弦縄	
43	164	打製石斧	103	86	19	290	頁岩	欠損品 刃部	2 区	縦～弦縄	
44	165	打製石斧	899	94	16	105	砂岩	未製品 刃部	A 区	縄繩～弦縄	
44	166	打製石斧	71	81	15	103	砂岩	欠損品 刃部	A 区	縄繩～弦縄	
44	167	G 棱	97	77	34	290	頁岩		A～B 区	縄繩～弦縄	
44	168	叩き石	115	113	62	1140	砂岩	欠損品	2 区	縦～弦縄	
48	213	調片	17	8	3	0.3	黒曜石(鷲島産)		C 区	弦縄	
48	214	石鏃	18	17	5	0.8	サヌカイト	平基式	A～B 区	弦縄	
48	215	二次加工のある調片	34	13	6	23	チャート		B～C 区	弦縄	
48	216	楔形石器	16	16	2	4.5	頁岩		A～B 区	弦縄	
48	217	二次加工のある調片	47	36	11	15.4	頁岩		B～C 区	弦縄	
48	218	不明	37	32	36	32.7	不明	穿孔有	B～C 区	弦縄	
48	219	磨製石斧	140	55	31	330	砂岩	欠損品	A～B 区	弦縄	
48	220	磨製石斧	95	56	21	182.7	砂岩		A 区	弦縄	
49	221	打製石斧	133	84	18	158.6	頁岩	杓子形	A 区	弦縄	
49	222	打製石斧	136	99	19	177.8	頁岩	杓子形	B～C 区	弦縄	
49	223	打製石斧	170	104	24	410	頁岩	杓子形	A 区	弦縄	
50	224	打製石斧	689	73	19	135.7	頁岩	欠損品 基部	B～C 区	弦～X 縄	
50	225	打製石斧	694	(75)	22	162.4	砂岩	楔形 欠損品 基部	B～C 区	弦縄	
50	226	打製石斧	119	899	34	300	頁岩	杓子形 基部	B～C 区	弦縄	
50	227	打製石斧	137	80	33	300	砂岩	楔形 欠損品	A～B 区	弦縄	
59	297	打製石斧	141	76	19	220	頁岩	鉤曲形	B 区	X 縄上部	
59	298	叩き石	107	73	34	370	砂岩	欠損品 中央に縫合痕	B 区	X 縄上部	
59	299	叩き石	137	77	35	610	砂岩	中央に縫合痕	C 区	X 縄上部	
60	300	石核	121	91	36	660	頁岩		A 2～B 2区	弦縄	



試掘 Tr-16 溝状遺構完掘状況



溝状遺構の堆積状況



溝状遺構遺物（16・20）出土状況



Tr-25 挖削状況



調査前の状況



調査区南壁土層堆積状況



調査区東壁土層堆積状況（北半）



調査区東壁土層堆積状況（南半）



XI 層全景



VIII 層全景



SX-1 (VIII 層)



磨製石斧（158）出土状況



打製石斧（223）出土状況



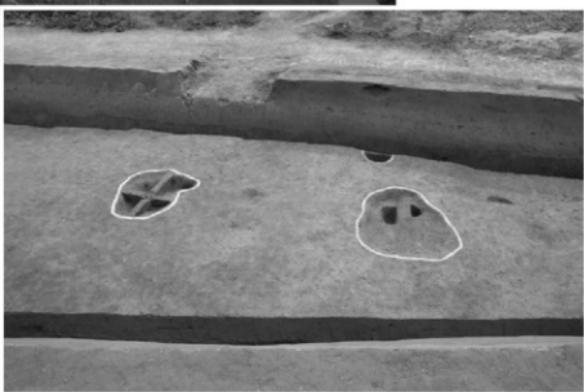
SP-15 半裁状況（IX 層）



弥生土器（189）出土状況（IX層）

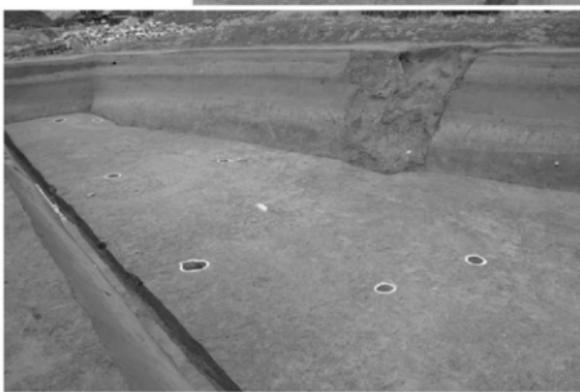


突帯文土器（287）出土状況（X層）





XI 層全景

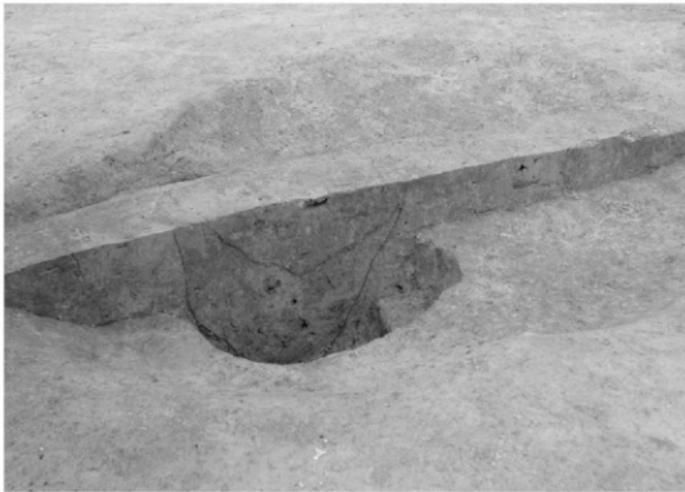




SP-17 半裁状況



SP-18 半裁状況



SK-3 半裁状況



SK-5 半裁状況



5



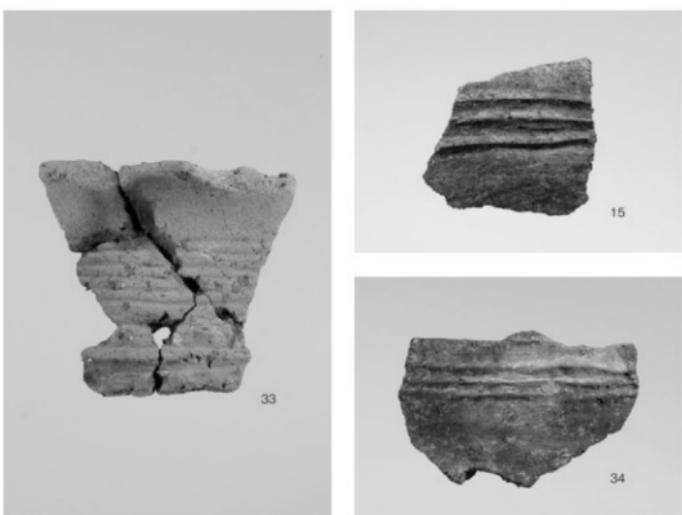
12

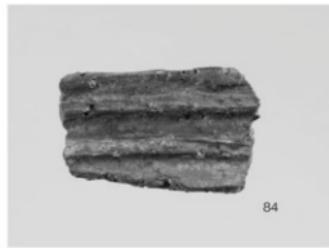
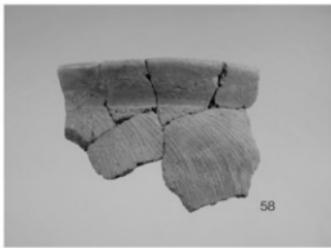
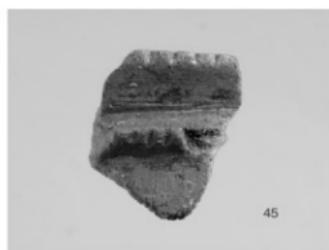
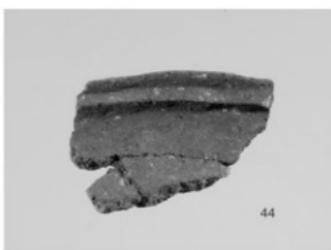


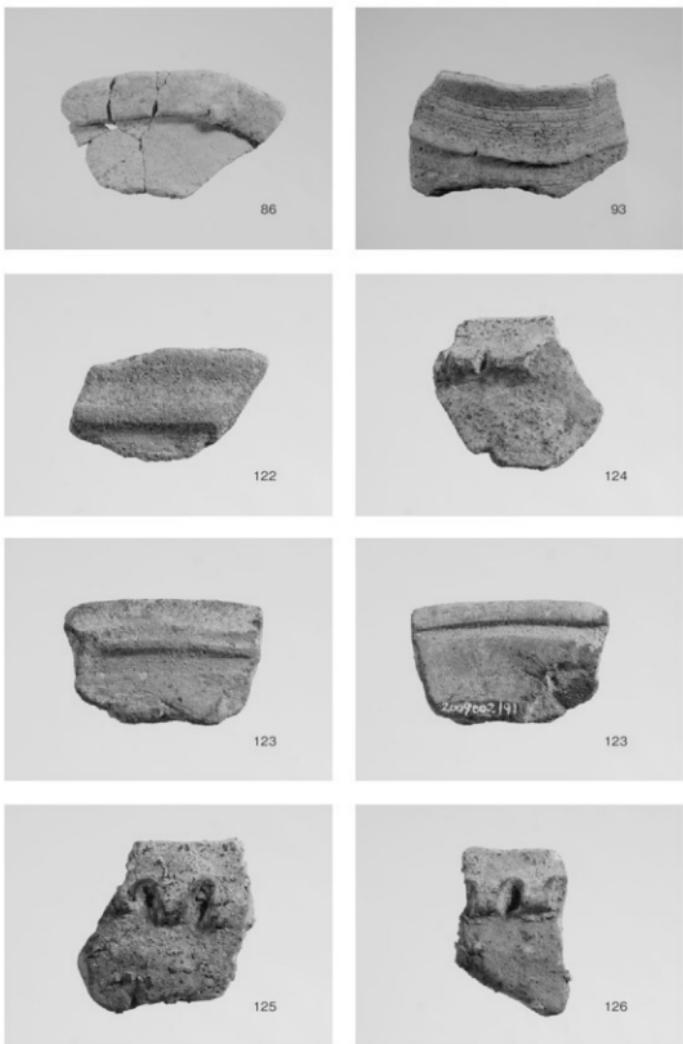
13



13





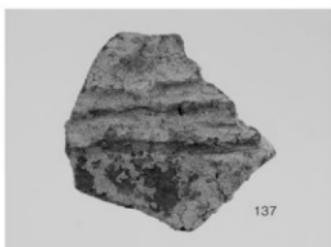




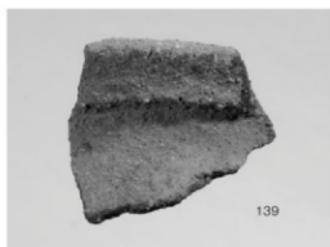
132



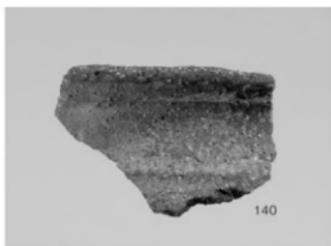
133



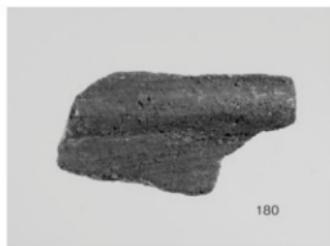
137



139



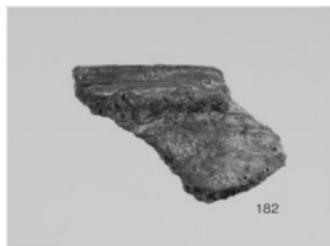
140



180



181



182



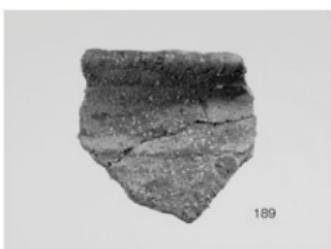
183



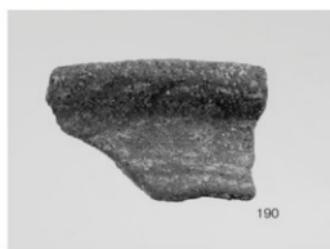
184



185



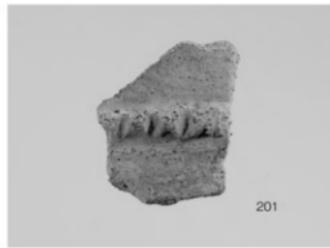
189



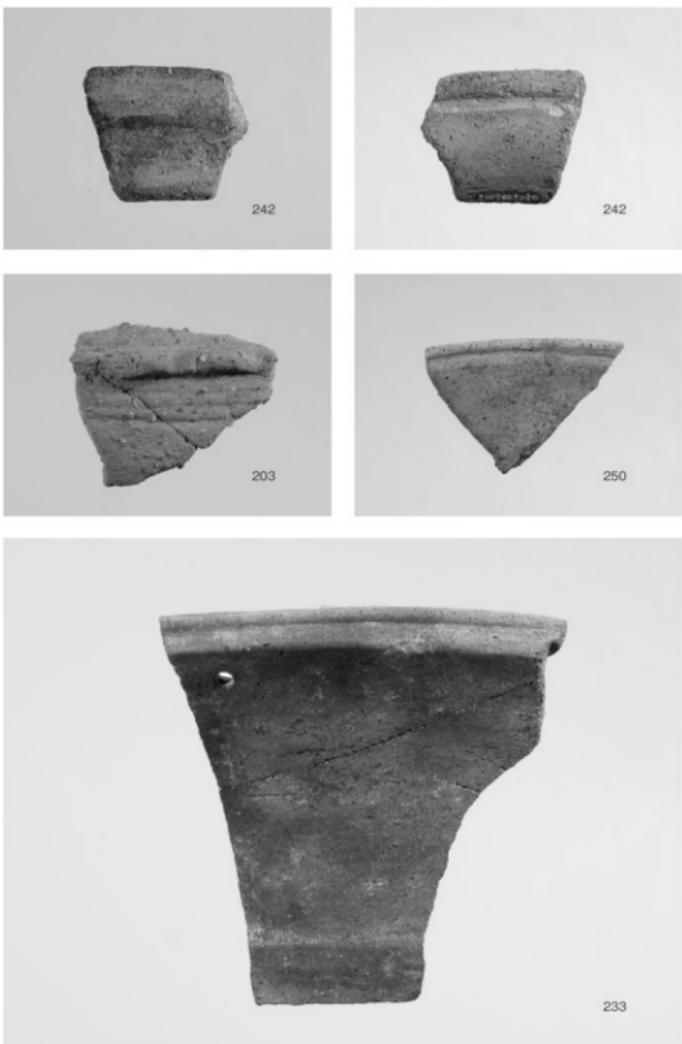
190

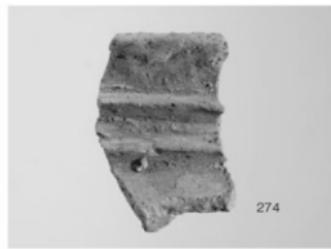
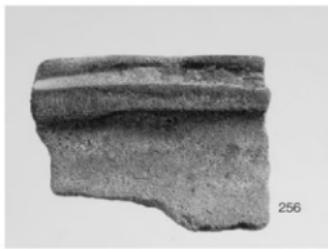


197

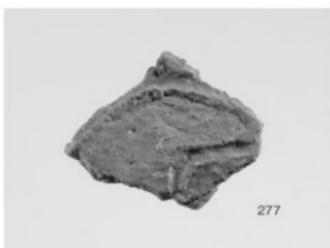


201

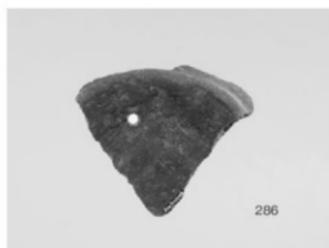




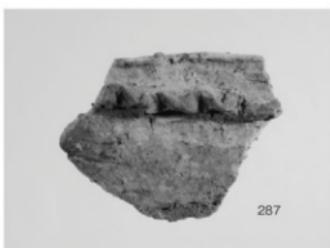




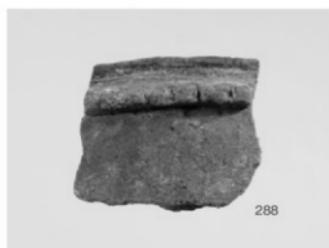
277



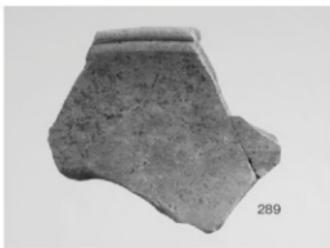
286



287



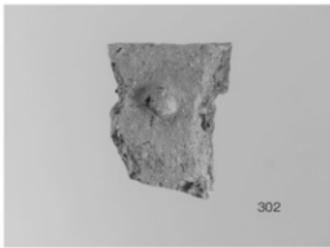
288



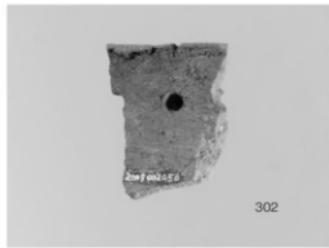
289



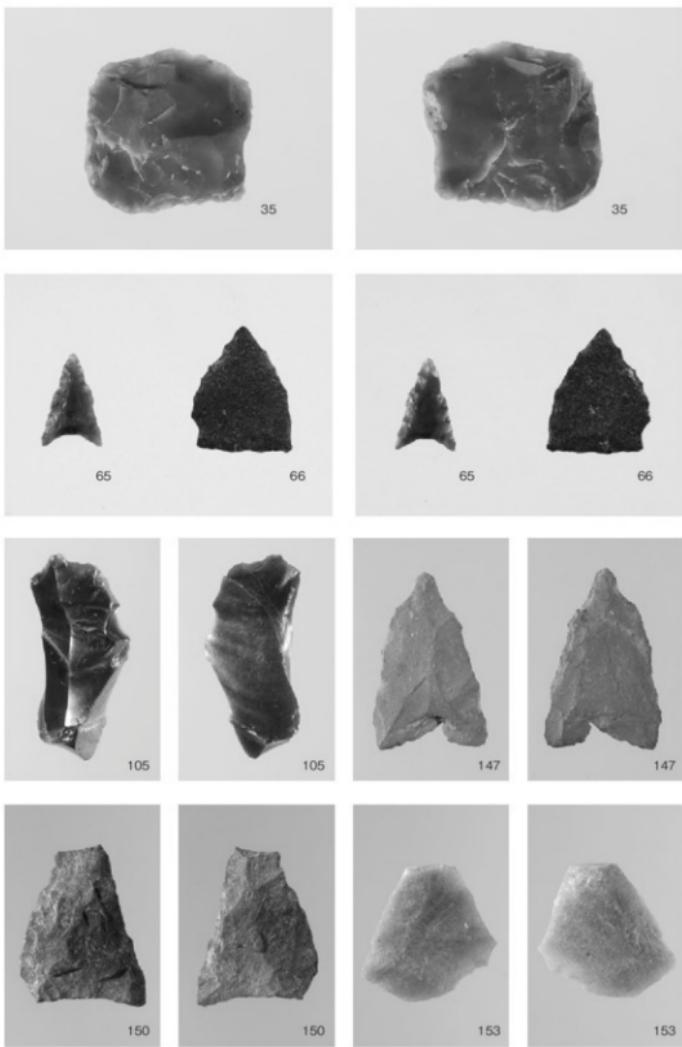
301



302



302





108



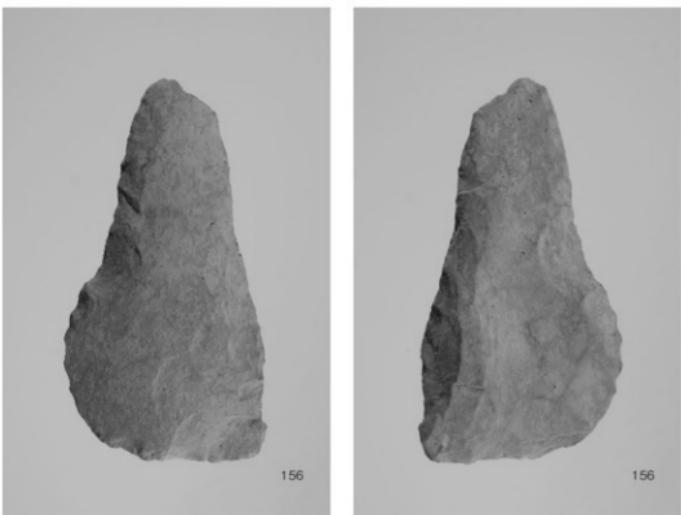
108



155



155

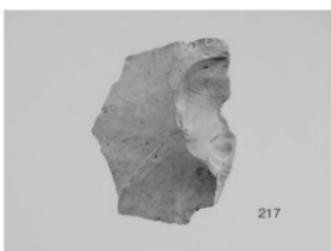




216



216



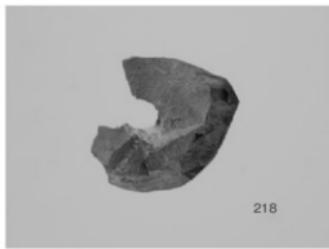
217



217



218



218





221



221



297



297

報 告 書 抄 錄

ふ り が な	しまんとしまいぞうぶんかざいはつくつちょうさほうこく						
書 名	四万十市埋蔵文化財発掘調査報告						
副 書 名	ヲキショウジ遺跡						
巻 次							
シ リ ー ズ 名	四万十市文化財調査報告						
シリーズ番号	第5輯						
編 著 者 名	川村 健也						
編 集 機 間	四万十市教育委員会						
所 在 地	〒787-0012高知県四万十市右山五月町8-22TEL0880(34)7311(生涯学習課)						
発 行 年 月 日	西暦 2011年3月22日						
所 収 遺 跡 名	所 在 地	コ 一 ド	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積	調査原因
ヲキショウジ遺跡	四万十市西土佐南井字ヲキ ショウジ496番1地	39207	520047	33° 9' 51"	132° 47' 40"	090707～091109	207 m ² 中山間地帶組合整備事業
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
ヲキショウジ遺跡	集 落	縄文・弥生	柱 穴 土 筑	突帯文土器・弥生土器・打製石斧			

四万十市文化財調査報告 第5輯

四万十市埋蔵文化財発掘調査報告

平成 23 年 (2011 年) 3 月 22 日発行

発行 四万十市教育委員会

〒 787-0012 高知県四万十市右山五月町 8-22
TEL 0880 (34) 7311

編集 生涯学習課 社会教育振興係

印刷 有限会社 西村謄写堂